千葉県教育振興財団調査報告第574集

首都圏中央連絡自動車道
埋蔵文化財調査報告書６

－ 袖ケ浦市下谷遺跡 －

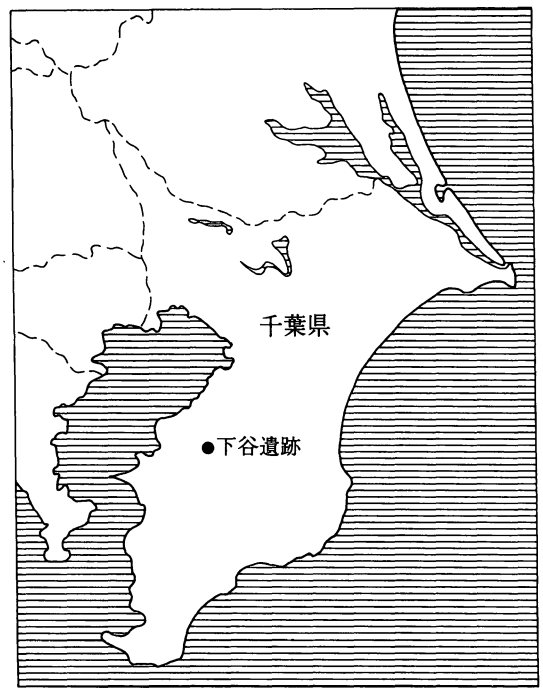
平成19年 3 月

国　土　交　通　省

財団法人　千葉県教育振興財団

首都圏中央連絡自動車道
埋蔵文化財調査報告書６

－ 袖ケ浦市下谷遺跡 －



序　文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第574集として、国土交通省の首都圏中央連絡自動車道建設事業に伴って実施した袖ケ浦市下谷遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、奈良・平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、方形墳墓が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成19年３月

財団法人　千葉県教育振興財団
理事長　岡　野　孝　之

凡　例

1　本書は、国土交通省による首都圏中央連絡自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書は、千葉県袖ケ浦市下宮田字下谷91ほかに所在する下谷遺跡（遺跡コード 229-033）を収録したものである。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。

5　本書の執筆・編集は、上席研究員　半澤幹雄、研究員　高梨友子が担当した。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、国土交通省関東地方整備局、袖ケ浦市教育委員会、田形孝一氏（県立房総のむら）の御指導・御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第１図　国土地理院発行　1/50,000地形図「姉崎」（NI-54-19-16）
　　1/50,000地形図「木更津」（NI-54-25-4）
第２図　国土地理院発行　1/25,000地形図「上総横田」（NI-54-19-16-4）
　　1/25,000地形図「木更津」（NI-54-25-4-2）
第３図　袖ケ浦市発行　　1/2,500地形図　№45（Ⅸ-ME-34-3）

8　周辺地形航空写真（図版1)は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。

9　本書で使用した図面の方位はすべて座標北である。測量値については日本測地系を使用した。

10　遺構名については原則的に発掘調査時の名称を使用したが、整理段階で欠番にしたものもあり、そこからの出土遺物は遺構外（グリッド）出土遺物として扱うこととした。発掘調査時と整理時における遺構の扱いは第２表のとおりである。なお、遺物への注記は、全て発掘調査時の名称で行っている。

11　遺物実測図断面の黒塗りは須恵器を表し、●は繊維混入を表す。

12　挿図に使用したスクリーントーン及び記号の用例は、各図に示したとおりである。

本文目次

第１章　はじめに……1
第１節　調査に至る経緯……1
第２節　遺跡の位置と周辺の環境……2
第３節　調査の概要……5
1　調査の経過……5
2　調査の方法……7
第４節　基本層序……9

第２章　検出された遺構と遺物……17
第１節　縄文時代の遺物……17
第２節　奈良・平安時代の遺構と遺物……24
1　竪穴住居跡……24
2　掘立柱建物跡……33
3　方形墳墓……37
4　溝状遺構……45
5　遺構外出土遺物……46
第３節　中世以降の遺構と遺物……47
1　土坑……47
2　溝状遺構……52

第３章　まとめ……57
第１節　縄文時代……57
第２節　奈良・平安時代……57
1　下谷遺跡の変遷……57
2　方形墳墓主体部（SK-003）について……58

報告書抄録……巻末

挿図目次

第１図　圏央道関連遺跡（1:50,000）……1
第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1:25,000）……3
第３図　調査区と周辺地形（1:2,500）……6
第４図　調査区とトレンチ設定図……8
第５図　基本層序……9
第６図　遺構配置図（A区）……10
第７図　遺構配置図（B区）……11
第８図　縄文時代の出土遺物……18
第９図　SI-001……25
第10図　SI-001カマド……25
第11図　SI-001遺物出土状況……26
第12図　SI-001カマド遺物出土状況……26
第13図　SI-001出土遺物……27
第14図　SI-012……28
第15図　SI-012カマド……28
第16図　SI-012遺物出土状況……29
第17図　SI-012出土遺物……30
第18図　SI-014……31
第19図　SI-014カマド……31
第20図　SI-014遺物出土状況……32
第21図　SI-014カマド遺物出土状況……32
第22図　SI-014出土遺物……33
第23図　SB-003（1）……34
第24図　SB-003（2）……35
第25図　SB-004……36
第26図　SB-004出土遺物……36
第27図　SS-001……37
第28図　SK-003……39
第29図　SK-003鉄釘出土状況……40
第30図　SK-003出土鉄釘（1）……43
第31図　SK-003出土鉄釘（2）……44
第32図　SK-004……45
第33図　SD-007出土遺物……45
第34図　奈良・平安時代の出土遺物……46
第35図　SK-001……48
第36図　SK-002……48
第37図　SK-005……48
第38図　SK-006・007……48
第39図　SK-008……50
第40図　SK-009・010……50
第41図　SK-011……50
第42図　SK-012・013……50
第43図　SK-014……51
第44図　SK-015……51
第45図　SK-016……51
第46図　SD-001出土遺物……52
第47図　ピット配置図（1）……54
第48図　ピット配置図（2）……55
第49図　ピット配置図（3）……56
第50図　SK-003木櫃推定復元図……59

表 目 次

第１表　下谷遺跡周辺の遺跡一覧表……2
第２表　下谷遺跡遺構一覧表……12
第３表　下谷遺跡出土縄文土器組成表……19
第４表　下谷遺跡出土礫組成表……21
第５表　SK-003出土貝類等重量表 ……42
第６表　SK-003出土掲載鉄釘計測表 ……44
第７表　下谷遺跡掲載土器観察表……61
第８表　下谷遺跡出土遺物組成表（遺構）……64
第９表　下谷遺跡出土遺物組成表（トレンチ・グリッド）……65

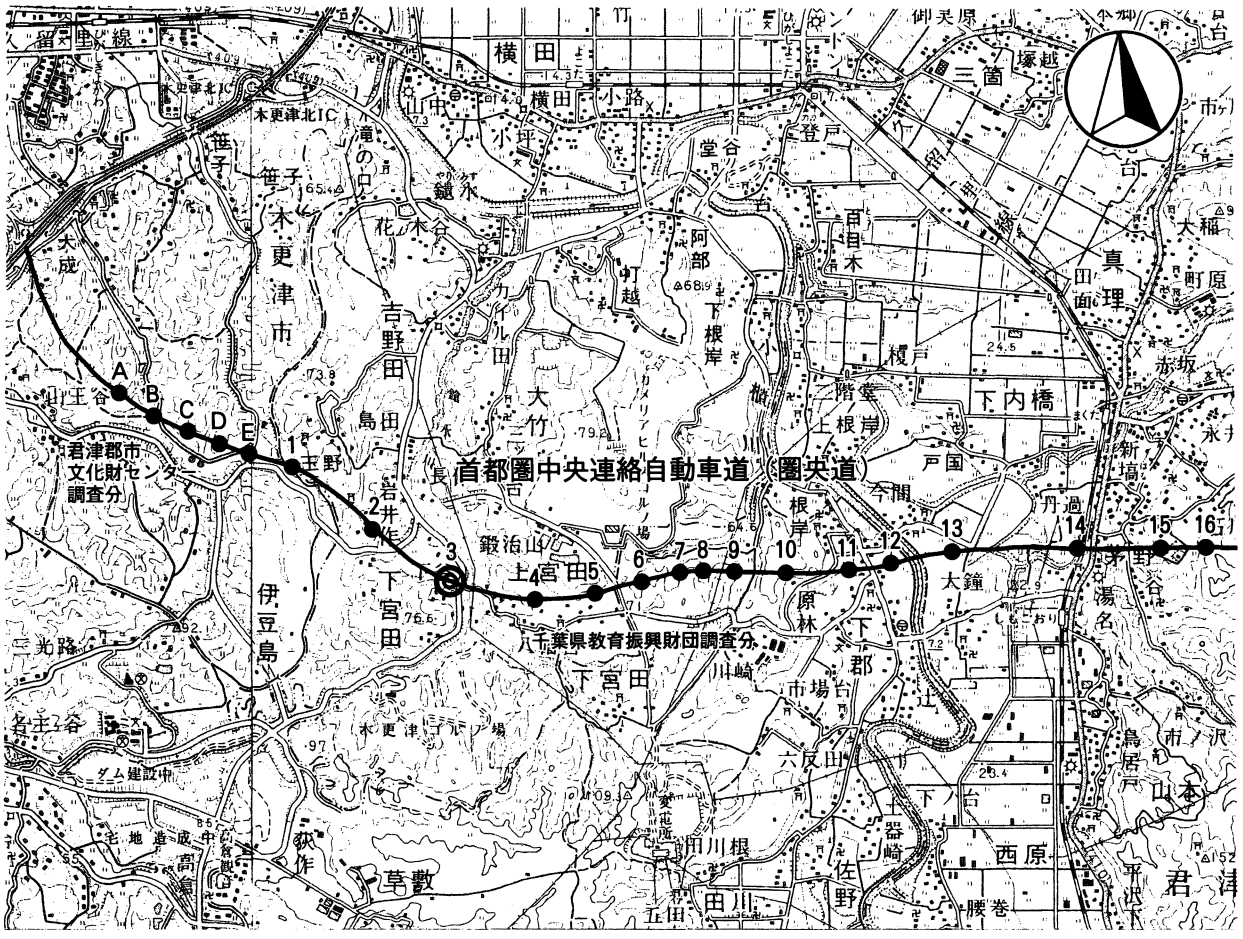
図 版 目 次

図版１　遺跡周辺航空写真（１：10,000）
図版２　SI-001完掘状況
SI-001カマド遺物出土状況
SI-001カマド完掘状況
図版３　SI-012完掘状況
SI-012遺物出土状況
SI-012カマド完掘状況
図版４　SI-014完掘状況
SI-014カマド完掘状況
SB-004完掘状況
図版５　SB-003検出状況
SB-003柱穴検出状況
SS-001完掘状況
図版６　SK-003土層断面
SK-003完掘状況
SK-004完掘状況
図版７　SK-001完掘状況
SK-002完掘状況
SK-008完掘状況
図版８　SK-009完掘状況
SK-010完掘状況
SK-011完掘状況
図版９　SK-012・013完掘状況
SK-015完掘状況
SD-001完掘状況
図版10　SD-002完掘状況
SD-003完掘状況
SD-005完掘状況
図版11　SD-007完掘状況
SD-007完掘状況
SD-009完掘状況
図版12　出土遺物
図版13　縄文土器
図版14　土師器
図版15　須恵器
図版16　鉄釘（表）
図版17　鉄釘（裏）

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

首都圏中央連絡自動車道（圏央道）は、都心から半径およそ40km～60kmの位置に計画された総延長約300kmに及ぶ環状の自動車専用道路である。千葉県内は、平成９年に開通した東京湾アクアラインで神奈川県と繋がり、房総半島を横断して太平洋側の茂原市に至り、東上総の台地を北上し、山武地域へとつながっていく。この路線のうち、袖ケ浦市から木更津市の区間がまず事業化された。用地内には数多くの遺跡が所在することから、その取扱いについて、千葉県教育委員会と国土交通省・東日本高速道路株式会社との間で慎重な協議が重ねられた。その結果、現状保存が困難な部分については、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなった。木更津ＪＣＴから約25kmの区間は東日本高速道路株式会社が事業主体となり、財団法人君津郡市文化財センターが発掘調査を実施し、それより東の区間については国土交通省が事業主体となり、財団法人千葉県教育振興財団が発掘調査を実施することとなった。



1,西御祈祷谷古墳群・新開１遺跡・新開２遺跡　2,南岩井作遺跡　3,下谷遺跡　4,上宮田台遺跡
5,猪尻遺跡　6,林遺跡　7,林遺跡(3)　8,林遺跡(2)　9,林遺跡(1)　10,根岸古墳群・根岸小妻遺跡
11,重三台遺跡　12,沢間２遺跡　13,沢間１遺跡　14,丹過遺跡　15,内屋敷遺跡(2)　16,内屋敷遺跡(1)
A,野洞遺跡　B,下野洞遺跡　C,巡礼街道遺跡２　D,巡礼街道遺跡１　E,玉ノ谷遺跡

第１図　圏央道関連遺跡（１：50,000）

第2節　遺跡の位置と周辺の環境（第2図、第1表）

下谷遺跡（1）の所在する袖ケ浦市は、房総半島のほぼ中心部に位置しており、西側は東京湾に面している。袖ケ浦市の中央には、清澄山を源とする小櫃川が東から西に向かって流れており、その北側と南側には広い沖積平野が広がっている。そしてその沖積平野の南側には、房総丘陵が展開している。下谷遺跡は、小櫃川支流鎗水川左岸の、複雑に解析された標高約60mの丘陵上に立地している。

下谷遺跡（1）の周辺には遺跡が多く分布しており、地域的な特徴がよくみられる。それらについて、発掘調査の行われた遺跡を中心に概観してみる。

旧石器時代は、遺跡周辺では関東ローム層の認められない場所も多いが、圏央道に関連する遺跡の調査などで、少しずつ報告例が増えている。下野洞遺跡（30）や野洞遺跡（31）では石器集中地点がいくつも検出され、ナイフ形石器など、黒曜石を主体とした石器が多量に出土した[1]。また、玉ノ谷遺跡（28）ではⅥ～Ⅸ層で剥片がまとまって出土し[2]、二重山遺跡（38）ではⅣ～Ⅴ層で石器集中地点と礫群が検出されている[3]。そのほか、滝ノ口向台遺跡（13）[4]や久野遺跡（43）[5]の上層調査で、ナイフ形石器が出土している。

縄文時代は、遺跡周辺では早期・前期の遺構・遺物が多く認められる。早期の遺構としては、玉ノ谷遺跡（28）、石仏遺跡（34）[6]で竪穴住居跡が、三ツ田台遺跡（17）[7]、上南原遺跡（18）[8]、猪尻遺跡（19）[9]、玉ノ谷遺跡（28）、上ノ山B遺跡（40）[10]で炉穴などの土坑が、笊田遺跡（16）[11]、猪尻遺跡（19）、林遺跡（20）[12]、大竹長作古墳群（24）[13]、石仏遺跡（34）、上ノ山B遺跡（40）、久野遺跡（43）などで礫群が検出されている。前期の遺構としては、中台A遺跡（5）[14]、玉ノ谷遺跡（28）、野洞遺跡（31）で竪穴住居跡が検出された。そのほか、遺構は検出されていないが、滝ノ口向台遺跡（13）や上桑田谷遺跡（32）[15]、下細野遺跡（35）[16]、御所塚遺跡（42）[17]などで早期に比定される土器や礫が出土している。また、新開1・2遺跡（27）[18]や巡礼街道遺跡（29）[19]では早期～前期の遺物包含層が検出されている。

第1表　下谷遺跡周辺の遺跡一覧表（第2図に対応）

1．下谷遺跡
2．順礼街道古墳
3．笹子城跡
4．山崎古墳群
5．中台A遺跡
6．中台B遺跡
7．四留作第1古墳群
8．四留作第2古墳群
9．椿古墳群
10．馬場作古墳群
11．大作古墳群
12．鬼塚古墳群
13．滝ノ口向台遺跡
14．滝ノ口向台古墳群
15．平ケ作古墳群
16．笊田遺跡
17．三ツ田台遺跡
18．上南原遺跡
19．猪尻遺跡
20．林遺跡
21．八幡台遺跡
22．上宮田台遺跡
23．嘉登遺跡
24．大竹長作古墳群
25．南岩井作遺跡
26．西御祈祷谷古墳群
27．新開1・2遺跡
28．玉ノ谷遺跡
29．巡礼街道遺跡
30．下野洞遺跡
31．野洞遺跡
32．上桑田谷遺跡
33．伊豆島貝塚
34．石仏遺跡
35．下細野遺跡
36．上名主ケ谷第1窯跡群
37．上名主ケ谷第2窯跡群
38．二重山遺跡
39．上ノ山A遺跡
40．上ノ山B遺跡
41．山ノ下製鉄遺跡
42．御所塚遺跡
43．久野遺跡

第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡（１：25,000）

縄文時代中期以降では、遺跡の対岸に位置する上宮田台遺跡（22）で、縄文時代後期～晩期の環状集落が調査されている。集落の中央部は窪地状を呈する。多量の土器や土製品、石器・石製品などが出土した[20]。そのほか、嘉登遺跡（23）[21]、久野遺跡（43）で中期の竪穴住居跡が、笊田遺跡（16）、三ツ田台遺跡（17）、嘉登遺跡（23）、石仏遺跡（34）で後期の竪穴住居跡がそれぞれ数軒ずつ検出されている。また、伊豆島貝塚（33）[22]は後期の地点貝塚として注目される。

続く弥生時代は、遺跡周辺では主に弥生時代後期～古墳時代前期にかけての居住域が小規模に展開する。ただし、小櫃川に近い遺跡では中期～後期の集落や墓域が営まれるようである。滝ノ口向台遺跡（13）では中期～後期の環濠を有する集落が、笊田遺跡（16）で中期の竪穴住居跡と方形周溝墓群が、中台Ａ遺跡（５）で中期の方形周溝墓が検出されている。

弥生時代後期とみられる竪穴住居跡が検出されたのは、中台Ａ遺跡（５）、中台Ｂ遺跡（６）[23]、四留作第１古墳群（７）[24]、椿古墳群（９）[25]、大作古墳群（11）[26]、三ツ田台遺跡（17）、新開１・２遺跡（27）などで、林遺跡（20）では弥生時代末期～古墳時代前期にかけての方形周溝墓群が検出された。

古墳時代になると、主に小櫃川沿いで大規模な古墳群が営まれるのが特徴的で、中には出現期古墳や前期古墳も含まれる。滝ノ口向台古墳群（14）の８号墳はレーダー探査結果により、県内最大の前方後方墳であることがほぼ確実視されている[27]。また、９号墳は、東海系土器や銅鏃などを出土した出現期古墳として知られている。椿古墳群（９）SX-3は前期の方墳で、やはり東海系土器や銅鏃、鉄剣、鉄槍などが出土している。

中期～後期の古墳・古墳群としては、前方後円墳を含み総数100基もの古墳で構成されるとみられる椿古墳群（９）をはじめ、順礼街道古墳（２）[28]、山崎古墳群（４）[29]、中台Ａ遺跡（５）、四留作第１古墳群（７）、四留作第２古墳群（８）[30]、馬場作古墳群（10）[31]、大作古墳群（11）、鬼塚古墳群（12）[32]、平ヶ作古墳群（15）、嘉登遺跡（23）など、枚挙にいとまがない。

後期～終末期と考えられる古墳も、主に鎗水川沿岸の遺跡で少しずつ営まれ、奈良・平安時代の墳墓に引き継がれていくようである。その過渡期の様子が猪尻遺跡（19）などで捉えられ、興味深い。

古墳時代の集落としては、遺跡周辺では前期が主体となるようである。中台Ａ遺跡（５）や三ツ田台遺跡（17）、猪尻遺跡（19）、新開１・２遺跡（27）、久野遺跡（43）などで、前期～後期の竪穴住居跡が数軒ずつ確認されたのをはじめ、笊田遺跡（16）や嘉登遺跡（23）、石仏遺跡（34）で前期～中期とみられる竪穴住居跡が数十軒単位で確認された。また、下野洞遺跡（30）では、手捏土器などを献納した、前期の祭祀遺構とみられる遺構が検出されている。

奈良・平安時代以降は、遺跡周辺は一般的な集落が少ない状況である。笊田遺跡（16）や野洞遺跡（31）などで竪穴住居跡が検出された以外は、一般的な集落はほとんどみられなくなる。二重山遺跡（38）や久野遺跡（43）で竪穴住居跡群が検出されているが、これは一般の集落とは異なる、工人集団の集落と推定されるものである。この時代に多く認められるのは、製鉄関連遺跡などの生産関連遺跡や須恵器・瓦の窯跡、そして墓域である。

製鉄関連遺跡は、精錬炉の検出された二重山遺跡（38）、山ノ下製鉄遺跡（41）[33]などをはじめ、上ノ山Ａ遺跡（39）[34]、上ノ山Ｂ遺跡（40）、久野遺跡（43）などで、鍛冶工房や鍛冶関連施設が確認されている。

窯跡は、上名主ヶ谷第１窯跡群（36）[35]、上名主ヶ谷第２窯跡群（37）[36]などがあり、須恵器窯や瓦窯、須恵器瓦共用窯などが検出された。

奈良・平安時代の墓域としては、火葬墓、方形墳墓などが多く認められるのが特徴的である。火葬墓、方形墳墓などが検出された遺跡としては、椿古墳群（９）、三ツ田台遺跡（17）、猪尻遺跡（19）、林遺跡（20）、嘉登遺跡（23）、新開１・２遺跡（27）、玉ノ谷遺跡（28）、巡礼街道遺跡（29）、下野洞遺跡（30）、野洞遺跡（31）、石仏遺跡（34）などが挙げられ、このうち野洞遺跡（31）では、集落域と墓域とが別々の地区に営まれている様子が捉えられた。墳墓内の埋葬施設と考えられる土坑からは、何も出土していない例も多いが、猪尻遺跡（19）では火葬骨の納められた骨蔵器や粘土櫃が出土したほか、三ツ田台遺跡（17）や下野洞遺跡（30）で石櫃が出土した。このほか、墓域ではないが、久野遺跡（43）で複数の基壇建物跡が検出され、山寺・山林寺院と考えられることが特筆されよう。

中世以降は、上宮田台遺跡（22）で台地整形区画や地下式坑などが検出されている。また、真里谷武田氏との関連が指摘され、２度の落城が伝えられる笹子城跡（３）[37]の一部が発掘調査され、15世紀後半～16世紀を中心とする多量の遺物を伴った整地面が確認された。そのほか、南岩井作遺跡（25）[38]で中・近世の掘立柱建物跡が、西御祈祷谷古墳群（26）[39]では、８基からなる塚群が調査されている。

第３節　調査の概要（第３・４図）

１　調査の経過

下谷遺跡の発掘調査は、平成15年度に行われた。整理作業は平成18年度に実施し、同年度中に報告書を刊行した。発掘調査及び整理作業に関わる各年度の作業内容及び担当職員は以下のとおりである。

発掘調査

○平成15年度

期　間　平成15年４月７日～平成15年５月30日

内　容　確認調査　上層 220㎡／2,200㎡

下層　88㎡／2,200㎡

本調査　上層　2,000㎡

下層　　0㎡

組　織　調査部長　斎木　勝　　南部調査事務所長　鈴木　定明

担当者　上席研究員　石川　誠

整理作業

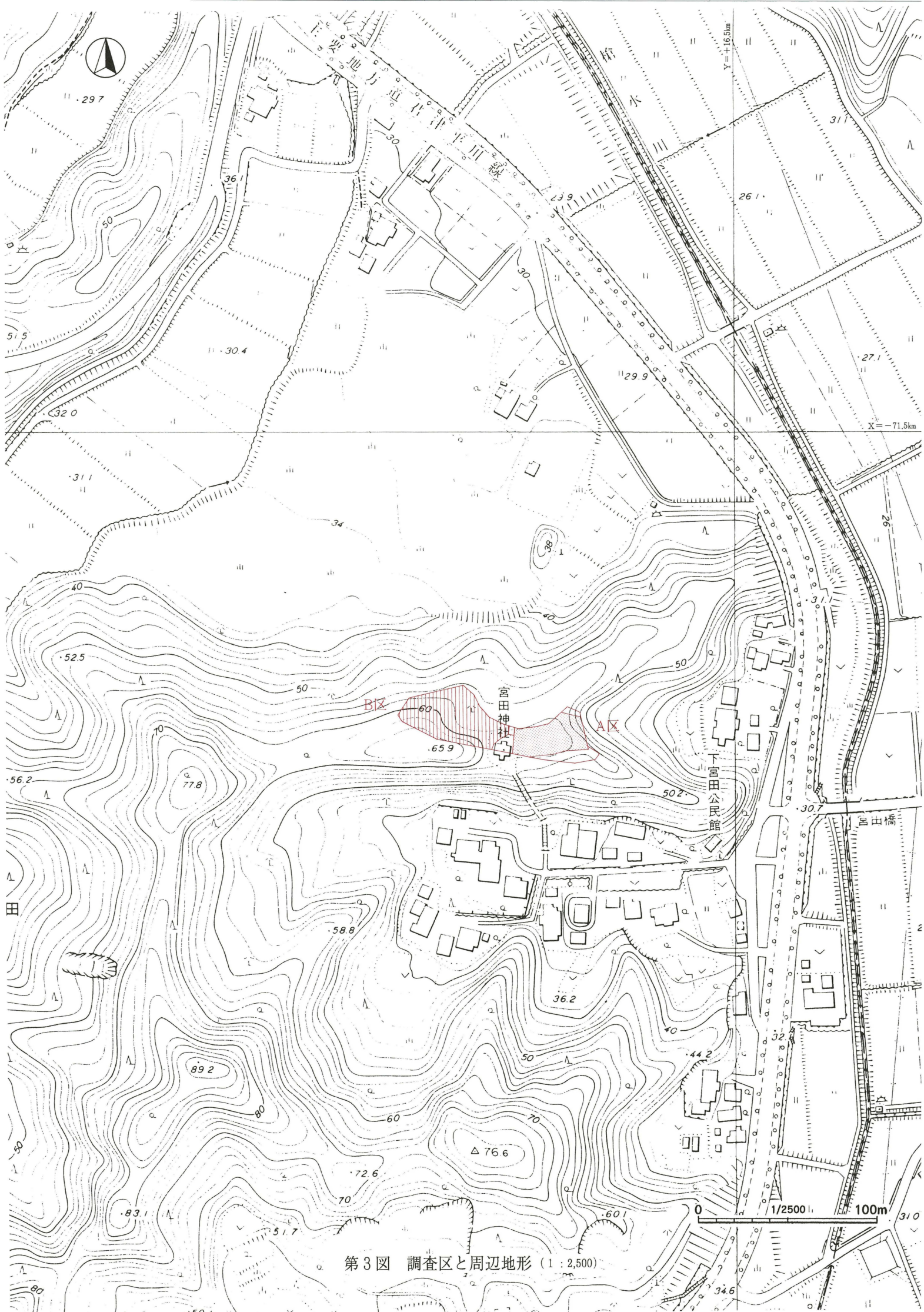
○平成18年度

期　間　平成18年８月１日～平成18年11月30日

内　容　水洗・注記～報告書刊行

組　織　調査研究部長　矢戸　三男　　南部調査事務所長　高田　博

担当者　上席研究員　麻生正信、上席研究員　半澤幹雄、研究員　高梨　友子



第３図　調査区と周辺地形（１：2,500）

2　調査の方法

(1) グリッド設定

首都圏中央連絡自動車道建設に関わる発掘調査では、遺跡の数も多く、遺跡の面積も大きいため、それぞれの遺跡毎に公共座標に基づいたグリッド設定を行っている。

下谷遺跡では、発掘調査開始に当たって、X＝－71.620km、Y＝＋16.300kmを起点とした20ｍ×20ｍの方眼を被せ、グリッド設定を行った。20ｍ×20ｍの方眼を大グリッドとし、北から南に１、２、３…、西から東にA、B、C…、と呼称し、更に大グリッドの中を２ｍ×２ｍの小グリッドに100分割して、北西隅から00、01、02…、南東隅を99とした。これにより、大グリッドと小グリッドの組合せで2B-68、4F-05というように、小地区名の表示を行えるようにした。

(2) 確認調査

調査区は、東西に延びる丘陵痩せ尾根上にほぼ東西方向に長く位置しており、中央部には宮田神社が現存する。調査区の周囲はほとんど急斜面であり、調査区内も平坦地は僅かである。標高は中央部の宮田神社の付近が最も高い。

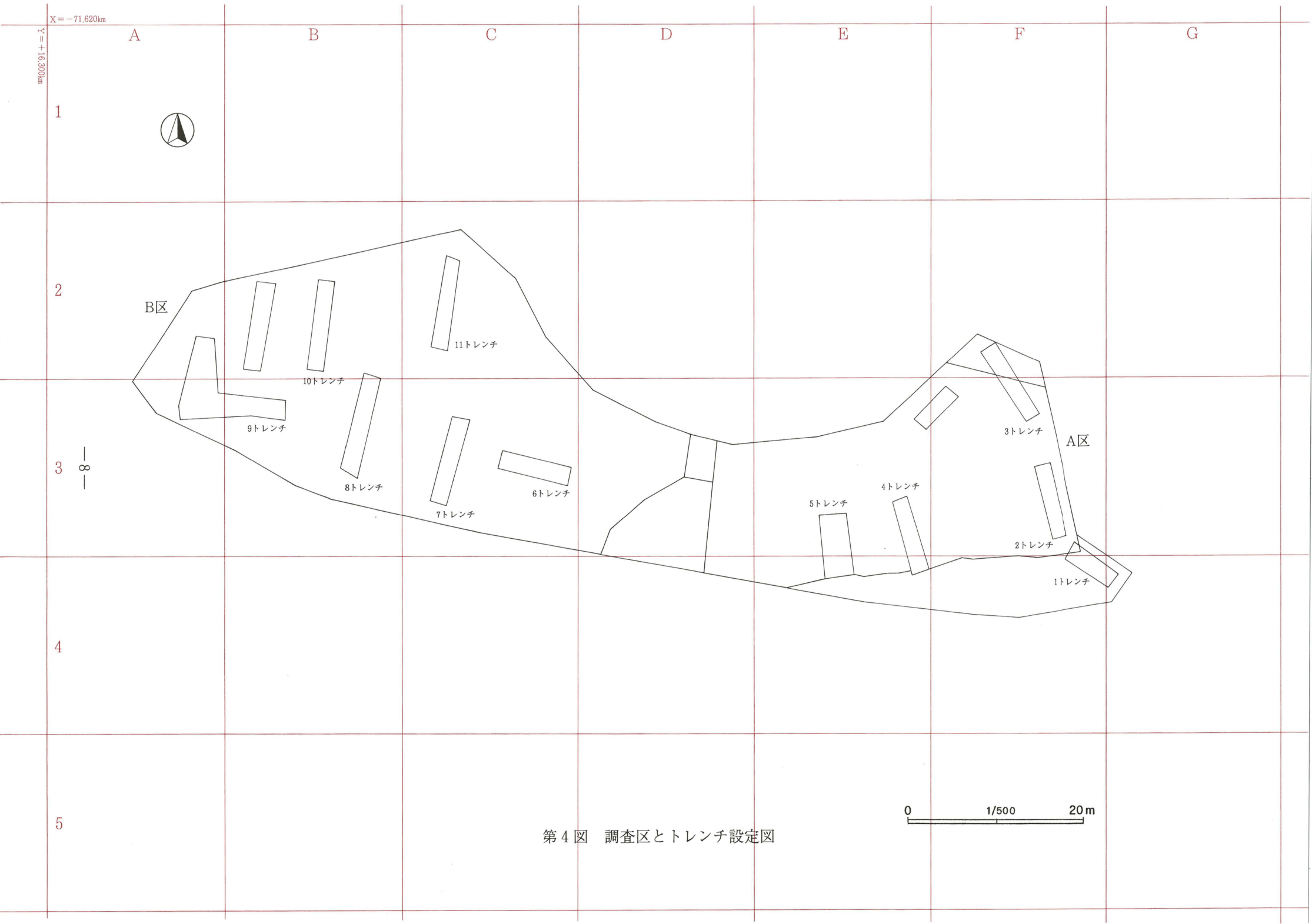
上層の確認調査に当たっては、等高線に直交方向、つまり南北方向に長いトレンチを多く設定した。調査対象面積2,200㎡の10％に当たる220㎡について確認調査を行い、その結果、調査区のほぼ全体に遺構が確認され、宮田神社の部分と東側の一部の部分を除いた2,000㎡について、引き続き本調査を行うこととなった。

下層の確認調査は、上層の本調査終了後に行った。２ｍ×２ｍのグリッドを調査区内に設定し、調査対象面積2,200㎡の４％に当たる88㎡の確認調査を行ったが、遺構・遺物は検出されず、下層については確認調査で終了することとなった。

(3) 本調査

本調査は、宮田神社を挟み東西２地区について行った。２地区の本調査区のうち、東側をＡ区、西側をＢ区と呼称した。両区とも縁辺部が急斜面となっており、安全確保のため発掘調査の行えない部分が生じたが、奈良・平安時代を中心とする遺構・遺物が検出された。

遺構は、種類毎に掘立柱建物跡＝SB、溝状遺構＝SD、土坑＝SK、ピット＝SH、方形周溝状遺構＝SSなどの略称を接頭に付し、それぞれ001から遺構番号を順に付して調査を行った。本報告でも、原則として発掘調査時の遺構名をそのまま使用しているが、整理作業時に検討を加えた結果、遺構と考えるには根拠の乏しいものがあり、それらについては欠番とした。ただし、遺物への注記は全て調査時の遺構名で行っているため、遺構として調査されたものは全て一覧表として第２表にまとめ、調査時と報告書における扱いの対応関係を明記した。



第４図　調査区とトレンチ設定図

第4節　基本層序

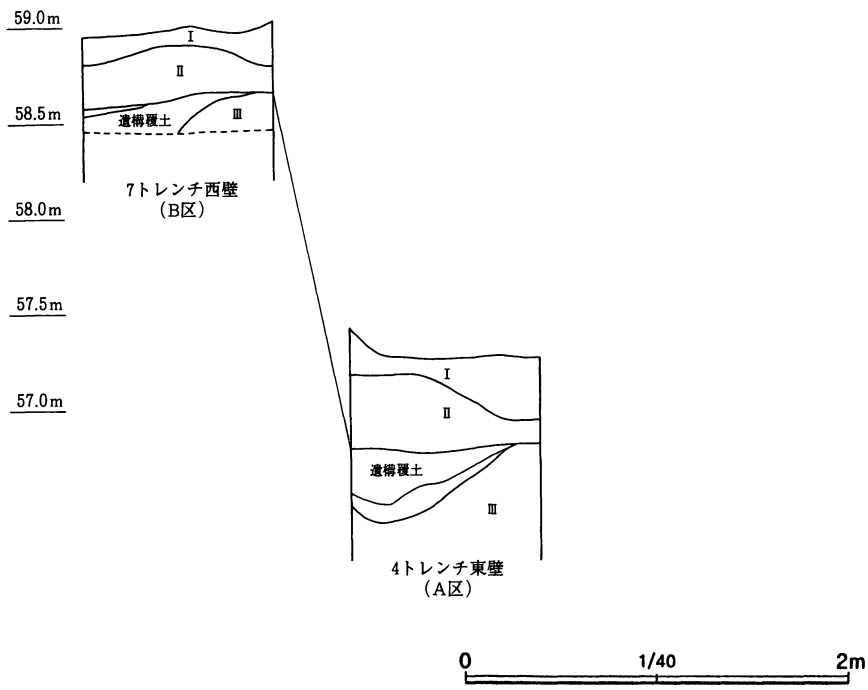
下谷遺跡の基本層序は第5図のとおりである。遺構はⅢ層上面で検出された。

なお、下層については、確認調査時に、立川ローム層下に灰白色の粘土層の堆積が確認された。

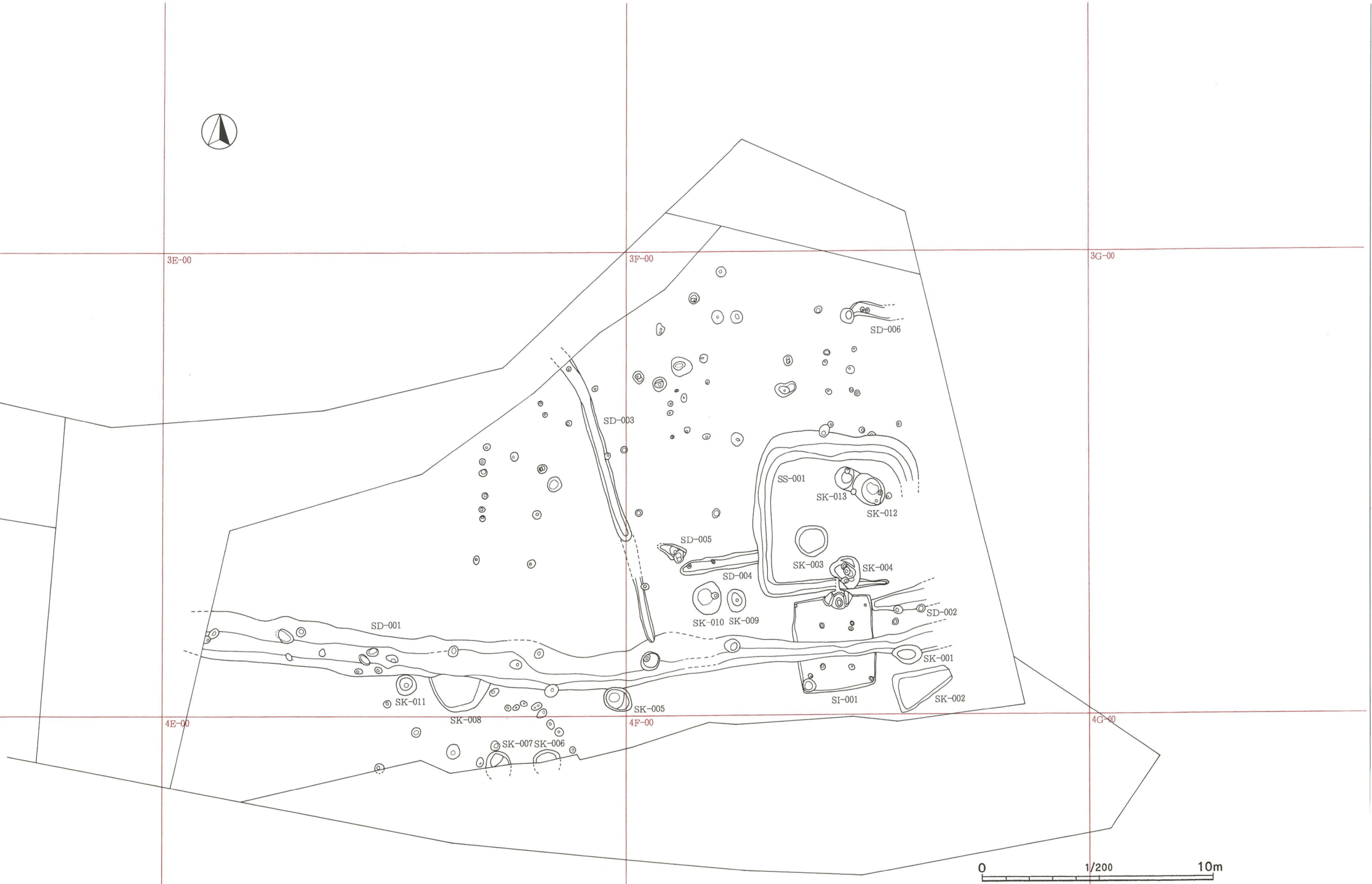
Ⅰ層（黒褐色土層）　表土（腐葉土化）

Ⅱ層（暗褐色土層）　焼土粒（1㎜～3㎜大）・炭化粒（1㎜～3㎜大）少散

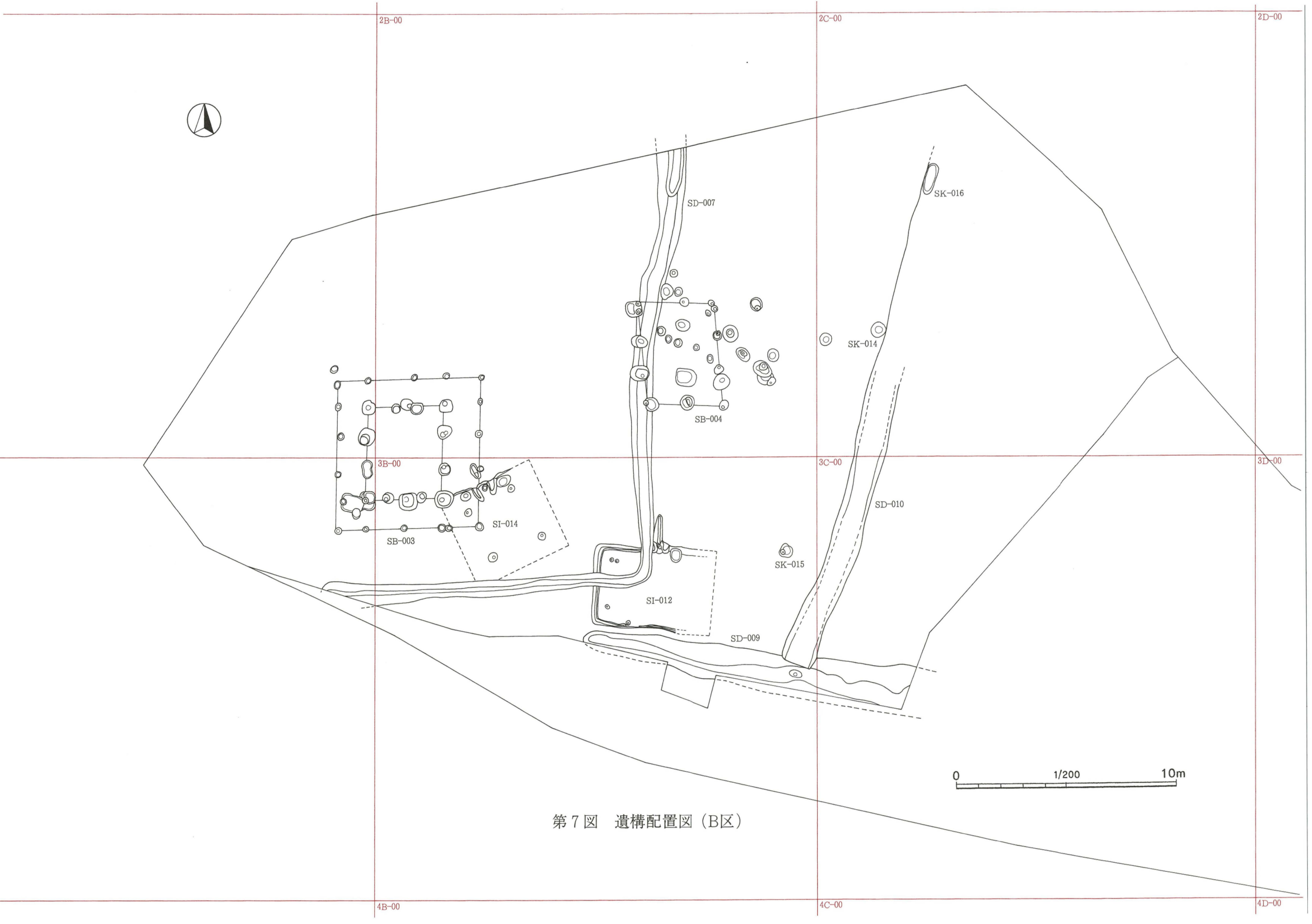
Ⅲ層（褐色土層）　ソフトローム



第5図　基本層序


3E-00
3F-00
3G-00
4E-00
4F-00
4G-00
SD-006
SD-003
SS-001
SK-013
SK-012
SD-005
SK-003
SK-004
SD-004
SK-010
SK-009
SD-002
SD-001
SK-001
SK-011
SK-008
SK-005
SI-001
SK-002
SK-007
SK-006
0
1/200
10m

第６図　遺構配置図（A区）


2B-00
2C-00
2D-00
3B-00
3C-00
3D-00
4B-00
4C-00
4D-00
SD-007
SK-016
SK-014
SB-004
SD-010
SI-014
SB-003
SK-015
SI-012
SD-009
0
1/200
10m

第７図　遺構配置図（B区）

第2表　下谷遺跡遺構一覧表

地区	報告書遺構番号		調査時遺構番号		所在グリッド	平面形態	大きさ(m)	検出面からの深さ(m)	時代	性格	備考
	種別	番号	種別	番号							
	欠番		SB	001							遺構の根拠薄弱
	欠番		SB	002							遺構の根拠薄弱
B	SB	003	SB	003	2A-89・99、2B-80～82、3A-09・19、3B-00～02・10～12	2間×3間、四面廂			平安	掘立柱建物跡	SD-007を伴う、SI-012を切る
B	SB	004	SB	004	2B-65～67・75～77・85～87	2間×3間			奈良・平安	掘立柱建物跡	SD-007に切られる
A	SD	001	SD	001	3E-71～73・80～83・85～89・93・95～99、3F-08・09・18・19・28・38・48・58・68	直線状	32.00×1.80	0.48	中・近世以降	溝状遺構	
A	SD	002	SD	002	3F-75・76	直線状	2.50×0.80	0.16	中・近世以降	溝状遺構	
A	SD	003	SD	003	3E-28・29・38・39・49・59・69、3F-50・60・70・80	直線状	12.50×0.50	0.08	中・近世以降	溝状遺構	
A	SD	004	SD	004	3F-61・62	直線状	3.50×0.70	0.08	中・近世以降	溝状遺構	
A	SD	005	SD	005	3F-60・61	直線状	1.10×0.70	0.06	中・近世以降	溝状遺構	
A	SD	006	SD	006	3F-14・15	直線状	1.90×0.60	0.10	中・近世以降	溝状遺構	
B	SD	007	SD	007	2B-36・46・56・65・66・75・76・85・86・95・96、3A-28・29・38・39、3B-20～26・30～34	L字状	34.00×1.20	0.65	平安	溝状遺構	SB-003に伴う
	欠番		SD	008							SD-009の上層、遺物は3B-49へ
B	SD	009	SD	009	3B-34・35・44・45・64・74・84・85・94・95、3C-40～42・50・51	直線状	15.00×2.00	0.90	中・近世以降	溝状遺構	
B	SD	010	SD	010	2C-32・42・51・52・61・71・81・90・91、3B-39・49、3C-00・01・10・11・20・30・40	直線状	23.00×1.40	0.40	中・近世以降	溝状遺構	
A	SH	001	SH	001	3F-34	楕円形	0.50×0.40	0.40	不明	ピット	
	欠番		SH	002							SK-004内窪み、遺物は3F-64へ
	欠番		SH	003							SK-004内窪み
	欠番		SH	004							SK-004内窪み
A	SH	005	SH	005	3F-55	円形	0.30×0.25	0.24	不明	ピット	
A	SH	006	SH	006	3F-55	円形	0.40×0.35	0.22	不明	ピット	
A	SH	007	SH	007	3F-75	円形	0.45×0.35	0.11	不明	ピット	
A	SH	008	SH	008	3F-75・85	円形	0.35×0.30	0.09	不明	ピット	
A	SH	009	SH	009	3F-76	円形	0.35×0.30	0.39	不明	ピット	
A	SH	010	SH	010	3F-80・90	円形	0.90×0.75	0.79	不明	ピット	
A	SH	011	SH	011	3E-98	円形	0.65×0.55	0.43	不明	ピット	
A	SH	012	SH	012	3E-88	円形	0.40×0.35	0.21	不明	ピット	
A	SH	013	SH	013	3E-87	円形	0.60×0.45	0.59	不明	ピット	
A	SH	014	SH	014	3E-97	円形	0.40×0.30	0.35	不明	ピット	
A	SH	015	SH	015	3E-86	円形	0.40×0.35	0.35	不明	ピット	
A	SH	016	SH	016	3E-86	円形	0.50×0.40	0.27	不明	ピット	
A	SH	017	SH	017	4E-06	円形	0.65×0.60	0.36	不明	ピット	
A	SH	018	SH	018	3F-82	円形	0.70×0.60	0.10	不明	ピット	
	欠番		欠番								
A	SH	020	SH	020	4E-05	円形	0.45×0.40	0.20	不明	ピット	
A	SH	021	SH	021	4E-14	不明	0.40×(0.30)	0.25	不明	ピット	
A	SH	022	SH	022	3E-94	円形	0.35×0.35	0.06	不明	ピット	
A	SH	023	SH	023	3E-84・85	楕円形	0.55×0.30	0.37	不明	ピット	

地区	報告書遺構番号		調査時遺構番号		所在グリッド	平面形態	大きさ(m)	検出面からの深さ(m)	時代	性格	備考
	種別	番号	種別	番号							
A	SH	024	SH	024	3E-84	楕円形	0.55×0.35	0.24	不明	ピット	
A	SH	025	SH	025	3E-84・94	円形	0.35×0.25	0.33	不明	ピット	
A	SH	026	SH	026	3E-84	楕円形	0.60×0.35	0.13	不明	ピット	
A	SH	027	SH	027	3E-94	円形	0.35×0.30	0.13	不明	ピット	
A	SH	028	SH	028	3E-83	円形	0.40×0.30	0.12	不明	ピット	
A	SH	029	SH	029	3E-82・83	円形	0.45×0.45	0.57	不明	ピット	
A	SH	030	SH	030	3E-82	楕円形	0.75×0.55	0.53	不明	ピット	
A	SH	031	SH	031	3E-82	楕円形	0.35×0.25	0.61	不明	ピット	
A	SH	032	SH	032	3E-81	楕円形	0.50×0.25	0.18	不明	ピット	
A	SH	033	SH	033	3E-80	不明	0.36×(0.20)	0.08	不明	ピット	
A	SH	034	SH	034	3F-01・11	円形	0.50×0.50	0.23	不明	ピット	
A	SH	035	SH	035	3F-01・02	円形	0.45×0.45	0.23	不明	ピット	
A	SH	036	SH	036	3F-12	円形	0.55×0.55	0.19	不明	ピット	
A	SH	037	SH	037	3F-60・61	不明	0.64×(0.54)	0.27	不明	ピット	
A	SH	038	SH	038	3F-61	不明	0.96×(0.48)	0.39	不明	ピット	
A	SH	039	SH	039	3F-61	不明	0.60×(0.48)	0.40	不明	ピット	
	欠番		SH	040							SD-001内窪み
	欠番		SH	041							SD-001内窪み、遺物は3F-74へ
	欠番		SH	042							SK-004内窪み
A	SH	043	SH	043	3E-46・47	円形	0.30×0.30	0.15	不明	ピット	
A	SH	044	SH	044	3E-46	円形	0.35×0.30	0.42	不明	ピット	
A	SH	045	SH	045	3E-56	円形	0.30×0.30	0.12	不明	ピット	
A	SH	046	SH	046	3E-57	円形	0.30×0.30	0.30	不明	ピット	
A	SH	047	SH	047	3E-47	円形	0.40×0.35	0.41	不明	ピット	
A	SH	048	SH	048	3E-48・58	円形	0.65×0.65	0.18	不明	ピット	
A	SH	049	SH	049	3E-49	円形	0.30×0.25	0.22	不明	ピット	
A	SH	050	SH	050	3E-49	円形	0.30×0.30	0.15	不明	ピット	
A	SH	051	SH	051	3F-14	円形	0.30×0.30	0.07	不明	ピット	
A	SH	052	SH	052	3F-14	円形	0.60×0.55	0.15	不明	ピット	
A	SH	053	SH	053	3F-15	円形	0.20×0.15	0.11	不明	ピット	
A	SH	054	SH	054	3F-15	円形	0.20×0.20	0.31	不明	ピット	
A	SH	055	SH	055	3F-23	円形	0.45×0.40	0.32	不明	ピット	
A	SH	056	SH	056	3F-24	円形	0.30×0.20	0.13	不明	ピット	
A	SH	057	SH	057	3F-24	円形	0.40×0.35	0.12	不明	ピット	
A	SH	058	SH	058	3F-24・34	円形	0.25×0.20	0.13	不明	ピット	
A	SH	059	SH	059	3F-35	不明	0.36×(0.22)	0.08	不明	ピット	
A	SH	060	SH	060	3F-35	円形	0.25×0.25	0.07	不明	ピット	
B	SH	061	SH	061	2B-77・78	円形	0.70×0.70	0.42	不明	ピット	
B	SH	062	SH	062	2B-78・79・89	楕円(3基)	1.25×0.80	0.52	不明	ピット	
B	SH	063	SH	063	2C-70	円形	0.60×0.55	0.40	不明	ピット	
B	SH	064	SH	064	2B-77	円形	0.35×0.30	0.29	不明	ピット	
B	SH	065	SH	065	2B-77	円形	0.35×0.35	0.34	不明	ピット	
B	SH	066	SH	066	2B-86・87	長方形	1.00×0.75	0.63	不明	ピット	
B	SH	067	SH	067	2B-87	楕円形	0.75×0.60	0.58	不明	ピット	
	欠番		SH	068							SB-004柱穴
B	SH	069	SH	069	2B-78	楕円形	0.75×0.50	0.15	不明	ピット	
B	SH	070	SH	070	2B-78・79	円形	0.55×0.55	0.19	不明	ピット	
B	SH	071	SH	071	2B-76	円形	0.45×0.35	0.14	不明	ピット	
B	SH	072	SH	072	2B-76	円形	0.35×0.30	0.15	不明	ピット	

地区	報告書遺構番号		調査時遺構番号		所在グリッド	平面形態	大きさ(m)	検出面からの深さ(m)	時代	性格	備考
	種別	番号	種別	番号							
B	SH	073	SH	073	2B-76	円形	0.45×0.40	0.66	不明	ピット	
B	SH	074	SH	074	2B-66・67・76・77	楕円形	0.65×0.50	0.21	不明	ピット	
B	SH	075	SH	075	2B-67	円形	0.30×0.25	0.19	不明	ピット	
	欠番		SH	076							SB-004柱穴
B	SH	077	SH	077	2B-68	円形	0.60×0.55	0.54	不明	ピット	
B	SH	078	SH	078	2B-66	円形	0.35×0.35	0.35	不明	ピット	
B	SH	079	SH	079	2B-66	楕円形	0.70×0.55	0.34	不明	ピット	
B	SH	080	SH	080	2B-56	円形	0.35×0.35	0.30	不明	ピット	
A	SI	001	SI	001	3F-73～75・83～85・93～95	長方形	4.10×3.40	0.30	奈良	竪穴住居跡	
	欠番		SI	002							遺構の根拠薄弱、遺物は3F-94へ
	欠番		SI	003							遺構の根拠薄弱、遺物は3F-65へ
	欠番		SI	004							遺構の根拠薄弱、遺物は3F-71へ
	欠番		欠番								
	欠番		SI	006							遺構の根拠薄弱
	欠番		SI	007							遺構の根拠薄弱、遺物は4E-07へ
	欠番		SI	008							遺構の根拠薄弱、遺物は3F-20へ
	欠番		SI	009							遺構の根拠薄弱、遺物は3E-38へ
	欠番		SI	010							遺構の根拠薄弱、遺物は3F-22へ
	欠番		SI	011							遺構の根拠薄弱、遺物は3F-31へ
B	SI	012	SI	012	3B-15・16・24～27・34～37	長方形	(5.40)×3.80	0.30	平安	竪穴住居跡	
	欠番		SI	013							遺構の根拠薄弱、遺物は2B-72へ
B	SI	014	SI	014	2B-92～94、3B-03～05	正方形？	(4.40)×(4.40)	0.15	奈良	竪穴住居跡	
A	SK	001	SK	001	3F-85・86	楕円形	1.35×0.80	0.42	不明	土坑	SD-001に切られる
A	SK	002	SK	002	3F-95・96	三角形	2.55×1.60	0.46	不明	土坑	
A	SK	003	SK	003	3F-53・54・63・64	隅丸方形	1.38×1.25	0.37	奈良	土坑	SS-001に伴う火葬墓
A	SK	004	SK	004	3F-64・65・74・75	不整形	1.45×1.20	0.50	奈良	土坑	SS-001に伴う主体部
A	SK	005	SK	005	3E-99、3F-90	楕円形	1.30×1.00	0.33	不明	土坑	
A	SK	006	SK	006	4E-08・18	不明	1.20×(0.50)	0.21	不明	土坑	南側調査区外
A	SK	007	SK	007	4E-07・17	不明	1.10×(0.65)	0.35	不明	土坑	南側調査区外
A	SK	008	SK	008	3E-95～97	不明	2.50×(1.50)	0.38	不明	土坑	SD-001と重複
A	SK	009	SK	009	3F-72	楕円形	1.00×0.80	0.44	不明	土坑	
A	SK	010	SK	010	3F-71	円形	1.35×1.20	0.33	不明	土坑	
A	SK	011	SK	011	3E-85	円形	0.90×0.85	0.45	不明	土坑	
A	SK	012	SK	012	3F-44・45・54・55	楕円形	1.50×1.20	0.41	不明	土坑	
A	SK	013	SK	013	3F-44・54	楕円形	0.95×0.75	0.26	不明	土坑	
B	SK	014	SK	014	2C-71	円形	0.70×0.70	0.16	不明	土坑	
B	SK	015	SK	015	3B-29	円形	0.60×0.60	0.17	不明	土坑	焼土散布あり、炉跡？
B	SK	016	SK	016	2C-32・42	長楕円形	1.40×0.45	0.16	不明	土坑	
A	SS	001	SS	001	3F-33～35・42～46・52～56・62～66・72～75	正方形	5.50×5.11	0.26	奈良	方形墳墓	SK-003・004を伴う

注1　渡邉祐二・松本　勝・斉藤礼司郎・竹内順一・米倉　薫　2005　『首都圏中央連絡自動車道（木更津～東金）埋蔵文化財調査報告書2－千葉県木更津市巡礼街道遺跡1・巡礼街道遺跡2・下野洞遺跡・野洞遺跡－』財団法人君津郡市文化財センター
2　松本　勝・米倉　薫　2004　『首都圏中央連絡自動車道（木更津～東金）埋蔵文化財調査報告書1－千葉県木更津市玉ノ谷遺跡－』財団法人君津郡市文化財センター
3　神野　信・半澤幹雄　1997　『矢那川ダム埋蔵文化財調査報告書1－木更津市二重山遺跡－』財団法人千葉県文化財センター
4　小高春雄　1993　『滝ノ口向台遺跡・大作古墳群』財団法人千葉県文化財センター
5　小林清隆・新田浩三・糸原　清・吉野健一　1999　『矢那川ダム埋蔵文化財調査報告書2－木更津市久野遺跡－』財団法人千葉県文化財センター
6　諸墨知義　1991　『君津郡市文化財センター年報№9－平成2年度－』財団法人君津郡市文化財センター
7　田形孝一編　1991　『笊田遺跡・三ツ田台遺跡・大竹古墳群(1)』財団法人君津郡市文化財センター
8　井上　賢・稲葉昭智　1995　『大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅳ－向神納里遺跡・上南原遺跡・狐谷遺跡・大竹古墳群－』財団法人君津郡市文化財センター
9　小高春雄　2005　『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書3－袖ケ浦市猪尻遺跡－』財団法人千葉県教育振興財団
10　安藤道由・中能　隆　1996　『上ノ山A・上ノ山B・下根田A・下根田B・御所塚遺跡』財団法人君津郡市文化財センター
11　注7に同じ
12　井口　崇　1987　『林遺跡』財団法人君津郡市文化財センター
能城秀喜　1994　『林遺跡Ⅱ』財団法人君津郡市文化財センター
中能　隆　1999　『林遺跡Ⅲ』財団法人君津郡市文化財センター
13　西原崇浩　1994　『嘉登遺跡・大竹長作古墳群』財団法人君津郡市文化財センター
14　福田　誠　1993　『中台A遺跡』財団法人千葉県文化財センター
山本哲也　1995　「中台A遺跡」『君津郡市文化財センター年報№12－平成5年度－』財団法人君津郡市文化財センター
斉藤礼司郎　1996　「中台A遺跡」『君津郡市文化財センター年報№13－平成6年度－』財団法人君津郡市文化財センター
財団法人君津郡市文化財センター　1999　「中台A遺跡」『君津郡市文化財センター年報№16－平成9年度－』
15　伊藤聖一　1980　「木更津市上桑田谷遺跡採集資料」『さざなみ』19号
16　能城秀喜　1993　「下細野遺跡」『君津郡市文化財センター年報№11－平成4年度－』財団法人君津郡市文化財センター
17　伊藤聖一　1979　「木更津市高倉御所塚遺跡採集資料」『さざなみ』16号
18　土屋治雄・半澤幹雄・高梨友子　2004『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書1－袖ケ浦市南岩井作遺跡（吉野田遺跡）・西御祈祷谷古墳群・新開1遺跡、木更津市新開2遺跡－』財団法人千葉県文化財センター
19　注1に同じ
20　財団法人千葉県文化財センター　2004　『千葉県文化財センター年報№28－平成14年度－』
21　注13に同じ
22　木更津市教育委員会　1990　『木更津市内遺跡発掘調査報告書－伊豆島貝塚・宮脇遺跡－』
23　山本哲也　1995　「中台B遺跡」『君津郡市文化財センター年報№12－平成5年度－』財団法人君津郡市文化財センター

24　豊巻幸正　1988　『四留作第１古墳群第１号墳』財団法人君津郡市文化財センター
西原崇浩　1999　『笹子遺跡群発掘調査報告書Ⅰ　四留作第１古墳群第12・13号墳　四留作遺跡（古墳下層遺構)』木更津市教育委員会
財団法人君津郡市文化財センター　1999　「笹子遺跡群　四留作第１古墳群」『君津郡市文化財センター年報№16－平成９年度－』
25　小久貫隆史・高梨友子　2001　『東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書８－袖ケ浦市椿古墳群－』財団法人千葉県文化財センター
26　注４に同じ
27　萩原恭一・白井久美子・亀井宏行　2000「君津市浅間神社古墳測量調査報告」『千葉県史研究』第８号
28　三浦和信・永浜真理子編　1980　『順礼街道古墳』順礼街道古墳調査団
29　斉藤礼司郎　1996　「山崎古墳群」『君津郡市文化財センター年報№13－平成６年度－』財団法人君津郡市文化財センター
30　當眞嗣史　1992『四留作第２古墳群第１古墳　四留作第１号塚・第２号塚』財団法人君津郡市文化財センター
斉藤礼司郎　1996　「四留作第２古墳群　四留作塚群」『君津郡市文化財センター年報№13－平成６年度－』財団法人君津郡市文化財センター
31　財団法人君津郡市文化財センター　1997「馬場作古墳群」『君津郡市文化財センター年報№14－平成７年度－』
財団法人君津郡市文化財センター　1998　「馬場作古墳群２・４号墳」『君津郡市文化財センター年報№15－平成８年度－』
32　溝口勝美・岸本雅人ほか　1980　『鬼塚古墳』鬼塚古墳発掘調査会
33　中能　隆　1995　『山ノ下製鉄遺跡』財団法人君津郡市文化財センター
34　注10に同じ
35　大川　清　1967　「木更津矢那瓦窯址」『古代』49・50号
佐久間　豊　1989　『木更津市上名主ヶ谷窯跡確認調査報告書』千葉県教育委員会
36　注35に同じ
37　相京邦彦　2004　『東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書14－木更津市笹子城跡－』財団法人千葉県文化財センター
38　注18に同じ
39　注18に同じ

第２章　検出された遺構と遺物

第１節　縄文時代の遺物（第８図、図版12・13）

今回の調査区内から出土した縄文土器は、全て破片で、総点数180点、総重量2,371ｇである（第３表）。分類可能なものは、早期条痕文系土器（10点、145ｇ）、中期加曽利Ｅ式土器（７点、153ｇ）、後期称名寺式土器（17点、350ｇ）・堀之内式土器（29点、556ｇ）で、その他不明のものが117点、1,166ｇであった。これらのうち主体を占めるのは縄文時代後期の土器であり、無文又は小破片のため不明とされた土器片の多くも、縄文時代後期に比定されるものが多いと考えられる。ここでは、比較的遺存状態が良く、文様のわかるものを以下のように分類して図示した。

第１群土器　早期条痕文系土器

第２群土器　中期加曽利Ｅ式土器

第３群土器　後期称名寺式土器

第４群土器　後期堀之内式土器

図示した縄文土器は27点である。

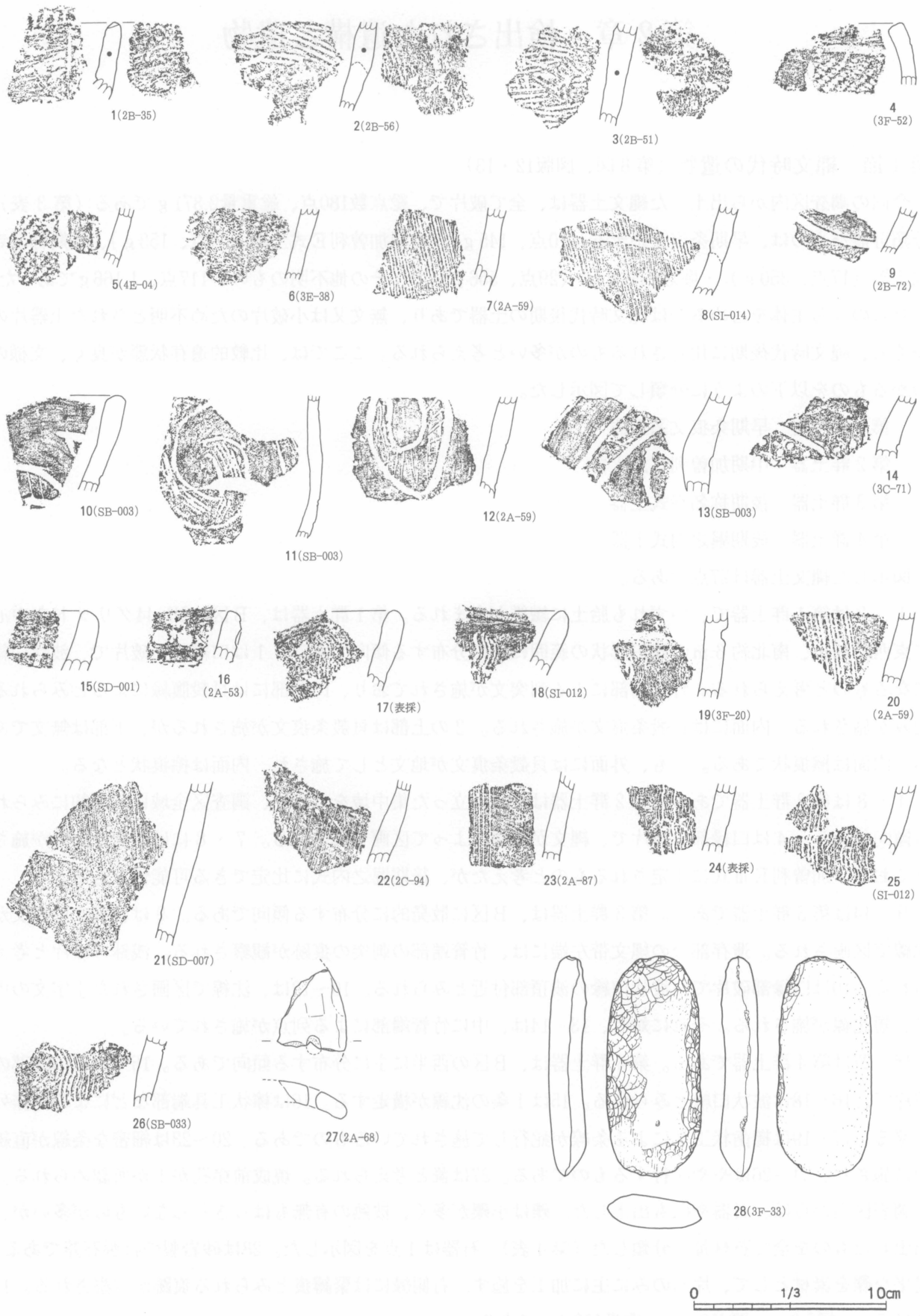
１～３は第１群土器で、いずれも胎土に繊維が含まれる。第１群土器は、Ｂ区、2B-44グリッドを中心に東西約12ｍ、南北約６ｍの楕円形状の範囲に主に分布する傾向である。１は口縁部の破片で、波状口縁になるものと考えられる。竹管端部による刺突文が施されており、口唇部には貝殻腹縁によるとみられる刻みが施される。内面には貝殻条痕文が施される。２の上部は貝殻条痕文が施されるが、下部は無文である。内面は擦痕状である。３も、外面には貝殻条痕文が地文として施され、内面は擦痕状となる。

４～８は第２群土器である。第２群土器は特に目立った集中域をもたず、調査区全域に散発的にみられる傾向である。４は口縁部の破片で、縄文が沈線によって区画されている。７・８には細密な条線が施されており、加曽利ＥⅢ式に比定されるものと考えたが、後期堀之内式に比定できる可能性もある。

９～14は第３群土器である。第３群土器は、Ｂ区に散発的に分布する傾向である。９は、細かい縄文が沈線で区画される。遺存部分の縄文帯左端には、竹管端部の刺突の痕跡が観察される。浅鉢の破片と考えられる。10は口縁部破片で、波状口縁の波頂部付近とみられる。10～12は、沈線で区画されたＪ字文の中に、短沈線が施される。それに対し、13・14は、中に竹管端部による列点が施されている。

15～27は第４群土器である。第４群土器は、Ｂ区の西半に主に分布する傾向である。15～18は口縁部の破片で、16～18は波状口縁とみられる。15は１条の沈線が横走する。16は棒状工具端部などによる押捺列が巡る。17～19は櫛歯状工具による条線が蛇行して施されているものである。20～23は細密な条線が直線的に施され、24～26はやや蛇行するものである。27は蓋と考えられる。焼成前穿孔が１か所認められる。

調査区内からは、石器や礫も出土した。礫は小礫が多く、被熱の有無もはっきりしないものが多いが、出土したものを全て石材毎に分類した（第４表）。石器は１点を図示した。28は砂岩製の打製石斧である。扁平な礫を素材として、片面のみに主に加工を施す。右側縁には緊縛痕とみられる痕跡が観察される。長さ11.5㎝、幅5.0㎝、厚さ2.0㎝、重量159.1ｇである。



第８図　縄文時代の出土遺物

第3表　下谷遺跡出土縄文土器組成表　　（単位　点数：個　重量：g）

遺構番号		早期		中期		後期				不明		総数	
		条痕文系		加曽利E		称名寺		堀之内					
種別	番号	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
SB	003					8	168	4	65	17	97	29	330
SB	004									2	18	2	18
SD	001							1	15	4	35	5	50
SD	006									1	10	1	10
SD	007					1	6	3	120	9	165	13	291
SD	010									3	12	3	12
SH	061	1	16									1	16
SI	001									3	24	3	24
SI	012			1	18	1	7	7	130	17	182	26	337
SI	014			1	46			1	4	1	8	3	58
SK	003									2	21	2	21
2A-58								1	12			1	12
2A-59				1	28	1	46	2	27			4	101
2A-68								2	30			2	30
2A-76										1	22	1	22
2A-87								1	25			1	25
2B-35		2	30									2	30
2B-36										2	39	2	39
2B-42										1	23	1	23
2B-44		1	8							2	5	3	13
2B-46		2	8							5	26	7	34
2B-51		1	29									1	29
2B-52										2	10	2	10
2B-53		1	12									1	12
2B-56		1	33							2	1	3	34
2B-63										1	29	1	29
2B-70										1	13	1	13
2B-72		1	9			4	90			3	14	8	113
2B-77										1	24	1	24

遺構番号	早期		中期		後期				不明		総数	
	条痕文系		加曽利E		称名寺		堀之内					
種別 番号	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
2C-21									1	5	1	5
2C-22									1	7	1	7
2C-41									1	4	1	4
2C-64									1	3	1	3
2C-71					1	27					1	27
2C-75							1	10			1	10
2C-76									1	9	1	9
2C-84									1	1	1	1
2C-94							1	35			1	35
3B-49					1	6					1	6
3C-02											0	0
3C-22									1	20	1	20
3C-33									1	10	1	10
3C-52									2	5	2	5
3E-38			1	22					1	16	2	38
3E-45									1	22	1	22
3F-11									1	17	1	17
3F-20							1	23	3	11	4	34
3F-25									1	37	1	37
3F-30									2	13	2	13
3F-31									3	30	3	30
3F-41									4	23	4	23
3F-44									1	3	1	3
3F-51									1	7	1	7
3F-52			1	21					1	10	2	31
3F-71									6	82	6	82
4E-04			2	18							2	18
表採							4	60	2	53	6	113
合計	10	145	7	153	17	350	29	556	117	1,166	180	2,370

第４表　下谷遺跡出土礫組成表　　（単位　点数：個　重量：ｇ）

遺構番号		砂　岩		チャート		流紋岩		安山岩		泥　岩		ホルンフェルス		その他		合　計	
種別	番号	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
SB	003	1	2	6	405	4	222									11	629
SB	004	1	9	4	87	1	7									6	103
SD	001	46	1,328	71	1,393	32	1,235	1	2	24	125	1	36	8	380	183	4,499
SD	002	1	3	1	9	1	4									3	16
SD	003	13	231	5	54	6	105									24	390
SD	005	3	34	1	4											4	38
SD	006			1	14											1	14
SD	007	4	422	6	91	4	226							1	144	15	883
SD	009	8	1,070	9	206	7	206									24	1,482
SD	010	6	53	9	101	5	128			2	73			3	75	25	430
SH	023					1	93									1	93
SH	037			5	17	1	17							2	5	8	39
SH	061	1	7	1	7											2	14
SH	062					1	3									1	3
SI	001	18	93	35	188	13	83							4	32	70	396
SI	012	21	742	17	578	19	1,200	1	46					2	41	60	2,607
SI	014	2	143	1	3	3	13									6	159
SK	004	5	36	9	71	2	23							1	5	17	135
SK	007			4	55							1	34			5	89
SK	011			2	39	1	5									3	44
SK	012	5	50	9	44											14	94
SK	015	1	89													1	89
SS	001	1	9	1	9	2	115					1	140			5	273
2A-58		1	103													1	103
2A-77				1	10	1	7									2	17
2A-79				1	28											1	28
2B-35		1	70													1	70
2B-36				2	37	1	5									3	42
2B-37														1	21	1	21
2B-39		1	5													1	5
2B-42		1	216			1	145									2	361
2B-43		1	9	1	93											2	102
2B-44						1	54									1	54
2B-45		2	23	2	16	2	21							1	29	7	89
2B-46				4	126	6	99							2	63	12	288

遺構番号	砂　岩		チャート		流紋岩		安山岩		泥　岩		ホルンフェルス		その他		合　計	
種別　番号	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
2B-50	1	170	2	86											3	256
2B-51					2	50					1	195			3	245
2B-52			1	11	3	231									4	242
2B-53			1	12	1	13									2	25
2B-54	1	13	1	44	3	53									5	110
2B-62			1	36											1	36
2B-63	1	18	2	6							1	6			4	30
2B-66					1	18									1	18
2B-68			1	809											1	809
2B-72	11	54	26	140	13	257									50	451
2B-73	2	5													2	5
2B-74	1	13													1	13
2B-75			1	13											1	13
2B-78	1	17													1	17
2B-79			2	32											2	32
2B-84	1	5													1	5
2B-85	1	58													1	58
2B-86			1	439											1	439
2B-93	2	38			2	56									4	94
2B-94			1	47											1	47
2B-95	1	4					1	22							2	26
2B-96			1	22											1	22
2B-98													1	64	1	64
2B-99					1	51									1	51
2C-21	1	56													1	56
2C-31			2	49											2	49
2C-73	1	31													1	31
2C-78	1	109													1	109
2C-80					1	5									1	5
2C-85	1	22			1	1									2	23
2C-86	1	11													1	11
2C-90			1	185											1	185
3A-05			1	28											1	28
3A-29													1	34	1	34
3B-05	1	42													1	42
3B-38			1	23											1	23

遺構番号		砂　岩		チャート		流紋岩		安山岩		泥　岩		ホルンフェルス		その他		合　計	
種別	番号	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
3B-39		2	274	1	33	1	17									4	324
3B-49		2	63	6	166	5	169									13	398
3C-20				1	42											1	42
3C-40												1	16			1	16
3C-61				1	22									1	15	2	37
3E-38				4	31	3	29									7	60
3E-39		1	120													1	120
3E-46				1	39											1	39
3E-47		1	9	1	16											2	25
3E-48						1	14									1	14
3E-49		1	28			1	25									2	53
3E-55		1	74													1	74
3E-56		1	93													1	93
3E-94		1	15			1	23									2	38
3F-13		1	27	1	375											2	402
3F-20		12	166	16	171	7	141			1	271	2	76			38	825
3F-22		3	18	7	87	4	35									14	140
3F-30														1	30	1	30
3F-31				1	2					1	2			1	4	3	8
3F-40				1	100											1	100
3F-60		1	16													1	16
3F-64				1	2	1	3									2	5
3F-65				1	1											1	1
3F-71		4	21	14	86	3	18							1	8	22	133
3F-74		2	30													2	30
3F-94		1	76	1	75	2	237									4	388
4E-04								1	18							1	18
5トレンチ		2	17	3	51	2	76	1	23					2	22	10	189
A区	一括	26	485	64	850	18	508							5	119	113	1,962
表採		1	8	3	30	2	28									6	66
合計		236	6,949	382	7,846	194	6,074	5	111	28	471	8	503	38	1,091	891	23,049

第2節　奈良・平安時代の遺構と遺物

奈良・平安時代の遺構としては、竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡2棟、方形墳墓1基、溝状遺構1条が検出された。以下、それらを遺構種類ごとに遺構番号順に報告する。

1　竪穴住居跡

SI-001（第9～13図、図版2・12・15）

A区、3F-73～75・83～85・93～95グリッドの範囲に位置する。

プランは縦長の長方形を呈し、規模は南北軸が約4.1m、東西軸が約3.4mである。主軸方位はN-4°-Wである。壁はやや斜めに立ち上がり、検出面からの深さは、最大で約0.30mである。壁溝は検出されていない。

中央部で東西方向の溝状遺構SD-001と重複するが、SD-001のほうが新しい。

床面はほぼ平坦で、ピットは、主柱穴とみられる4か所（P1～P4)のほか、機能は明らかでないものの、コーナー部などで計6か所検出された（P5～P10)。ピットの床面からの深さは、P1が0.56m、P2が0.48m、P3が0.28m、P4が0.28m、P5が0.13m、P6が0.50m、P7が0.30m、P8が0.15m、P9が0.45m、P10が0.24mである。

カマドは北壁ほぼ中央部に位置する。煙道部は方形墳墓の周溝SS-001と重複するとみられるが、発掘調査時にはその新旧関係は曖昧にされたままであった。整理作業時に土層断面等を詳細に検討した結果、煙道部は方形墳墓SS-001の部分まで延びて、SS-001を切っていた可能性が高いとの結論に達した。火床部上面からは、支脚が直立した状態で出土した。

図示した遺物は5点である。1・2・5はカマド中から、3・4は覆土中から出土したものである。1～3は土師器杯である。いずれも器面の磨耗が著しく、調整痕がはっきりしないが、非ロクロの杯である。1は、口縁部内面に油煙痕と考えられる黒色の部分が認められる。4は須恵器甕の胴部破片である。外面には平行タタキ目が、内面にはハケナデ痕がみられる。5はほぼ完形の支脚である。上面は平坦になっており、断面形は概ね円形である。長さ24.3cm、幅9.7cm、厚さ8.5cm、重量1,129.2gである。

SI-012（第14～17図、図版3・12・14・15）

B区、3B-15・16・24～27・34～37グリッドの範囲に位置する。

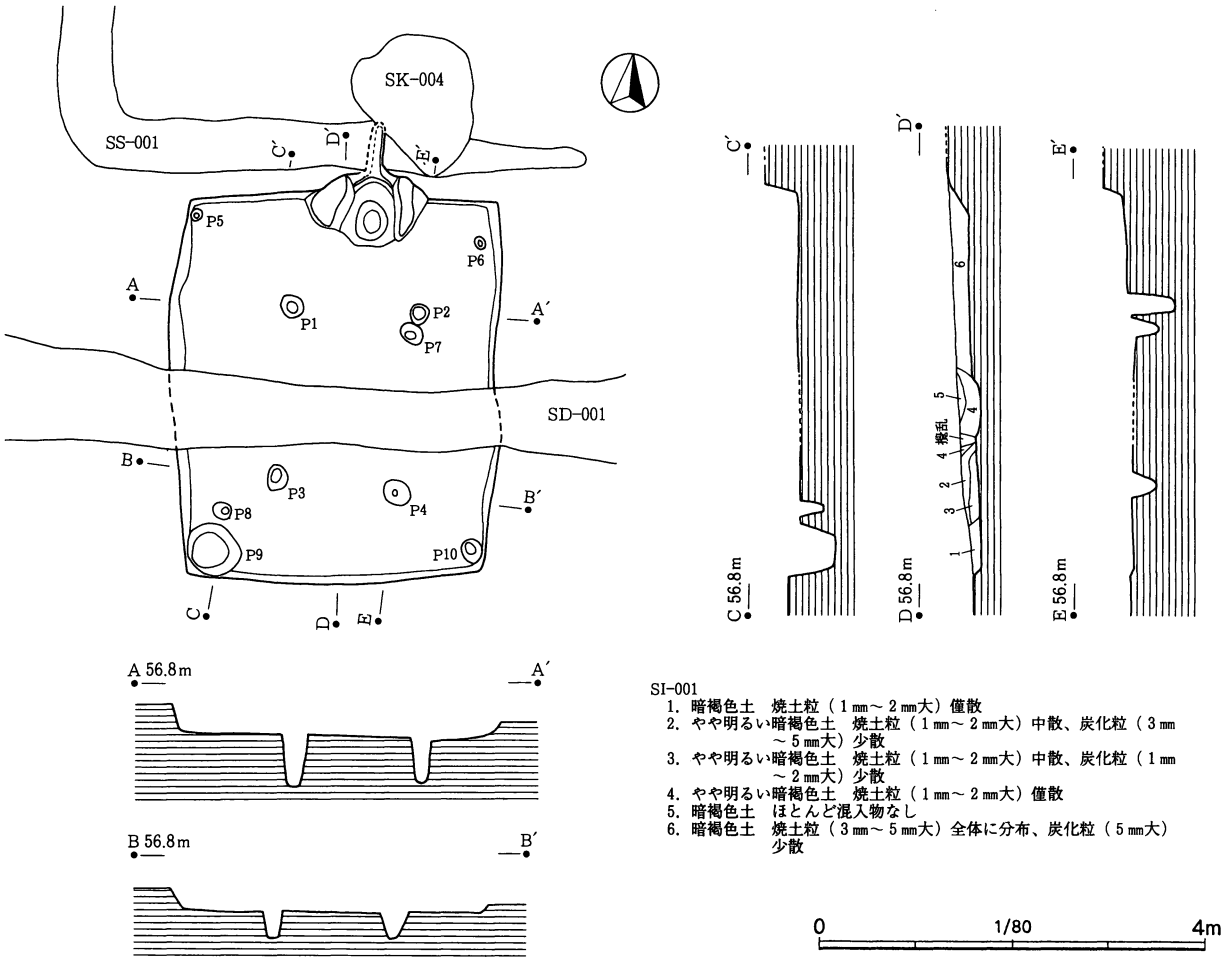
東側は確認トレンチによって失われたが、プランは横長の長方形を呈するものと考えられる。規模は南北軸が約3.8m、東西軸が推定約5.4mで、主軸方位はN-6°-Eである。壁はやや斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは最大で約0.30mである。壁溝が、カマド東側の北壁と南壁の中央部の一部を除いて検出された。壁溝の底面までの深さは、床面から0.11mである。

中央部西側で、屈曲する溝状遺構SD-007と重複するが、SD-007のほうが新しい。

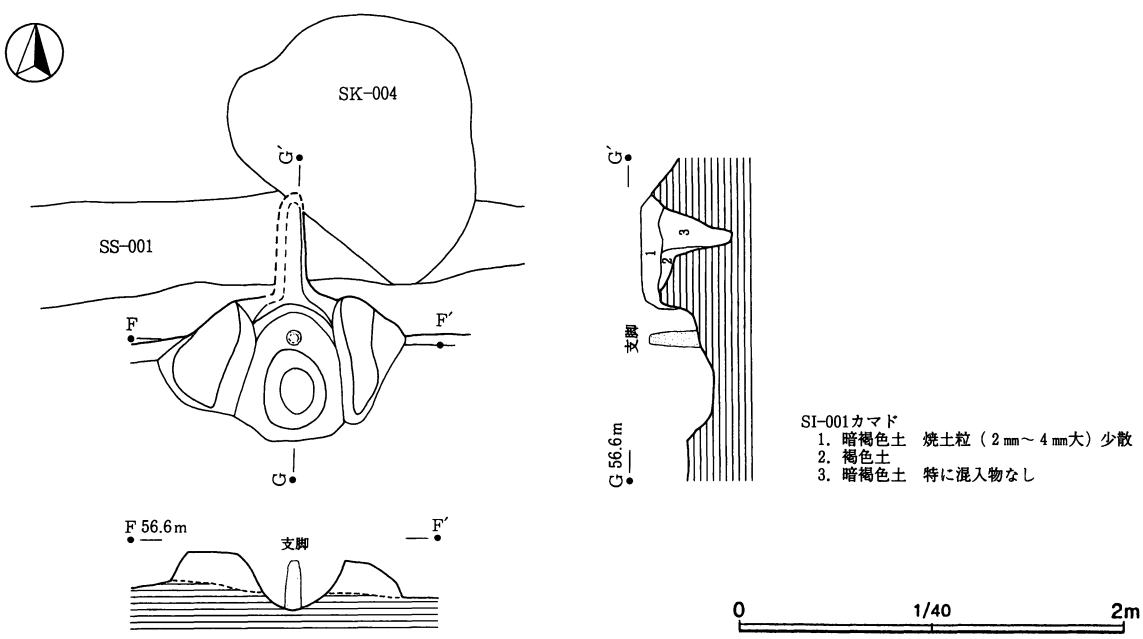
床面はほぼ平坦で、遺存部分からはピットが5か所検出された。ピットはいずれもしっかりした掘形ではない。ピットの床面からの深さは、P1が0.03m、P2が0.01m、P3が0.11m、P4が0.08m、P5が0.41mである。

カマドは北壁で検出された。北壁のほぼ中央部に位置するとみられる。煙道部は長く延びる。

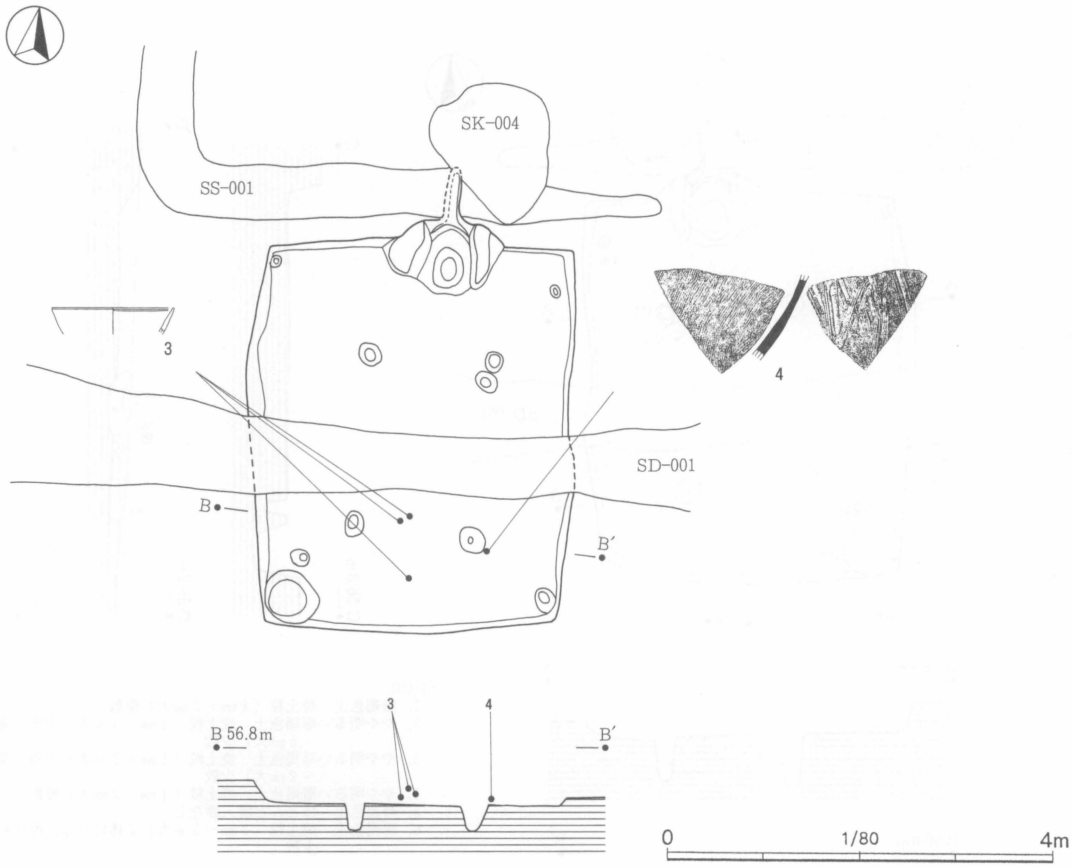
図示した遺物は13点である。いずれも覆土中から出土した。1～10は土師器である。1は非ロクロの杯、



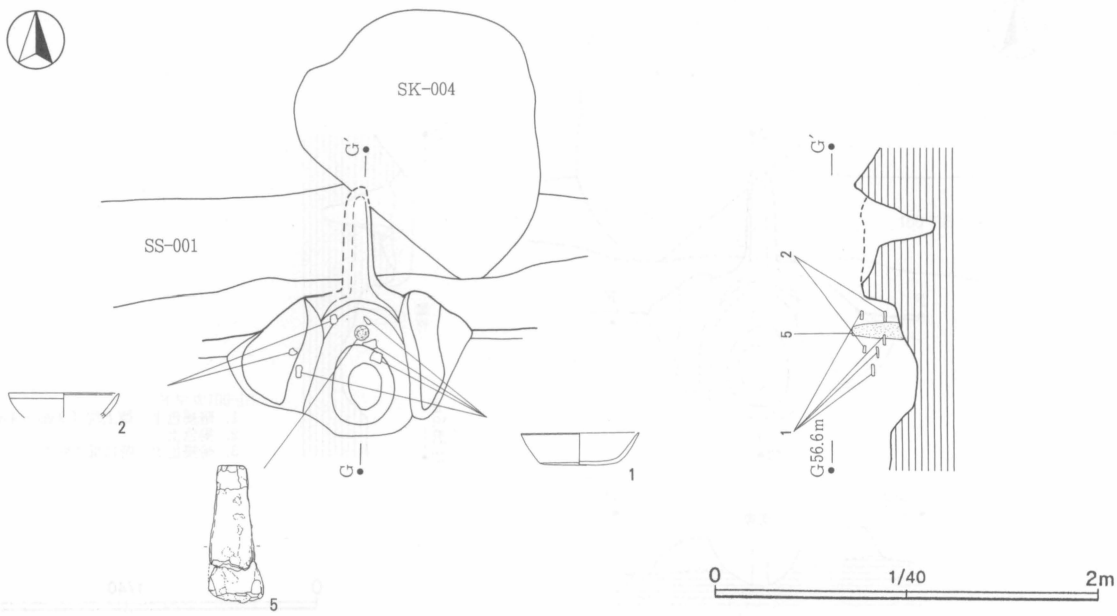
第9図　SI-001



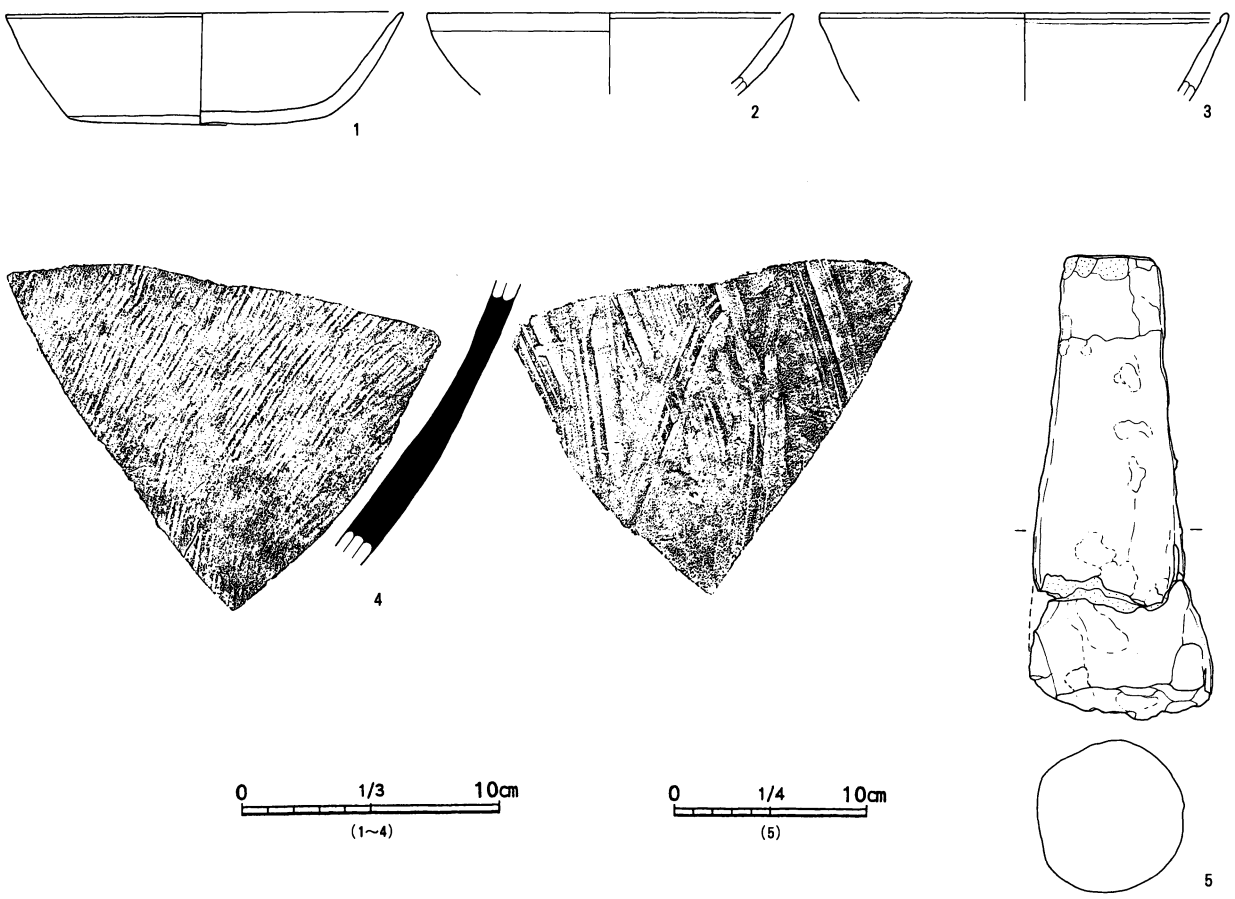
第10図　SI-001カマド



第11図　SI-001遺物出土状況



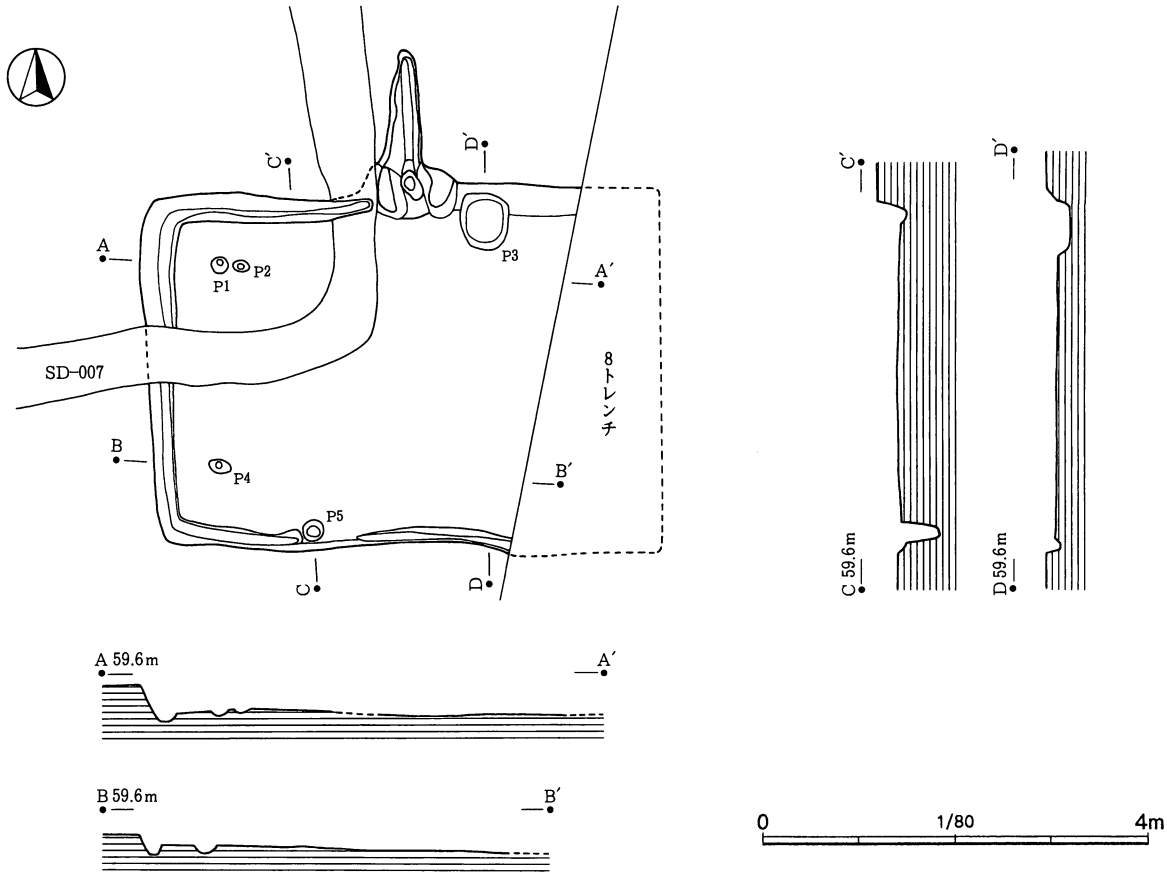
第12図　SI-001カマド遺物出土状況



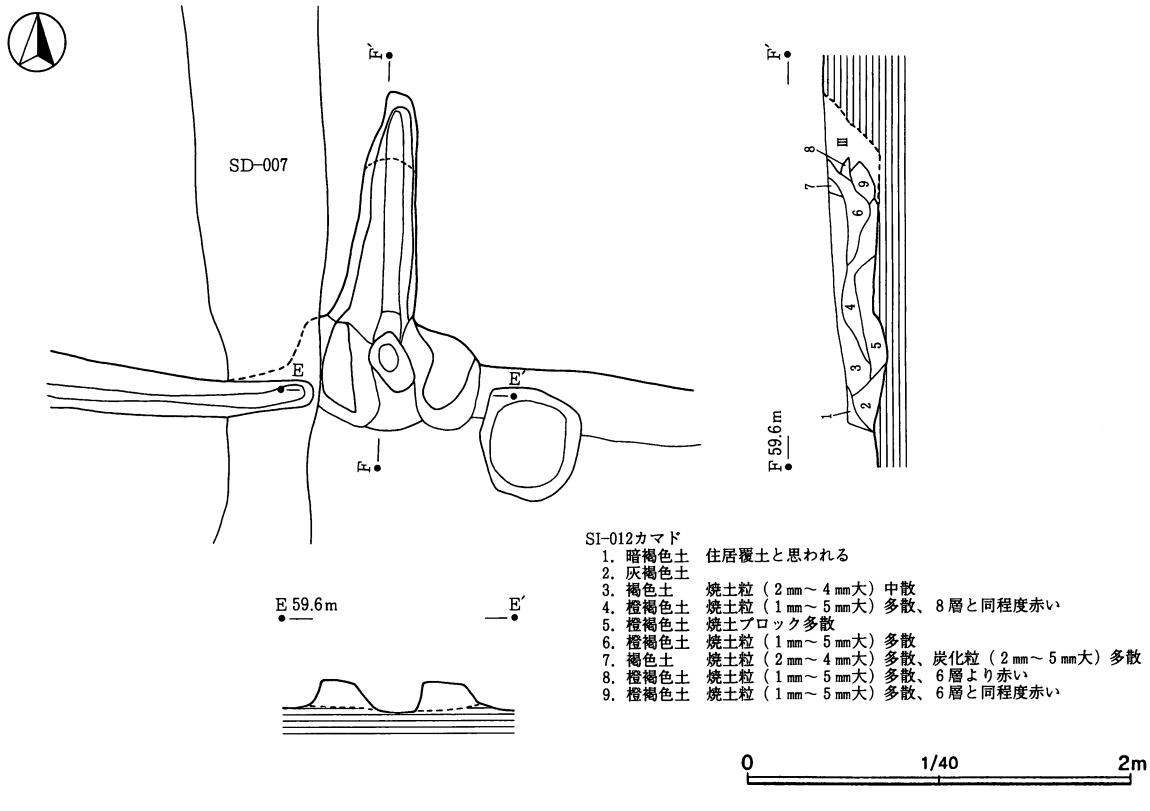
第13図　SI-001出土遺物

2～5はロクロ杯である。1は、器面が磨耗しておりはっきりしないが、外面に黒色処理が施されていた可能性がある。2～5の底部の切離しは、いずれも回転ヘラ切りとみられる。4は内外面黒色処理が施されていた可能性がある。6・7は皿である。6の底部切離しは回転ヘラ切りである。7の体部下端は回転ヘラケズリが施される。8はつまみ部の欠損した香炉蓋とみられる。内外面ロクロ調整であるが、天井部外面には回転ヘラケズリが施される。外面は赤褐色を呈しており、赤彩が施されていた可能性もある。9は甕の口縁部、10は台付甕の接合部とみられる。11～13は須恵器である。11は壺の肩部破片で、外面には厚く自然釉がかかる。12・13は甕の胴部破片とみられる。12は外面には平行タタキ目がみられ、内面は当て具痕がナデ消されている。胎土に雲母を多量に含むのが特徴的である。13は暗褐色を呈するもので、器厚が非常に薄い。外面には平行タタキ目がみられるが、内面は磨滅が著しく調整痕は観察できない。

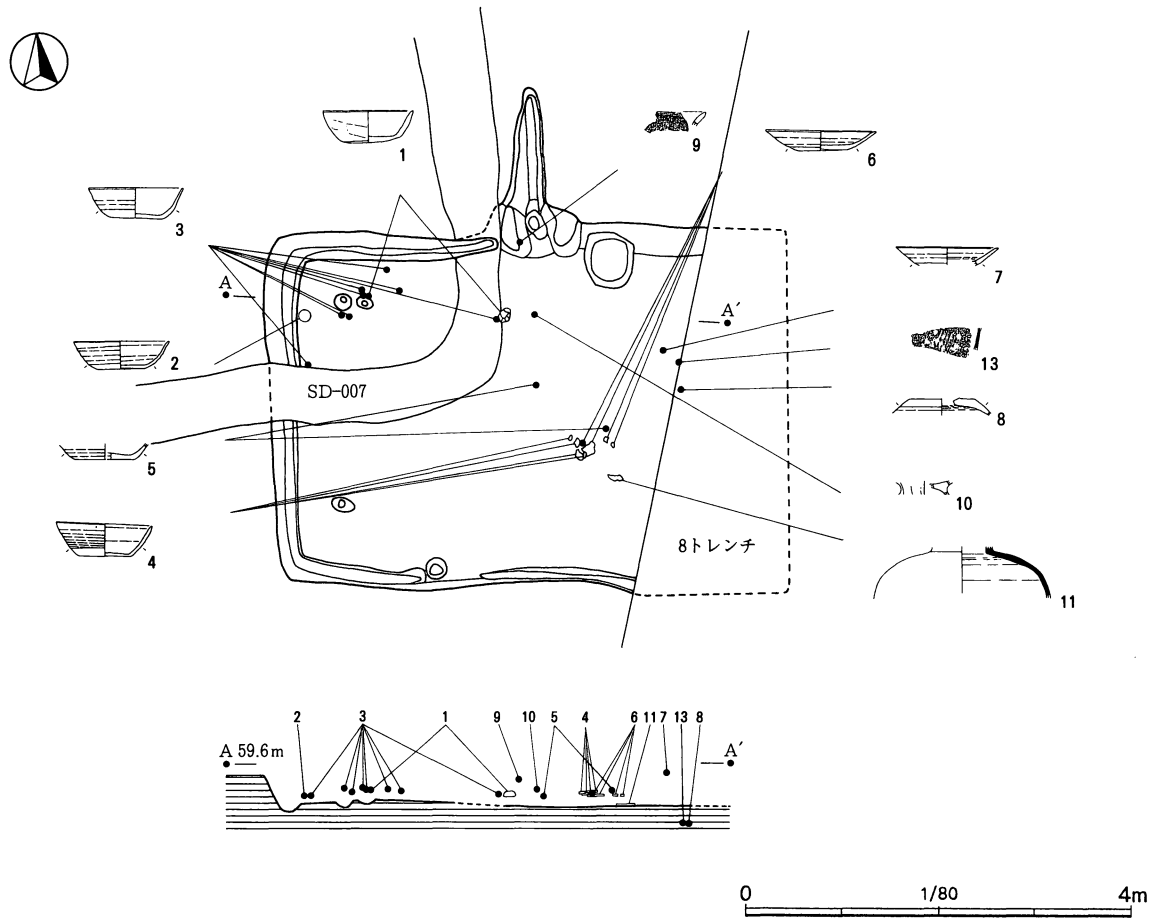
出土遺物は、これらのほか杯の底部片が5個体分、甕の体部片が4個体分認められた。



第14図　SI-012



第15図　SI-012カマド



第16図　SI-012遺物出土状況

SI-014（第18～22図、図版４・12・14）

Ｂ区、2B-92～94、3B-03～05グリッドに位置する。

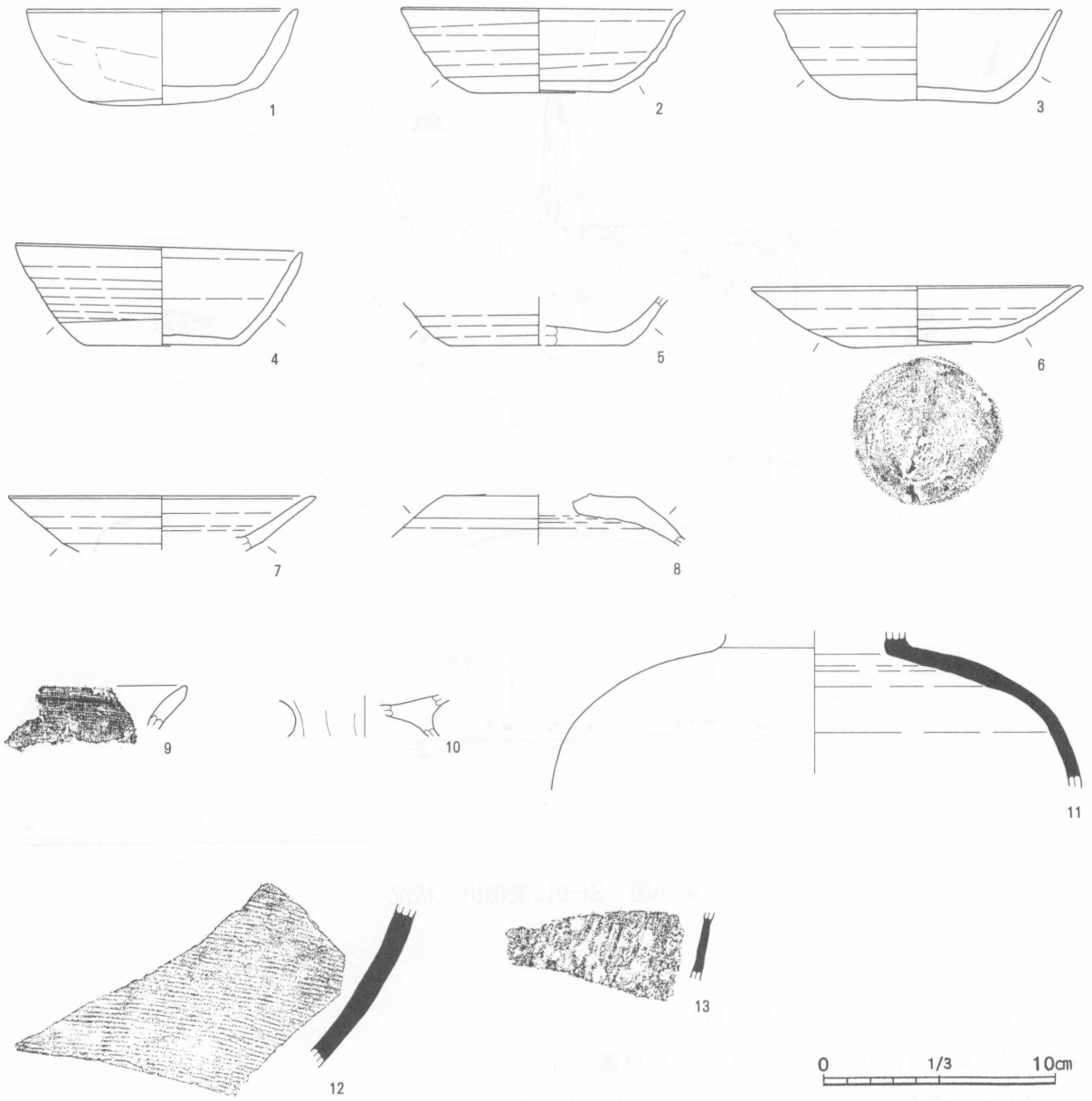
壁はほとんど遺存しておらず、カマドと、主柱穴とみられるピット、及び床面と考えられる硬化面が一部検出されたのみであるが、カマドと柱穴の配置から、プランは一辺4.4ｍほどの方形を呈していたものと推定される。主軸方位はN-26°-Wである。検出面から床面までの深さは約0.15ｍである。壁溝は検出されていない。

北西部を中心に、掘立柱建物跡SB-003の柱穴などと重複するが、SB-003のほうが新しいとみられる。

床面はほぼ平坦で、カマド周辺に２か所、硬化面が認められた。柱穴は、主柱穴とみられる４か所(P1～P4)のほかに、貯蔵穴とみられるものがカマド東脇に１か所（P5）検出された。ピットの検出面からの深さは、P1が0.38ｍ、P2が0.31ｍ、P3が0.22ｍ、P4が0.26ｍ、P5が0.30ｍである。

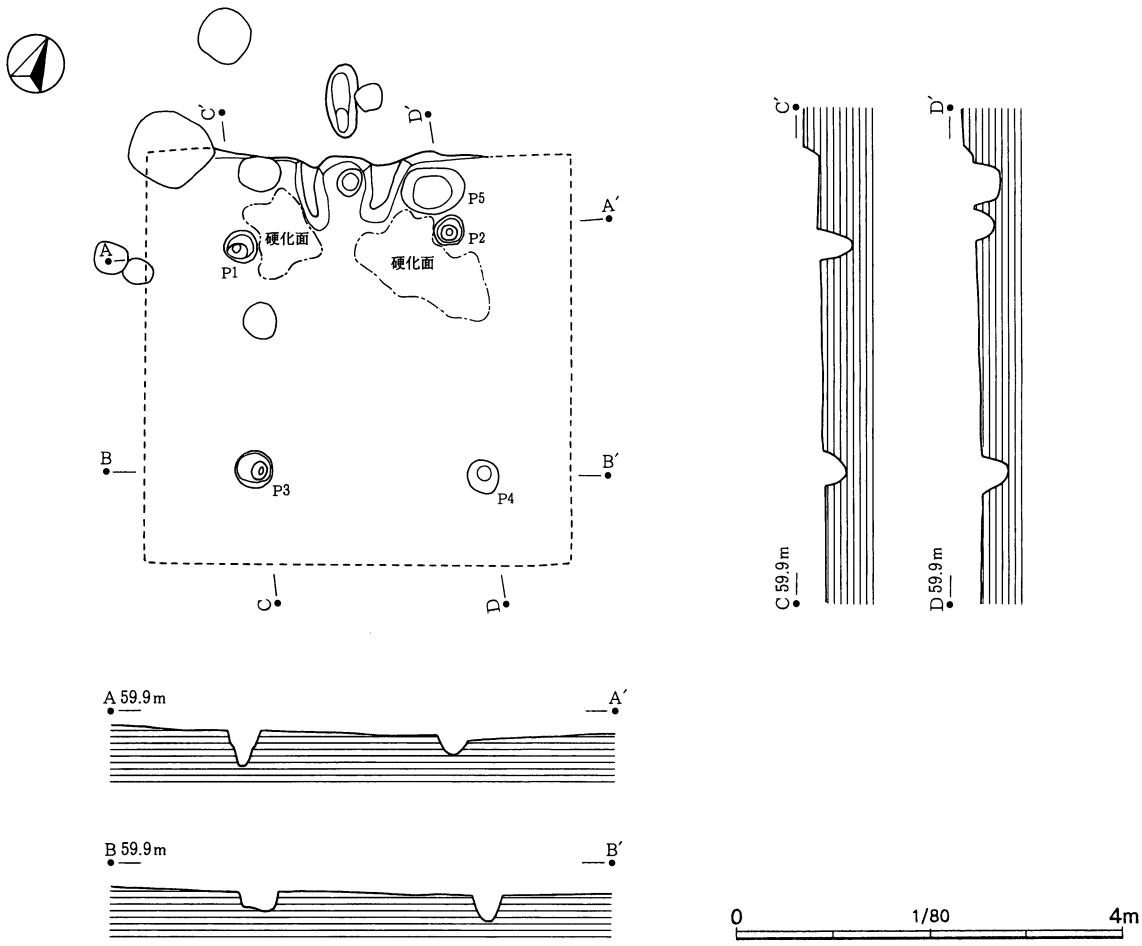
カマドは北壁で検出された。北壁のほぼ中央部に位置するとみられる。煙道部は上部が削平され、底面のみが露出した状態で検出されたとみられ、本来は長く延びていたものと考えられる。

図示した遺物は９点である。１～４・６～８はカマド西脇から、それぞれほぼ完形で、伏せた状態で集中して出土したものである。５は覆土中から、９はカマド東脇から出土した。１～９は全て土師器で、１～５はいずれも非ロクロの杯である。１の内面には暗文が施されている。体部の暗文は斜格子状、底部の

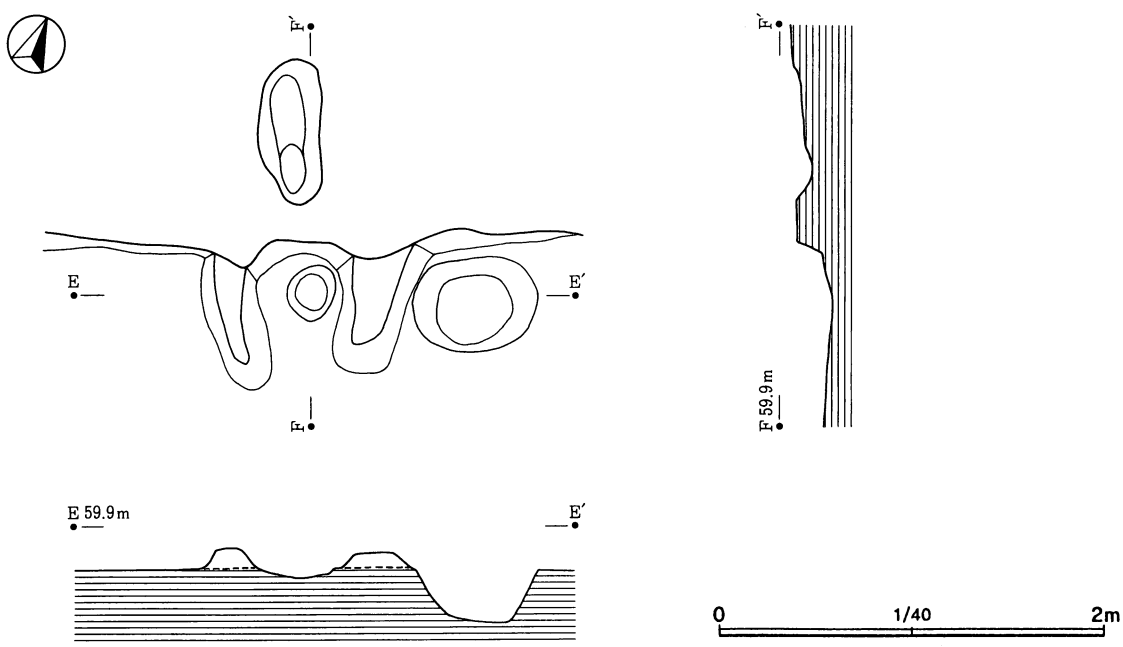


第17図　SI-012出土遺物

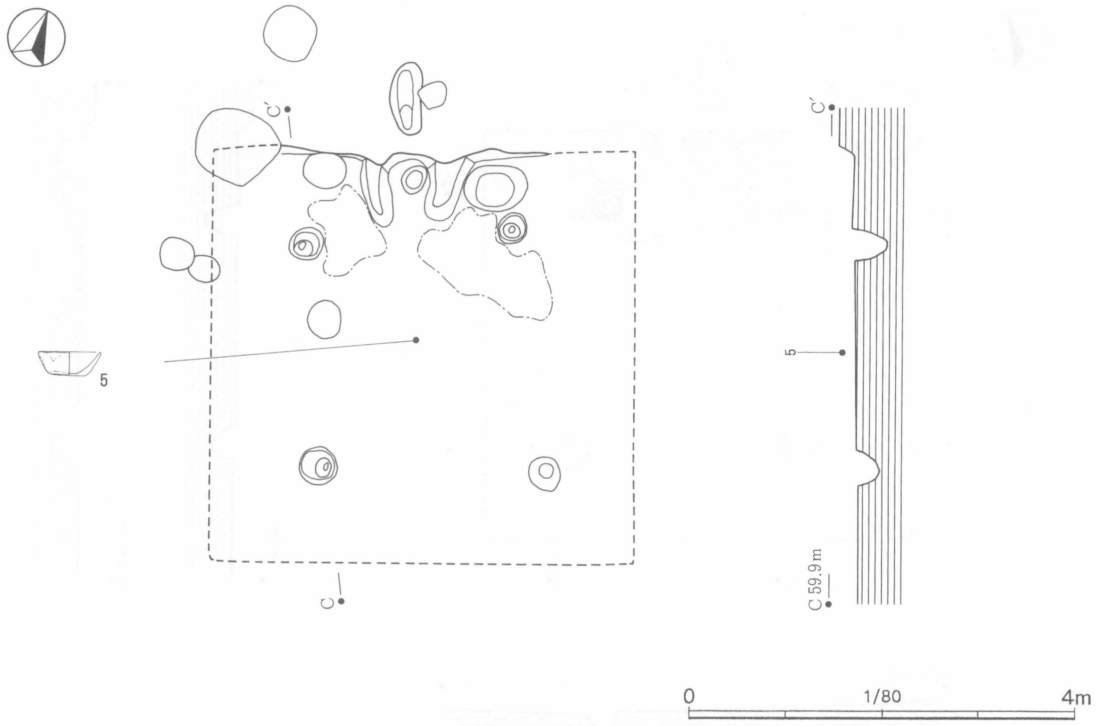
暗文は螺旋状を呈している。2は外面底部に墨書文字が認められる。器面が磨滅・磨耗しており肉眼でははっきりしないが、赤外線写真で観察すると、実測図とは天地逆に1文字書かれているようである。「庫」や「匝」などの可能性が考えられる。3は器面が磨耗しており、調整痕がはっきりしない。4の内面も、器面が磨耗してはっきりしないが、ミガキが施されている可能性がある。5は小振りの杯で、外面体部には横方向のヘラケズリ痕が大きく残されている。6は鉢である。底部は丸底気味で不安定である。7～9は甕で、7は口縁部破片、8は頸部破片、9は底部破片である。



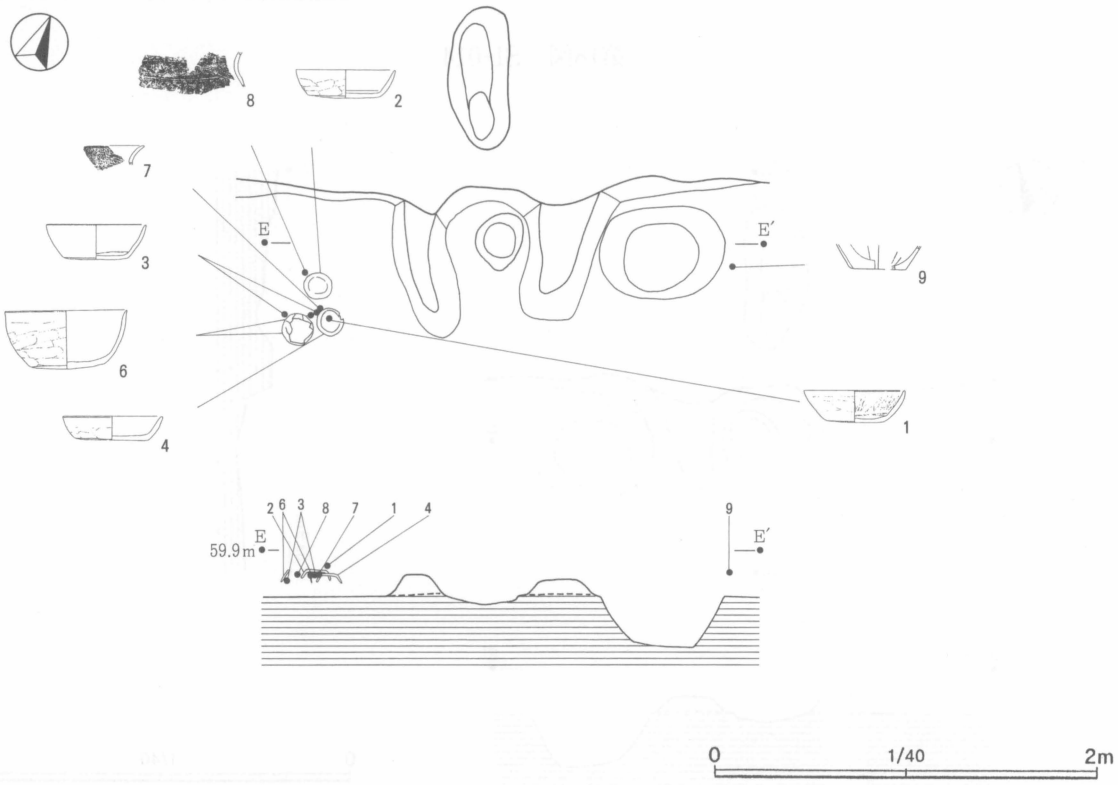
第18図　SI-014



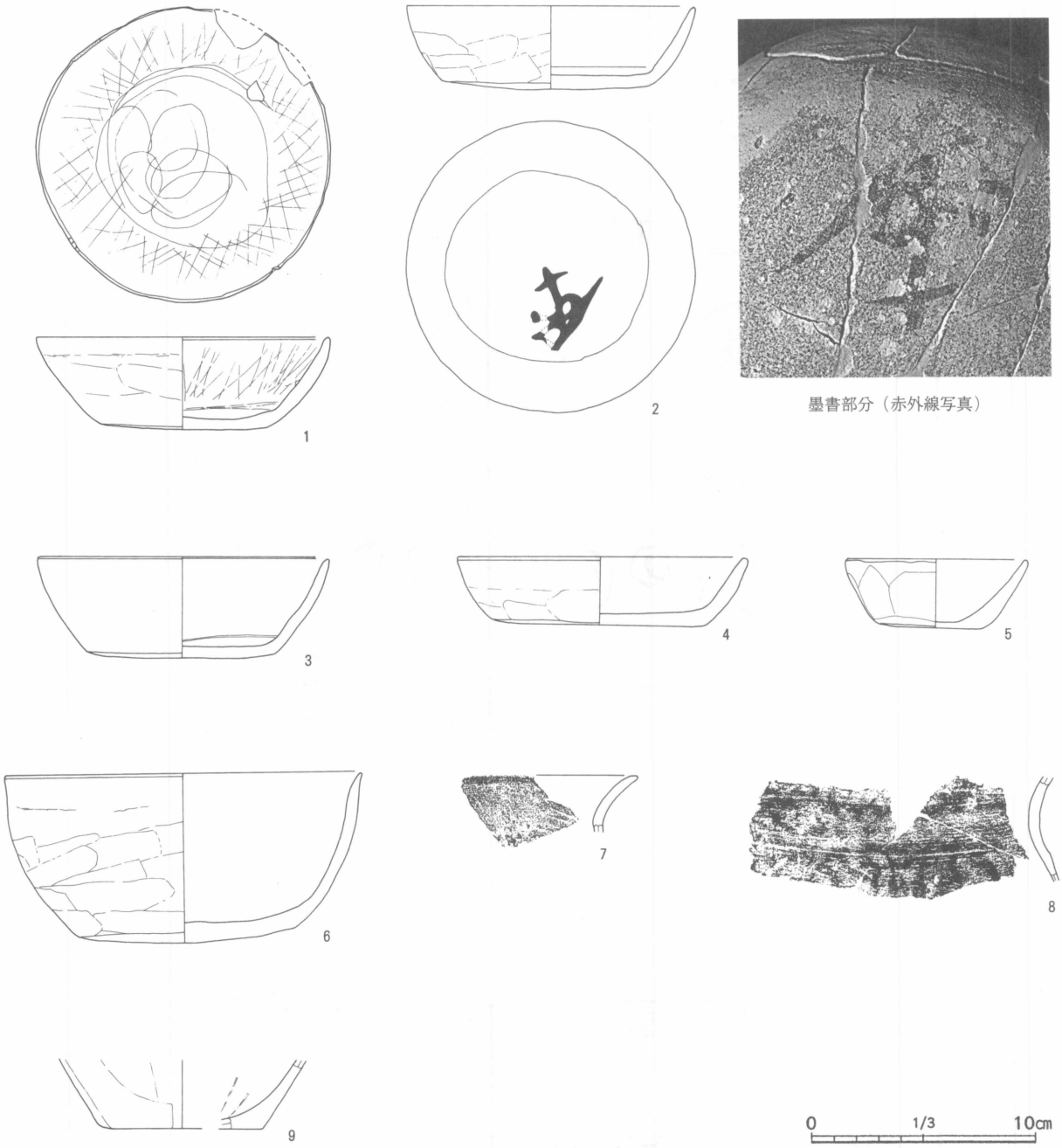
第19図　SI-014カマド



第20図　SI-014遺物出土状況



第21図　SI-014カマド遺物出土状況

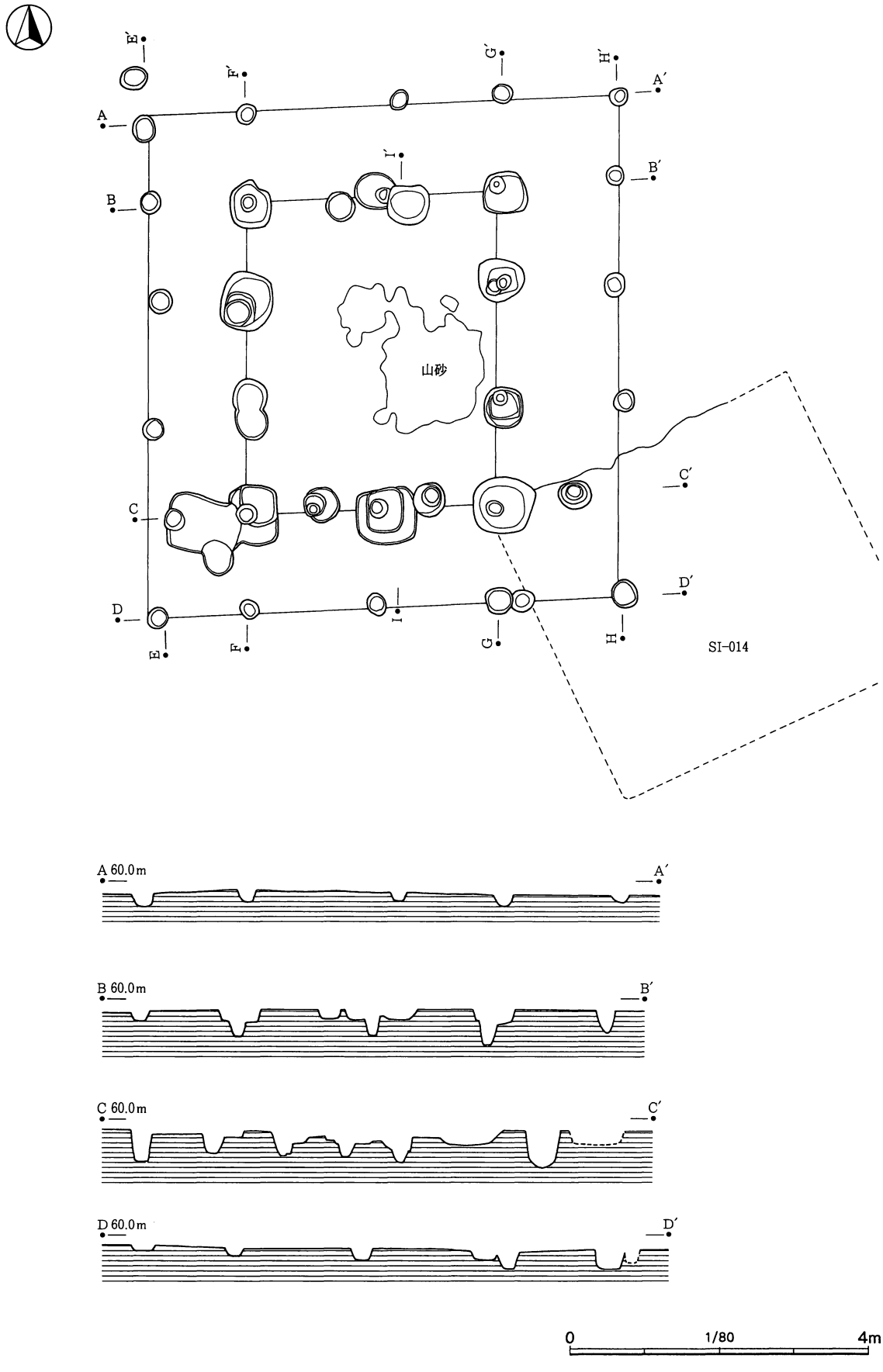


第22図　SI-014出土遺物

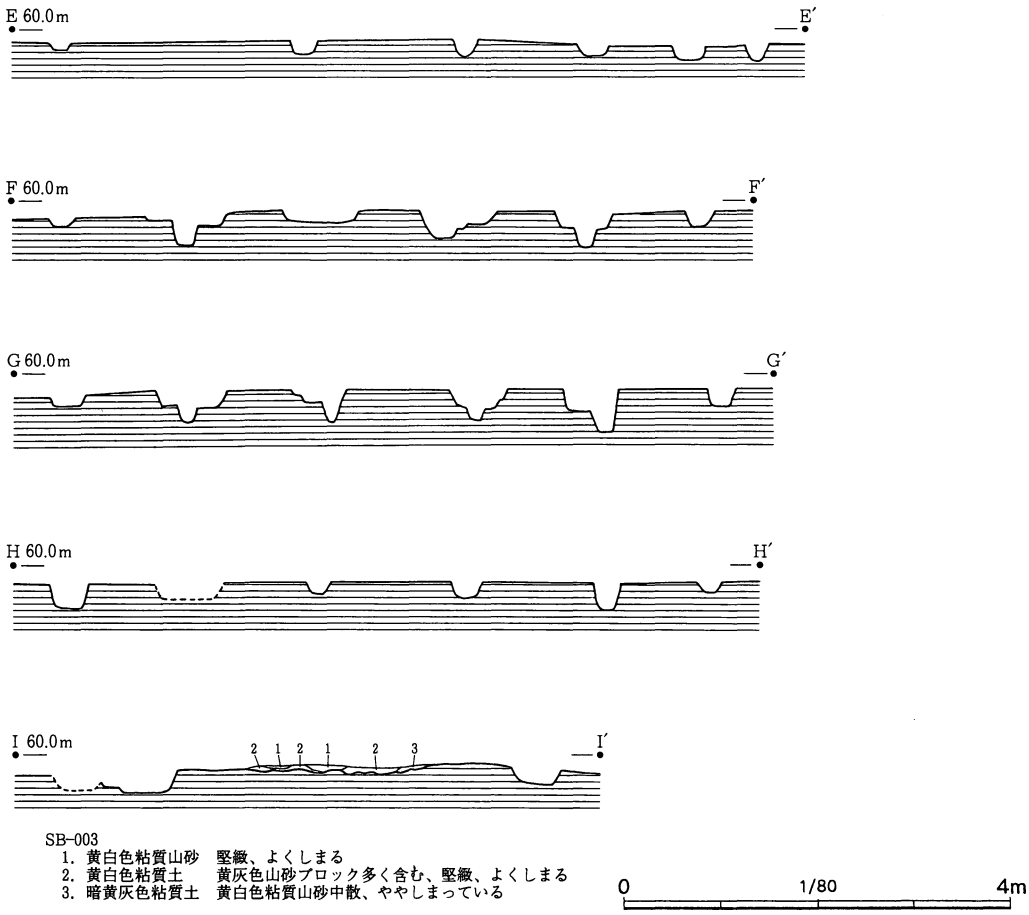
2　掘立柱建物跡

SB-003（第23・24図、図版５）

Ｂ区、2A-89・99、2B-80～82、3A-09・19、3B-00～02・10～12グリッドに位置する掘立柱建物跡で、身舎梁行２間（3.4ｍ）×桁行３間（4.2ｍ）、桁行方位はN-1°-Eとなる南北棟の四面廂建物である。柱間は梁行1.7ｍ、桁行1.4ｍである。柱穴掘形の平面形は、現状で一辺0.50ｍ～0.80ｍほどの隅丸方形である。検出面からの深さは0.10ｍ～0.30ｍほどである。身舎の中央部付近から、黄灰色の山砂の堆積が認められた。


A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
G
G′
H
H′
I
I′
山砂
SI-014
A 60.0m
B 60.0m
C 60.0m
D 60.0m
0
1/80
4m

第23図　SB-003（1）



第24図　SB-003（2）

妻柱の両脇、やや内側に入る位置に柱穴が見られ、床束の柱穴と判断されることから、少なくとも身舎は高床構造であったと考えられよう。また、廂の出は、現状で東側が1.6m、南側と西側が1.3m、北側が1.2mを測るが、南側・西側・北側が等間隔で、東側のみが広くなっていたものと考えられ、東側が正面であった可能性が高い。

周囲をＬ字状に取り巻く溝状遺構SD-007は、この建物に伴う区画溝と考えられる。SD-007が竪穴住居跡SI-012を切っていることから、当遺構も竪穴住居跡SI-012より新しいと考えられる。

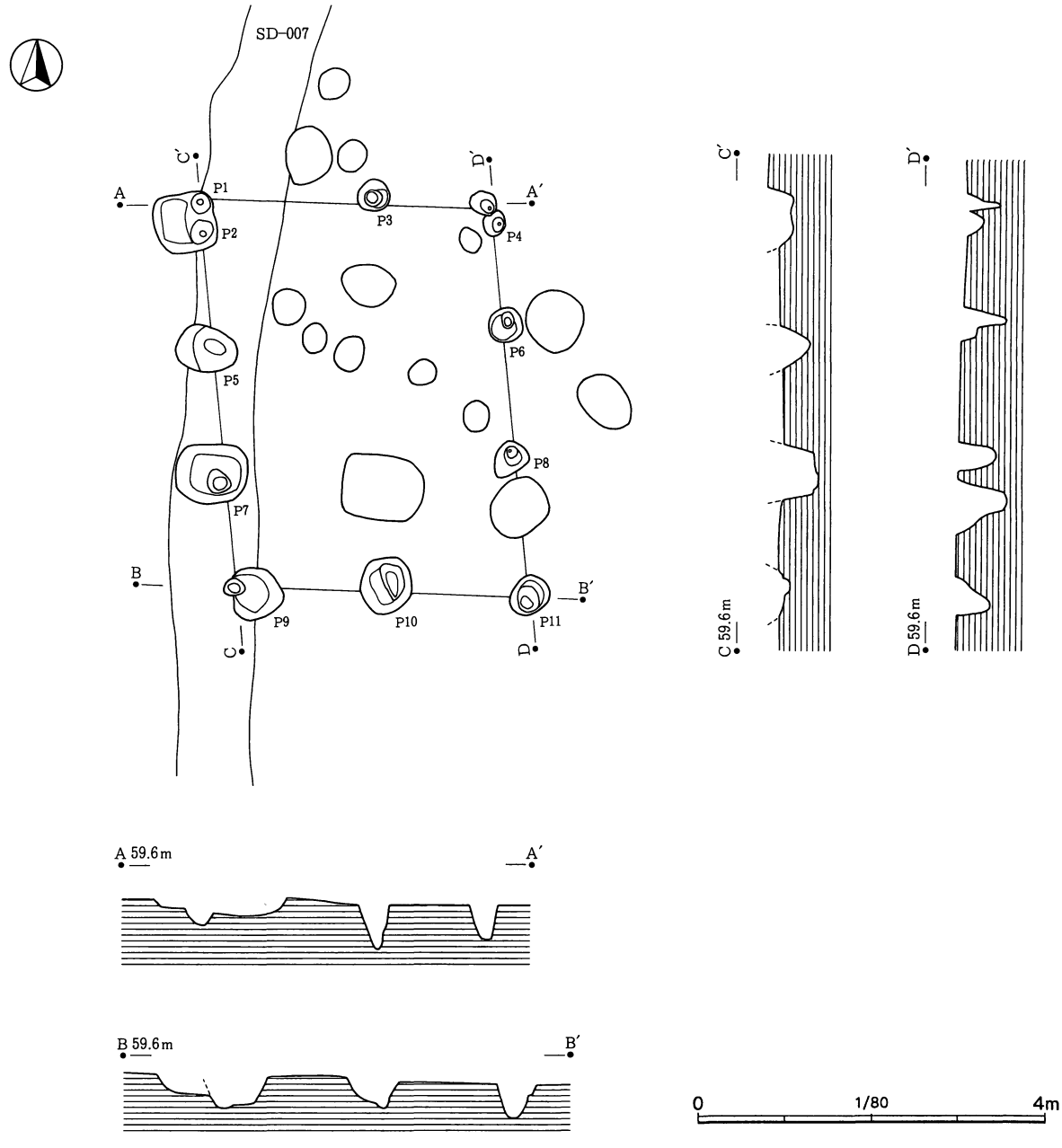
遺物は、掲載していないが、柱穴覆土やその周辺から、土師器の小破片と縄文土器片が少量出土した。

SB-004（第25・26図、図版４・12）

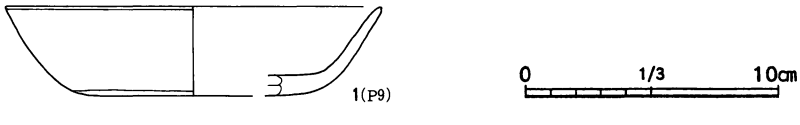
Ｂ区、2B-65～67・75～77・85～87グリッドに位置する掘立柱建物跡で、建物規模は、梁行２間（3.4m）×桁行３間（4.5m）、桁行方位はN-5°-Wとなる南北棟の側柱建物である。柱間は梁行1.7m、桁行1.5mである。柱穴掘形の平面形は、現状で径0.30m～0.80mほどの隅丸方形または円形である。検出面からの深さは0.30m～0.70mほどである。

SB-003に伴う区画溝とみられる溝状遺構SD-007に切られており、SB-003よりも古いものと考えられる。

図示した遺物は１点である。１はP9覆土中から出土した土師器非ロクロの杯である。内外面とも、器面の磨耗が著しい。



第25図　SB-004



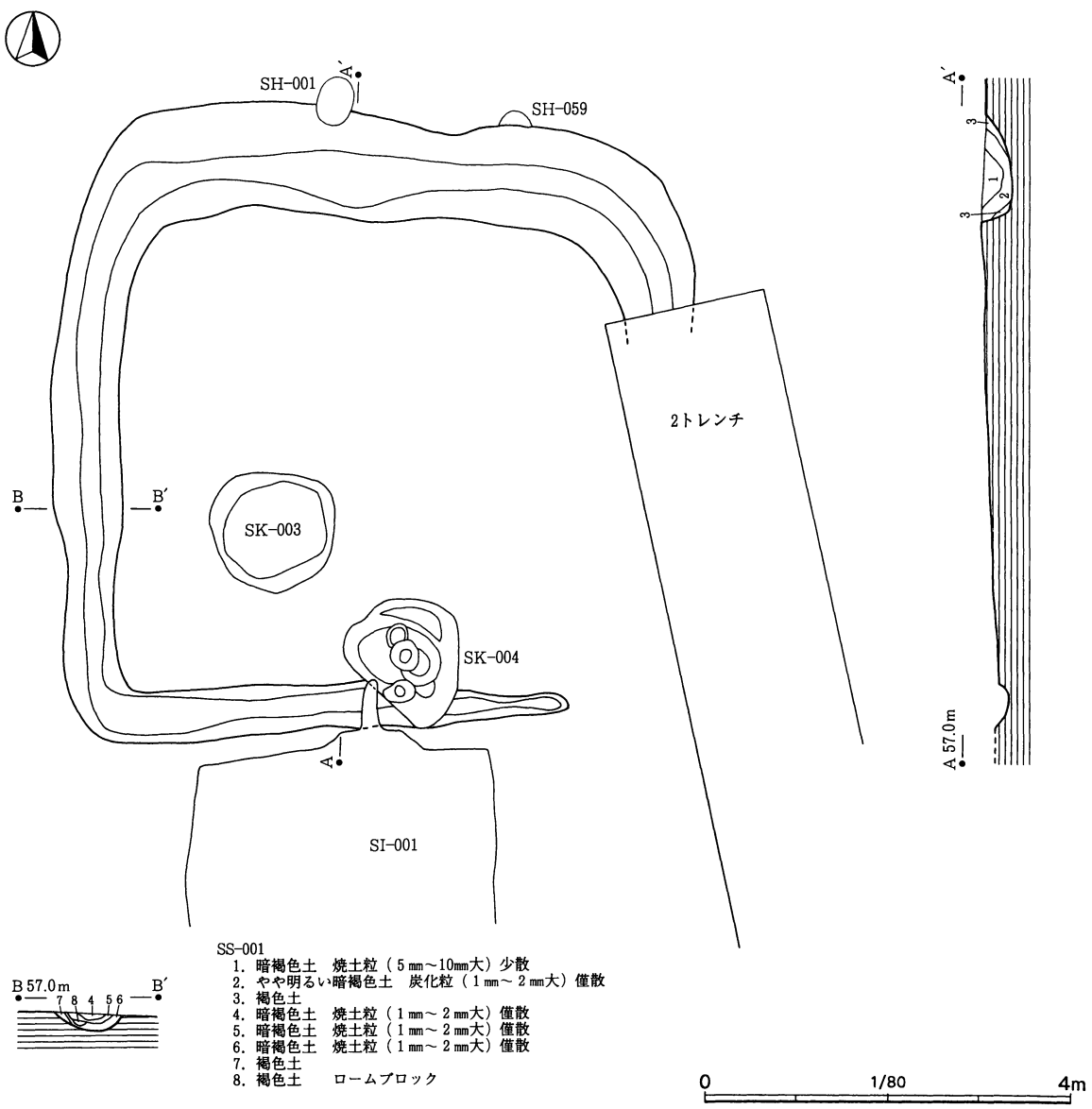
第26図　SB-004出土遺物

3　方形墳墓

SS-001・SK-003・SK-004（第27～32図、図版５・６・16・17）

発掘調査段階では、SS-001は方形周溝状遺構、SK-003・SK-004は土坑として、それぞれ異なる遺構と見なされていたが、整理作業時に検討を加えた結果、同じ方形墳墓の周溝と主体部２基である可能性が高いと判断されるに至ったため、SS-001、SK-003、SK-004の順にまとめてここで報告する。

SS-001は、Ａ区、3F-33～35・42～46・52～56・62～66・72～75グリッドに位置する、方形墳墓の周溝である。周溝は南東隅以外は連続しているが、本来は全周していた可能性がある。周溝の幅は最大で1.2ｍほどである。断面形は緩いＵ字形を呈し、検出面からの深さは0.26ｍである。覆土は、焼土粒を含む暗褐色土を主体とする。



第27図　SS-001

墳墓は、周溝内側で南北5.11m、東西5.50mを測り、ほぼ正方形を呈する。軸方向はN-2°-Wである。検出面における周溝内側の標高は、北西隅が最も高く56.9m、南西隅が56.7m、北東隅が56.5m、南東隅が最も低く56.4mであり、北西から南東に向かって低くなる緩斜面に造られたものとみられる。東側のほとんどを確認調査トレンチにより欠失しているが、南側周溝が西から東、西側周溝が北から南に向かって細くなっていることから、周溝は、地形に対し平坦になるよう掘られたものと判断される。

南側周溝の南には奈良時代の竪穴住居跡SI-001が存在し、僅かに重複する。発掘調査時には、その新旧関係は曖昧にされたままであったが、整理作業時にこの部分における土層断面等を詳細に検討した結果、SI-001の長く延びる煙道部がSS-001を切っていた、つまり方形墳墓SS-001よりも竪穴住居跡SI-001のほうが新しい可能性が高い、との結論に至った。

SS-001からは、図示していないが、土師器の小破片が少量出土した。

SK-003は、A区、3F-53・54・63・64グリッド、SS-001周溝内側の南西部に位置する土坑である。覆土には貝層が認められたが、整理作業時にその中に、貝類のほか火葬人骨や鉄釘が含まれていたことが明らかとなり、SS-001に伴う主体部と判断されるに至った。

SK-003の平面形は、東西1.38m、南北1.25mと僅かに東西方向が長い隅丸方形を呈する。検出面の標高は56.67m～56.75mである。断面形は、底面がやや平坦になっており、逆台形状を呈する。検出面からの深さは0.37mである。

土坑中央部で検出された貝層は、検出面から中位までは土坑中央に、底面付近では底面全体に広がって、混土貝層または混貝土層の状態で存在していた。貝層は、以下のとおり8つの部分（遺物番号4～7・33・34・36・37）に分けて、全て回収を行った。

まず、検出時に4か所の貝散布域として捉えられたことから、その平面図を作成し、それぞれに4～7の遺物番号を付し、回収した（第28図）。次に、貝層の中央を東西に横断するよう幅0.15m、長さ1.20mほどのトレンチを設定し、このトレンチ内の貝層を遺物番号34として回収した。さらに土層断面を図化したあと、土坑中央部の貝類の密集した部分を30cm×30cm×10cm角に上下2カット切り取り、回収した。その際上層のカットには36、下層のカットには37の遺物番号を付した。そして、これら以外の部分の貝層を全て遺物番号33として回収した。

回収された貝層は遺物番号別に全て水洗選別したが、その際、貝層中に火葬人骨が含まれていたことが明らかになった。貝類については同定作業を行い（主として奥谷喬司　1983『自然観察シリーズ18　日本の貝』小学館　を参考にした）、分類別に重量を計った（第5表）。

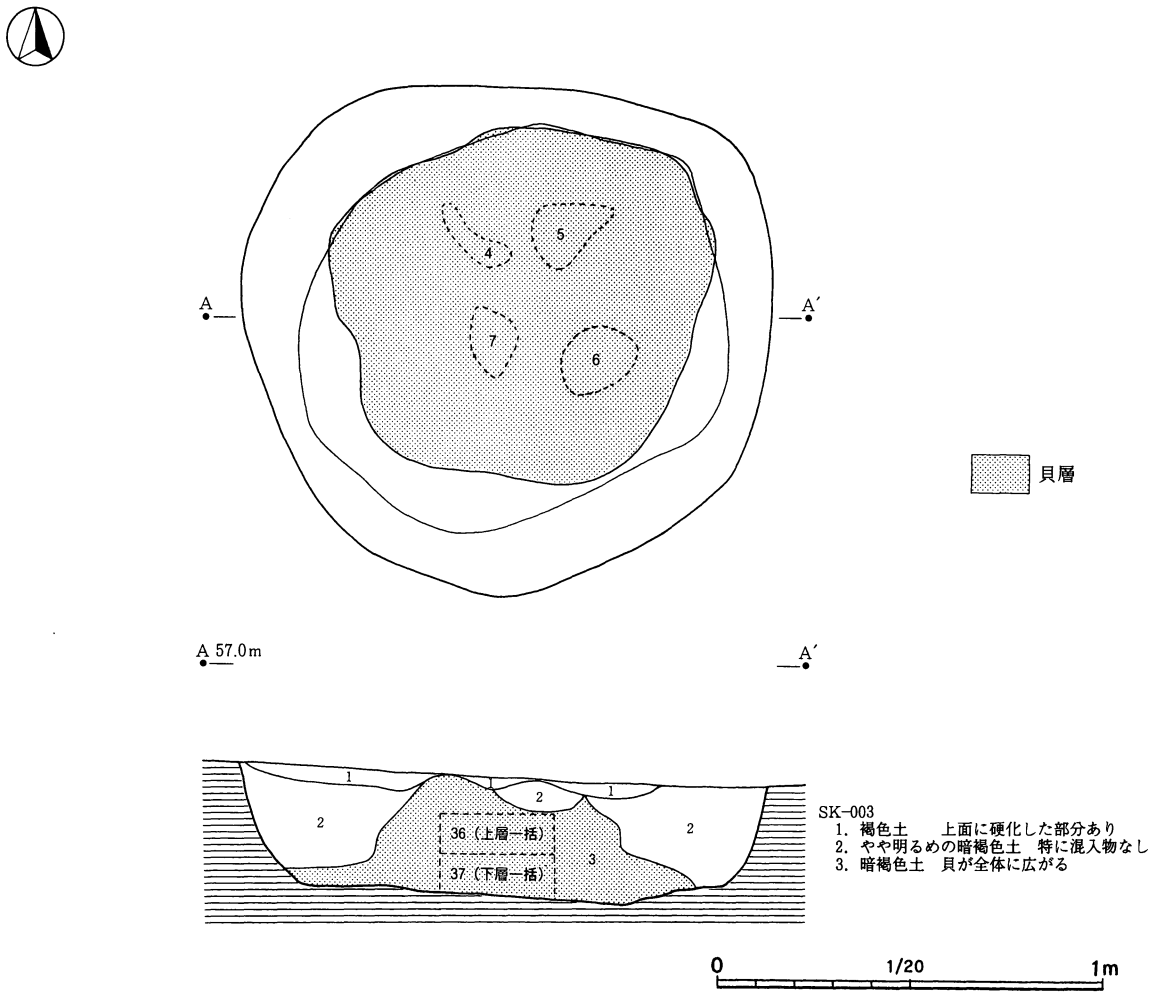
同定された貝類は、以下のとおりである。

腹足綱　Class GASTROPODA

古腹足目 Order Vetigastropoda

ニシキウズガイ科 Family Trochidae

イボキサゴ *Umbonium moniliferum*



第28図　SK-003

盤足目 Order Discopoda

ウミニナ科 Family Batillariidae

ウミニナ *Batillaria multiformis*

タマガイ科 Family Naticidae

ツメタガイ *Glossaulax didyma*

新腹足目 Order Neogastropoda

アッキガイ科 Family Muricidae

アカニシ *Rapana venosa*

ムシロガイ科 Family Nassariidae

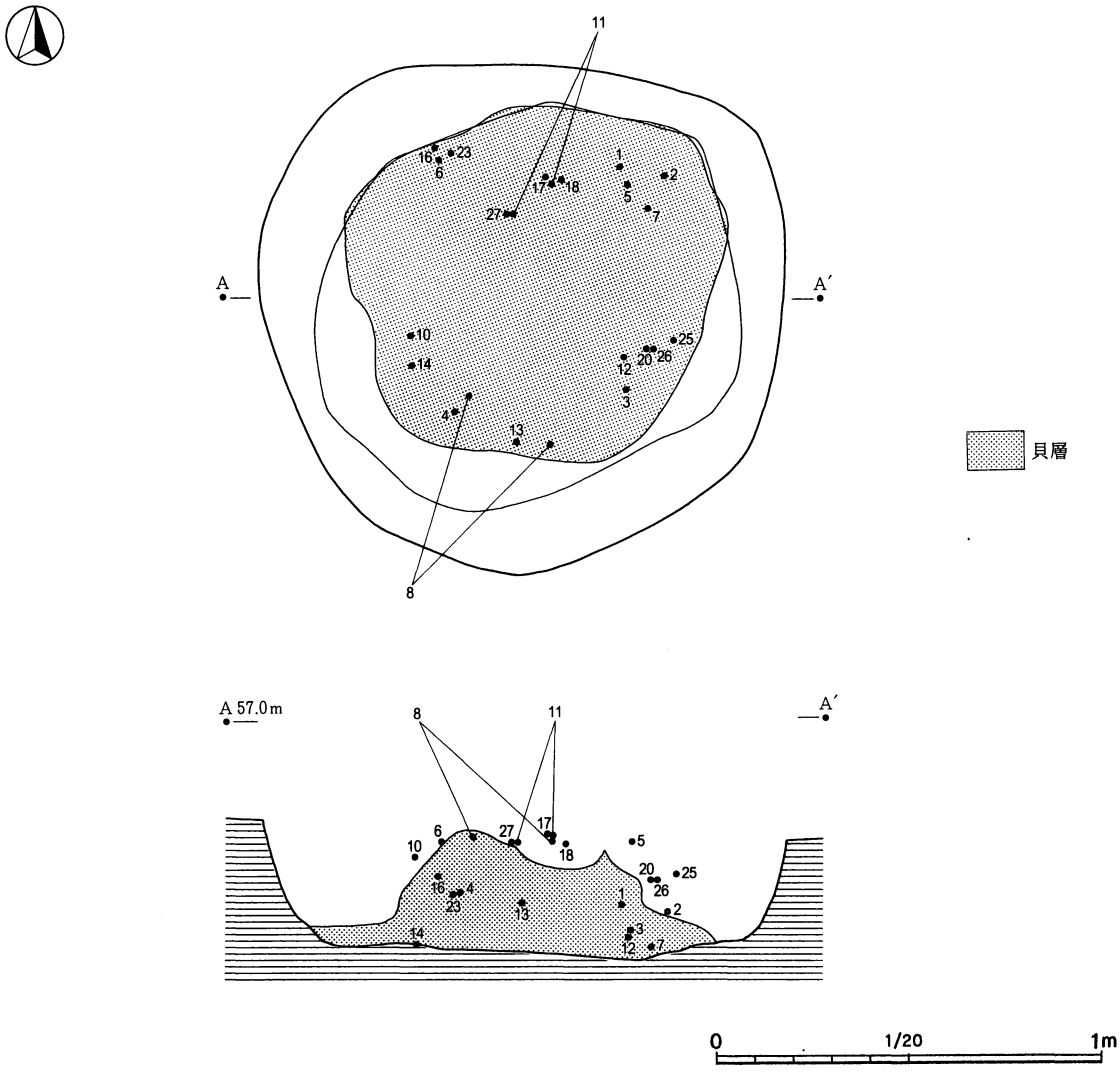
アラムシロ *Reticunassa festiva*

エゾバイ科 Family Buccinidae

バイ *Balylonia japonica*

イトマキボラ科 Family Fasciolariidae

ナガニシ *Fusinus perplexus*



第29図　SK-003鉄釘出土状況

二枚貝綱 Class BIVALVIA

フネガイ目 Order Arcoida

フネガイ科 Family Arcidae

サルボウガイ *Scapharca kagoshimensis*

カキ目 Order Ostreoida

イタヤガイ科 Family Pectinida

イタヤガイ *Pecten albicans*

イタボガキ科 Family Ostreidae

イタボガキ *Ostrea denselamellosa*

マガキ *Crassostrea gigas*

マルスダレガイ目 Order Veneroida
バカガイ科 Family Mactridae
バカガイ *Mactra chinensis*
シオフキ *Mactra veneriformis*
アリソガイ *Coelomactra antiquata*
マテガイ科 Family Solenidae
マテガイ *Solen strictus*
マルスダレガイ科 Family Veneridae
カガミガイ *Phacosoma japonicum*
アサリ *Ruditapes philippinarum*
ハマグリ *Meretrix lusoria*
オキシジミ *Cyclina sinensis*

オオノガイ目 Order Myoida
オオノガイ科 Family Myidae
オオノガイ *Mya(Arenomya) arenaria oonogai*

また、鉄釘が出土しており、平面的には北辺と南辺にまとまる傾向が捉えられた（第29図）。さらに、四隅に定量の分布が認められることから、木櫃の存在が想定され、鉄釘の分布範囲が木櫃の規模を示しているものと考えられよう（第３章第２節２参照）。

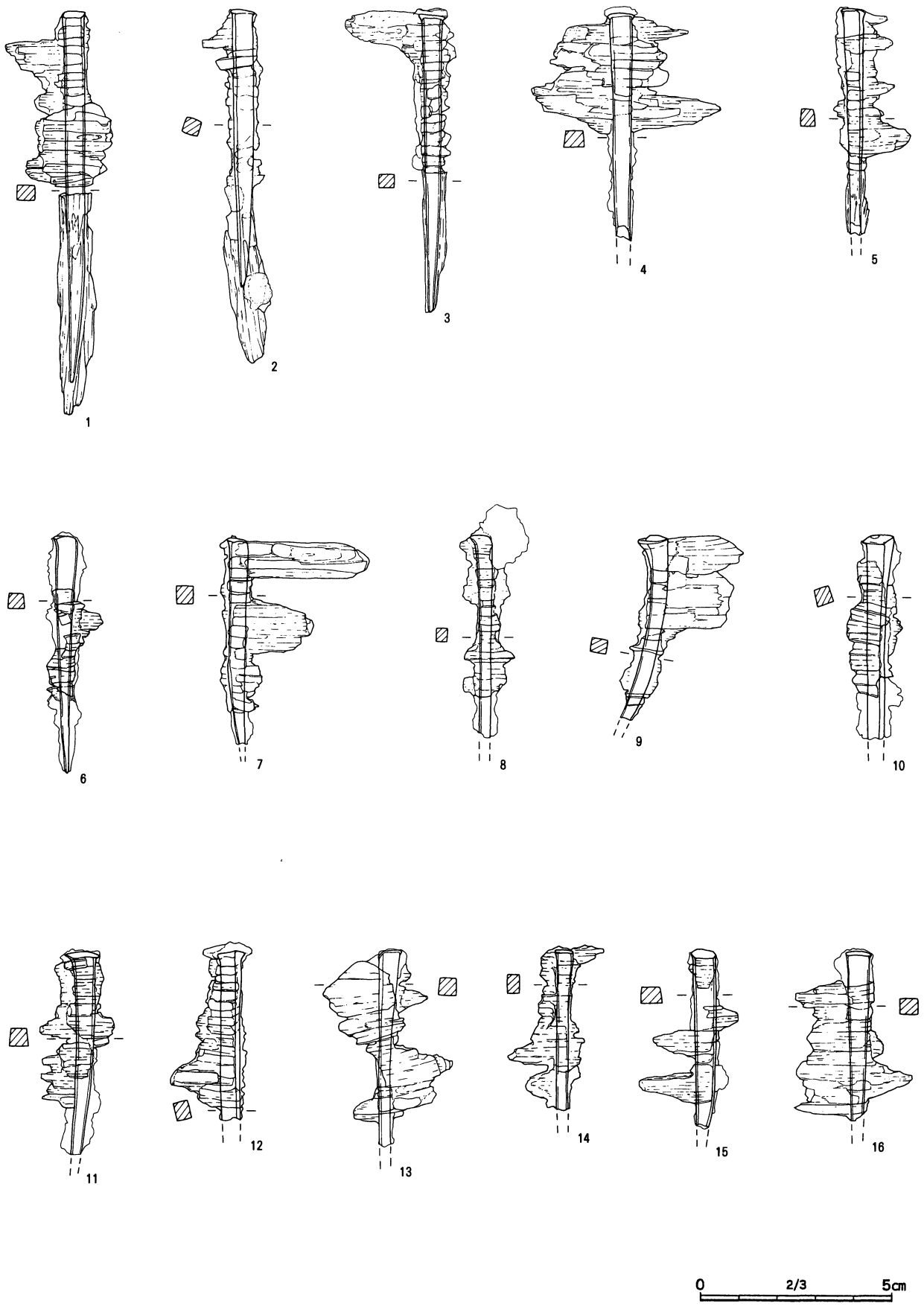
図示したSK-003出土遺物は、鉄釘27点（第30・31図）である。鉄釘は、図示したもののほかにも、遺存状態が悪くいずれにも接合しない破片が数点出土している。

鉄釘はいずれも基本的には断面形が方形で、頭部は上面形が方形で、軸に対してあまり張り出さない同タイプのものとみられる。ただし、１～３・６は完形であるが、105.5㎜～62.0㎜と、長さにばらつきが認められる。また、ほとんどのものに木質の付着が認められるが、木目の方向を観察すると、同じ１本の鉄釘の上部と下部で方向が異なっているものが多く観察される。木目方向は、基本的に、釘の頭部が横方向、端部が縦方向となるようであり、これは木櫃の板厚を示しているものと考えられる。木目の方向は、釘の頭部から３㎝～４㎝程度で変わっているものが多く認められることから、板厚は概ね１寸であったと推定される。頭部と端部で木目が同じ方向になるものは、蓋板か底板を打った釘の可能性があろう。

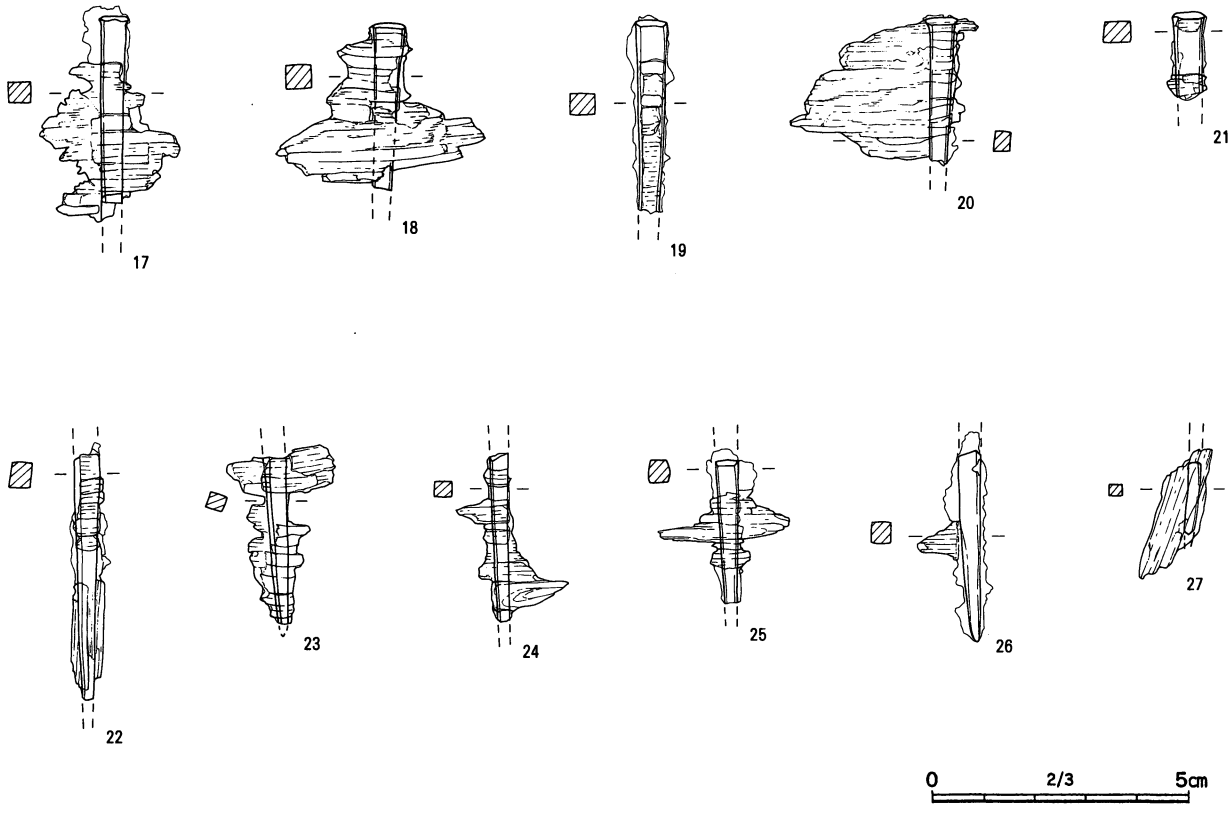
鉄釘のほかには、縄文土器と土師器の小破片が少量出土したが、図示していない。

第５表　SK-003出土貝類等重量表　　（単位：ｇ）

遺物番号	4	5	6	7	33（貝一括）	34（トレンチ一括）	36（上層一括）	37（下層一括）	合　計
イボキサゴ		77		2	1,669	2,452	486	1,922	6,608
ウミニナ		4			86	121	36	88	335
ツメタガイ		78	2		804	888	263	866	2,901
アカニシ		124			113	603	136	129	1,105
アラムシロ		1			11	20	6	23	61
バイ					11	36	11		58
ナガニシ						21			21
巻貝小破片	1	6			159	240	73	307	786
サルボウ	2	19	2		723	1,078	455	605	2,884
イタヤガイ							1		1
イタボガキ					77	130	63	39	309
マガキ		17			124	147	52	111	451
バカガイ					32	70	65	176	343
シオフキ		7			613	1,098	292	680	2,690
アリソガイ		22			378	332	71	148	951
マテガイ		1			5	7	3	5	21
カガミガイ		106			511	327	123	291	1,358
アサリ	4	102		7	1,345	2,244	479	1,587	5,768
ハマグリ		64			1,295	1,567	622	1,434	4,982
オキシジミ					2	4	28	11	45
オオノガイ		15			293	283	107	363	1,061
二枚貝小破片	4	80	3	4	3,285	3,406	959	3,728	11,469
不明貝類		1			11	23	10	67	112
火葬人骨		1			1	10	1	106	119
合　計	11	725	7	13	11,548	15,107	4,342	12,686	44,439



第30図　SK-003出土鉄釘（1）



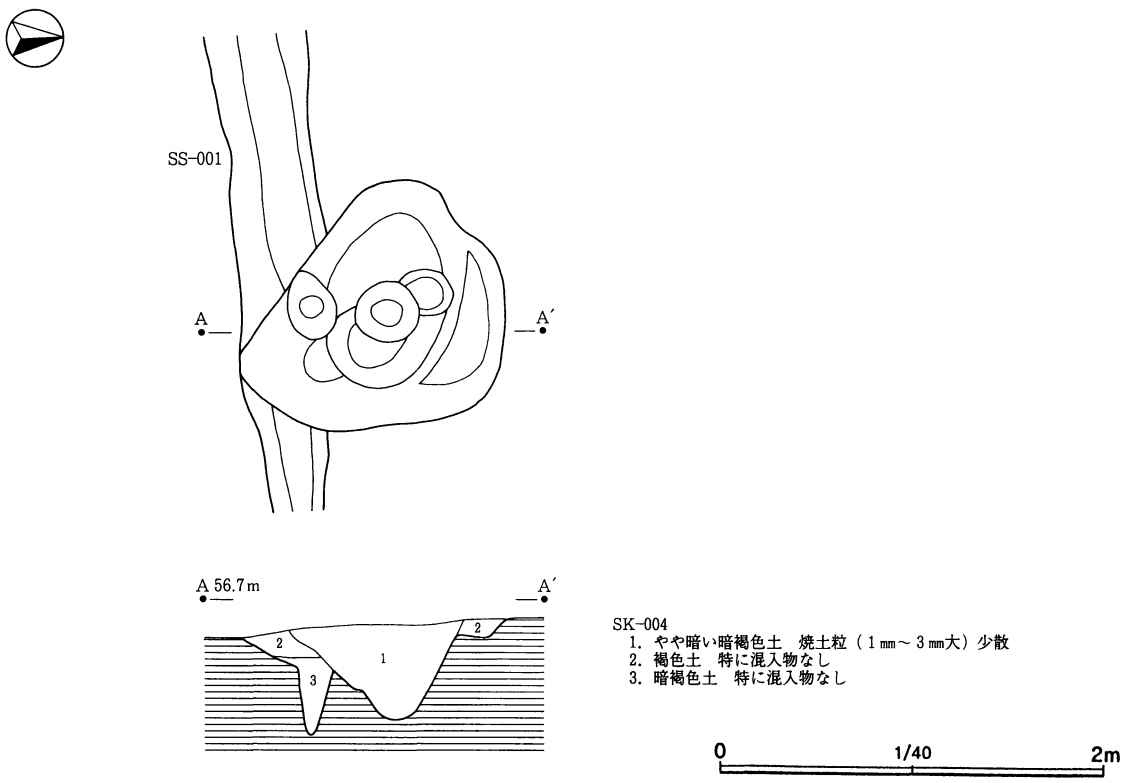
第31図　SK-003出土鉄釘（2）

第６表　SK-003出土掲載鉄釘計測表

挿図	番号	遺存状態	頭部側 木目方向	先端部側 木目方向	現存長(mm)	頭部幅(mm)× 厚さ(mm)	身幅(mm)× 厚さ(mm)	重量(g)
第30図	1	頭部～先端(完形)	横	縦	105.5	6.5×6.0	5.0×4.0	14.6
第30図	2	頭部～先端(完形)	横	縦	92.0	6.7×4.5	4.5×4.0	8.5
第30図	3	頭部～先端(完形)	横	縦	79.0	7.0×5.5	4.0×3.7	8.8
第30図	4	頭部～中位	横	なし	59.5	7.0×5.7	5.5×4.0	9.0
第30図	5	先端のみ欠	横	縦	59.0	6.0×5.0	3.8×4.5	6.6
第30図	6	頭部～先端(完形)	横	縦？	62.0	6.0×6.0	4.5×4.0	5.6
第30図	7	先端のみ欠	横	なし	54.0	5.2×6.0	4.5×4.5	8.7
第30図	8	先端のみ欠	横	縦	53.0	5.0×4.5	3.5×3.5	5.4
第30図	9	先端のみ欠	横	なし	48.0	8.0×6.8	4.5×3.5	7.0
第30図	10	頭部～中位	横	不明	53.0	6.0×7.5	4.5×4.5	6.9
第30図	11	先端のみ欠	横	縦	51.3	7.5×5.0	5.0×4.5	6.1
第30図	12	頭部～中位	横	不明	44.5	7.0×6.5	5.0×4.5	8.3
第30図	13	先端のみ欠	横	不明	51.0	6.3×5.5	5.0×4.3	7.3
第30図	14	頭部～中位	横	なし	42.0	4.8×5.5	3.5×5.0	4.6
第30図	15	頭部～中位	横	なし	46.5	6.5×5.8	5.5×4.2	6.4
第30図	16	頭部～中位	横	なし	43.5	7.0×5.8	5.0×4.0	7.1
第31図	17	頭部～中位	横	なし	39.5	6.0×5.5	4.5×4.0	5.4
第31図	18	頭部～中位	横	なし	32.0	6.2×4.5	5.0×4.5	5.4
第31図	19	頭部～中位	横	なし	37.0	7.0×6.5	5.0×4.0	3.5
第31図	20	頭部～中位	横	横？	28.5	6.5×5.8	3.5×4.0	4.2
第31図	21	頭部～中位	横	なし	17.0	7.0×4.8	5.5×4.0	2.0
第31図	22	中位	横	縦	48.5	－	4.0×5.0	3.8
第31図	23	中位	なし	横？	34.5	－	3.0×3.0	1.8
第31図	24	中位	なし	横	33.0	－	3.2×3.0	1.7
第31図	25	中位	横	不明	27.8	－	4.7×4.5	2.3
第31図	26	中位～先端	横	横	37.0	－	4.0×4.0	2.3
第31図	27	中位	縦	縦	14.0	－	3.0×3.0	0.9

SK-004は、A区3F-64・65・74・75グリッド、SS-001の南部に位置する土坑である。周溝SS-001と一部重複する。平面形は東西1.45m、南北1.20mの不整形を呈するが、複数のピットが重複しているようである。断面形は概ねV字形を呈する。検出面からの深さは、最も深いところで0.50mほどである。覆土は、焼土粒を含む暗褐色土を主体としている。

SK-004からは遺物は出土しておらず、詳細は明らかでないが、SS-001に伴う主体部であった可能性が高いと考えられる。



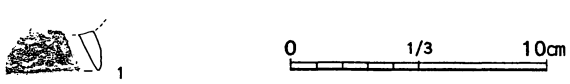
第32図　SK-004

4　溝状遺構

SD-007（第7・33図、図版11・14）

B区、2B-36・46・56・65・66・75・76・85・86・95・96、3A-28・29・38・39、3B-20～26・30～34グリッドで検出した溝状遺構である。南北方向－東西方向に屈曲し、L字形を呈する。検出された長さは南北方向が約19m、東西方向が約15mである。幅は約1.2m、検出面からの深さは最も深いところで0.65mほどで、断面形は緩いU字形である。掘立柱建物跡SB-003に伴う区画溝と考えられる。

図示した遺物は1点である。1は、土師器高台付杯の高台部破片である。

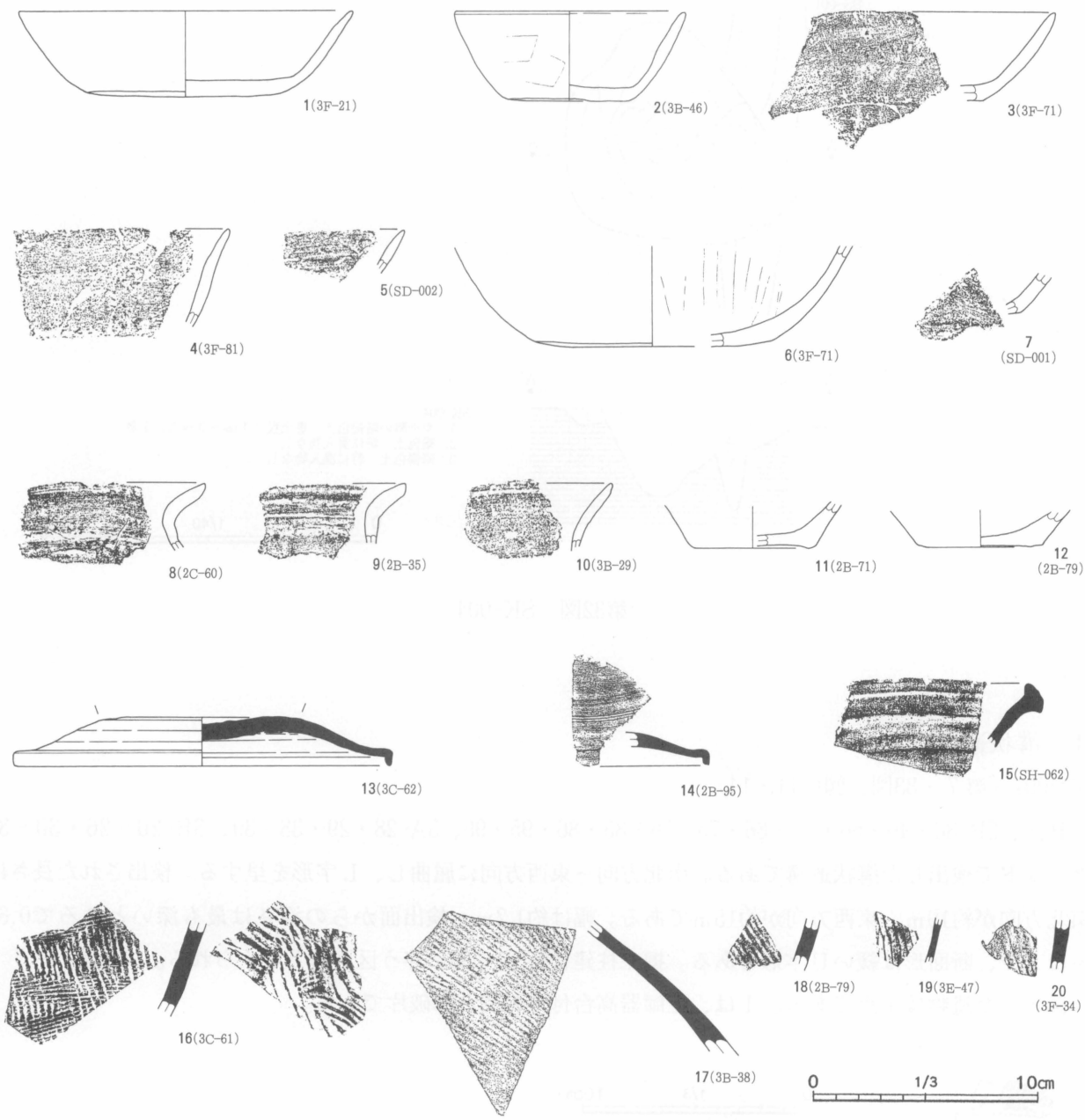


第33図　SD-007出土遺物

5　遺構外出土遺物（第34図、図版12・14・15）

ここでは、遺構外から出土した、奈良・平安時代の遺物を図示する。ただし、遺構覆土から出土していても、その遺構に伴わないと判断されるものも含む。

1～7は、土師器非ロクロの杯である。1～5・7は器面の磨耗が著しく、調整痕ははっきりしない。6の体部内面には、放射状の暗文が認められる。8～12は土師器甕の破片である。13・14は須恵器杯蓋である。13のつまみ部は剥落している。15～20は須恵器甕と考えられる。15は口縁部破片、16～20は胴部破片である。16の内面には同心円状の当て具痕が残されている。



第34図　奈良・平安時代の出土遺物

第3節　中世以降の遺構と遺物

ここでは、基本的に中世以降と考えられる遺構を報告するが、時期が特定できない遺構の多くも中世以降のものである可能性が高いため、それらもまとめて、遺構種類ごとに遺構番号順に、ここで報告することとする。

なお、調査区内からは多数のピットが検出されたが、ほとんどが時期及び機能不明である。それらは第47～49図に全て掲載したが、掲載されたピットのうち、「SH」の遺構番号をもつものは発掘調査時に時期及び機能不明とされたものである。一方、遺構番号をもたないピットは、発掘調査時には竪穴住居跡や掘立柱建物跡を構成する柱穴と考えられたが、整理作業時に検討を加えた結果、その根拠に欠けると判断されたものである。

1　土坑

SK-001（第35図、図版７）

Ａ区、3F-85・86グリッドに位置する土坑である。土層断面の観察から、重複するSD-001より古いとみられる。平面形は長軸1.35ｍ、短軸0.80ｍの楕円形を呈する。底面はやや平坦で、断面形はほぼ逆台形状を呈する。検出面からの深さは0.42ｍである。

遺物は出土しておらず、時期や機能等は不明である。

SK-002（第36図、図版７）

Ａ区、3F-95・96グリッドに位置する土坑である。平面形は長軸2.55ｍ、短軸1.60ｍの三角形状を呈する。底面はやや平坦で、断面形は逆台形状を呈する。検出面からの深さは0.46ｍである。

遺物は出土しておらず、時期や機能等は不明である。

SK-005（第37図）

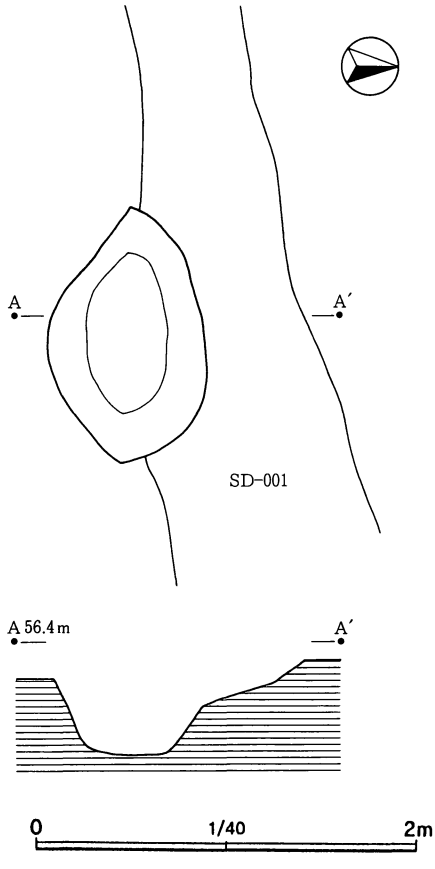
Ａ区、3E-99、3F-90グリッドに位置する土坑である。SD-001と接するが、新旧関係は不明である。平面形は長軸1.30ｍ、短軸1.00ｍの楕円形を呈する。底面はやや凹凸がある。検出面からの深さは0.33ｍである。

遺物は出土しておらず、時期や機能等は不明である。

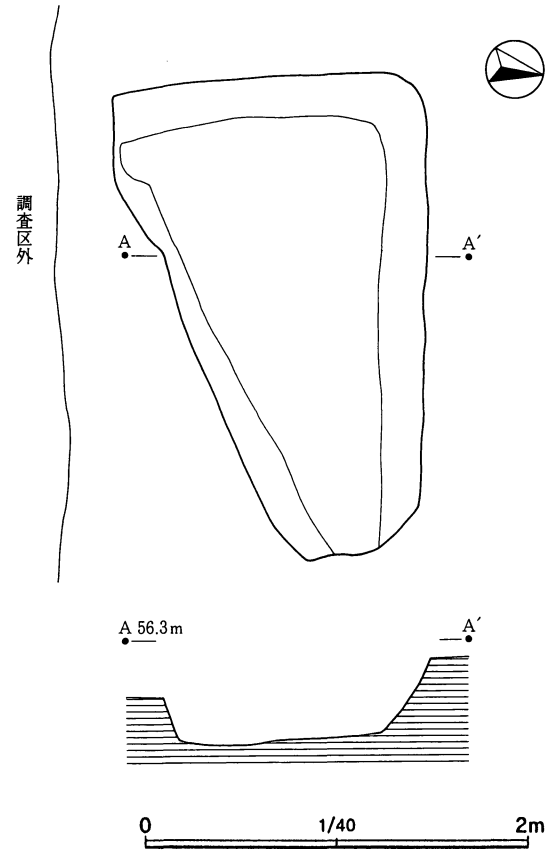
SK-006（第38図）

Ａ区、4E-08・18グリッドに位置する土坑である。南側は急斜面のため調査できなかった。平面形は楕円形とみられ、調査部分で長軸1.20ｍ、短軸0.50ｍ以上である。底面はやや平坦で、断面形は逆台形状を呈する。検出面からの深さは0.21ｍである。

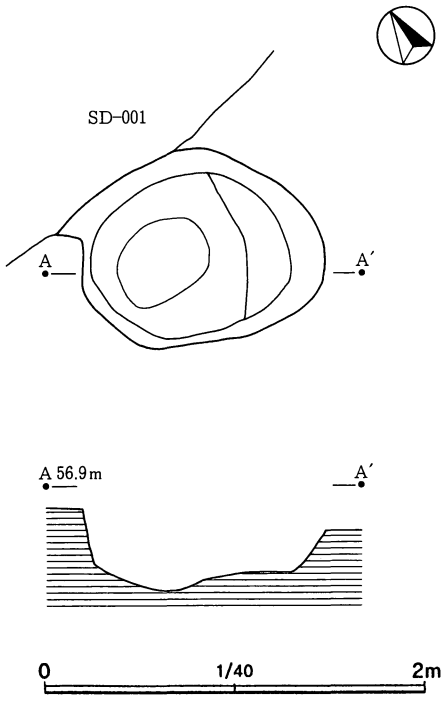
遺物は出土しておらず、時期や機能等は不明である。



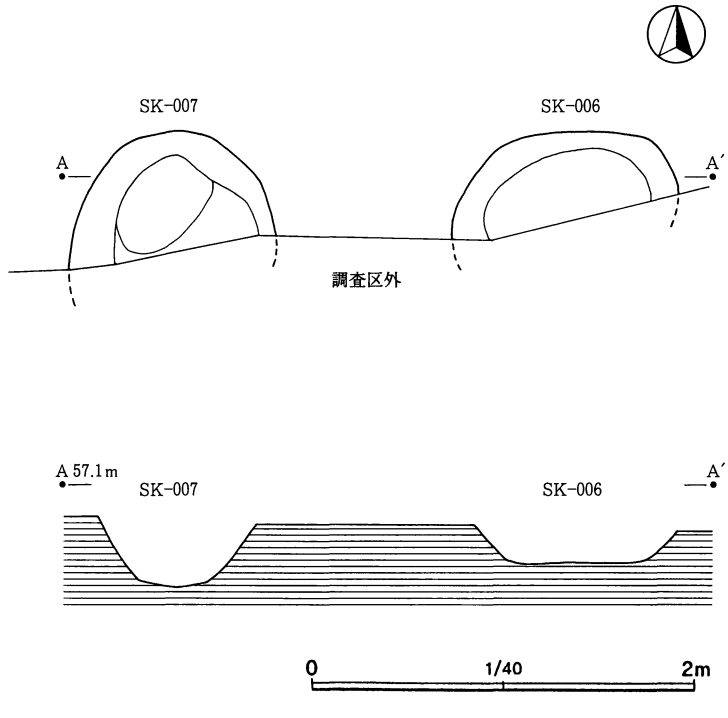
第35図　SK-001



第36図　SK-002



第37図　SK-005



第38図　SK-006・007

SK-007（第38図）

A区、4E-07・17グリッドに位置する土坑である。南側は急斜面のため調査できなかった。平面形は円形または楕円形とみられ、調査部分で長軸1.10m、短軸0.65m以上である。断面形はU字形を呈する。検出面からの深さは0.35mである。

遺物は土師器の小破片が少量出土したが、遺構に伴わない混入物と判断され、遺構の時期や機能等は不明である。

SK-008（第39図、図版7）

A区、3E-95～97グリッドに位置する土坑である。北側はSD-001と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は不整形を呈するようであり、調査部分で長軸2.50m、短軸1.50m以上である。断面形は緩いU字形を呈する。検出面からの深さは0.38mである。

遺物は出土しておらず、時期や機能等は不明である。

SK-009（第40図、図版8）

A区、3F-72グリッドに位置する土坑である。平面形は長軸1.00m、短軸0.80mの楕円形を呈する。断面形はV字形を呈する。検出面からの深さは0.44mである。

遺物は出土しておらず、時期や機能等は不明である。

SK-010（第40図、図版8）

A区、3F-71グリッドに位置する土坑である。平面形は長軸1.35m、短軸1.20mの円形を呈する。底面はやや平坦であるが、別のピット1基と重複するような窪みがある。断面形はV字形を呈する。検出面からの深さは0.33mである。

遺物は土師器の小破片が少量出土したが、遺構に伴わない混入物と判断され、時期や機能等は不明である。

SK-011（第41図、図版8）

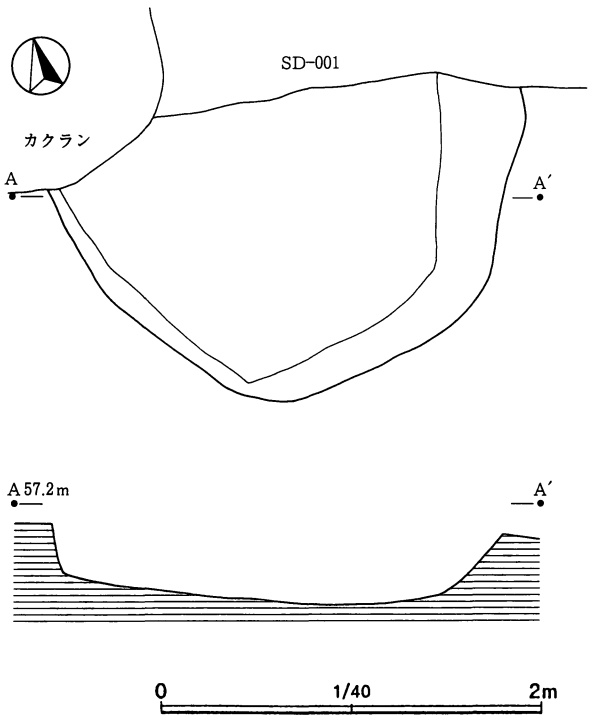
A区、3E-85グリッドに位置する土坑である。平面形は長軸0.90m、短軸0.85mの円形を呈する。断面形はU字形であるが、中央部がやや鋭く落ち込む。検出面からの深さは0.45mである。

遺物は出土しておらず、時期や機能等は不明である。

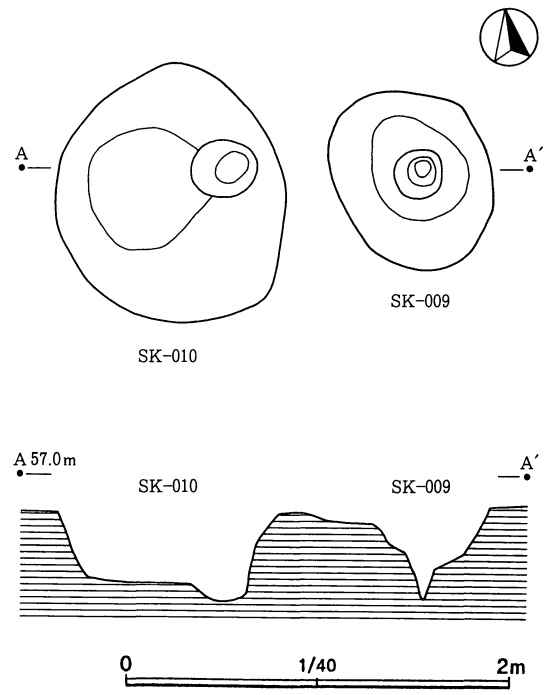
SK-012（第42図、図版9）

A区、3F-44・45・54・55グリッドに位置する土坑である。SK-013とつながっているが、新旧関係は不明である。平面形は長軸1.50m、短軸1.20mの楕円形を呈する。断面形はほぼ緩いU字形であるが、底面にやや段がみられる。検出面からの深さは0.41mである。

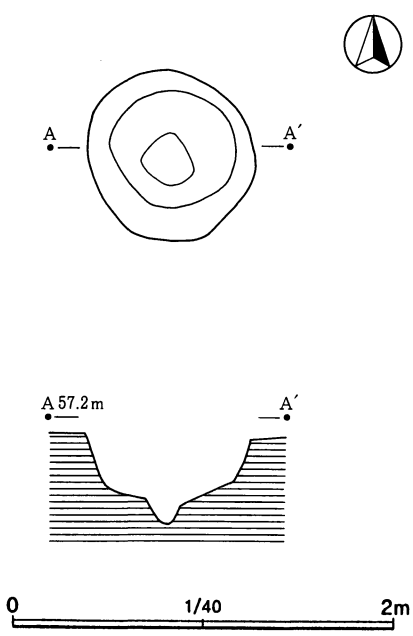
遺物は出土しておらず、時期や機能等は不明である。



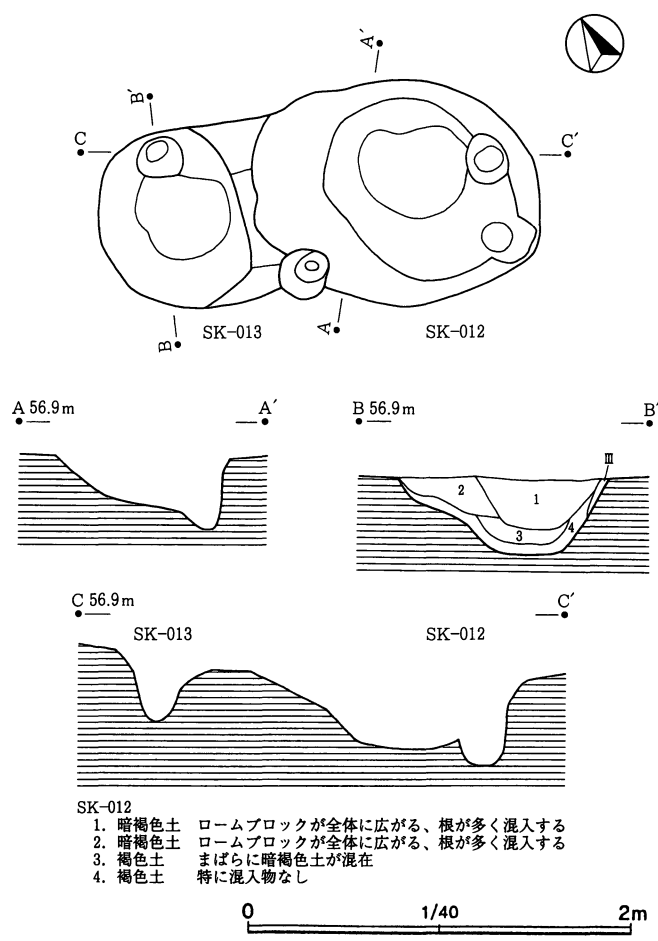
第39図　SK-008



第40図　SK-009・010



第41図　SK-011



第42図　SK-012・013

SK-013（第42図、図版９）

Ａ区、3F-44・54グリッドに位置する土坑である。SK-012とつながっているが、新旧関係は不明である。平面形は長軸0.95ｍ、短軸0.75ｍの楕円形を呈する。断面形はほぼ緩いＵ字形であるが、底面にやや段がみられる。検出面からの深さは0.26ｍである。

遺物は出土しておらず、時期や機能等は不明である。

SK-014（第43図）

Ｂ区、2C-71グリッドに位置する土坑である。平面形は径0.70ｍの円形を呈する。断面形はほぼ逆台形を呈する。検出面からの深さは0.16ｍである。

遺物は出土しておらず、時期や機能等は不明である。

SK-015（第44図、図版９）

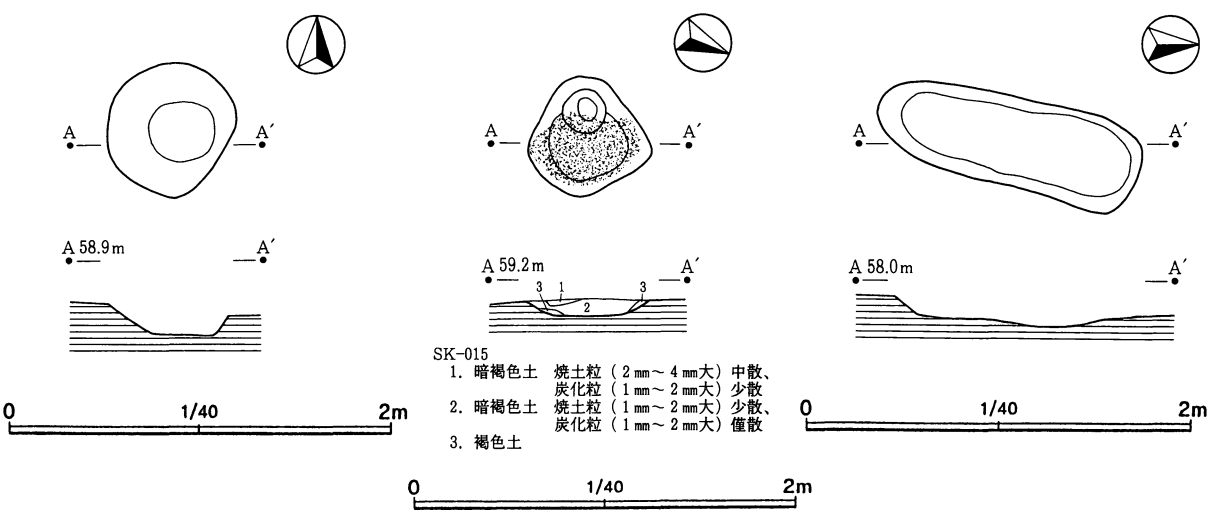
Ｂ区、3B-29グリッドに位置する土坑である。平面形は径0.60ｍの円形を呈する。断面形は緩いＵ字形を呈する。検出面からの深さは0.17ｍである。

遺物は、土師器の小破片が少量出土した。検出面で焼土の散布がみられたことから、炉などであった可能性も考えられる。

SK-016（第45図）

Ｂ区、2C-32・42グリッドに位置する土坑である。平面形は長軸1.40ｍ、短軸0.45ｍの長楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形状を呈する。検出面からの深さは0.16ｍである。

遺物は出土しておらず、時期や機能等は不明である。



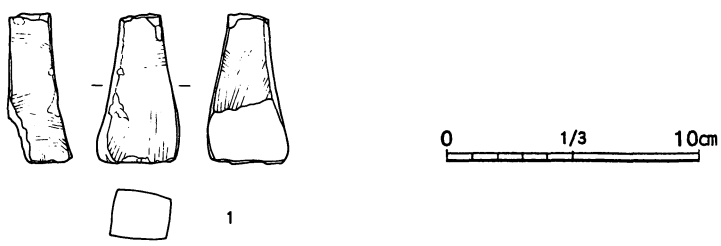
第43図　SK-014　　第44図　SK-015　　第45図　SK-016

2　溝状遺構

SD-001（第６図、図版９・12）

Ａ区、3E-71～73・80～83・85～89・93・95～99、3F-08・09・18・19・28・38・48・58・68グリッドで検出した、調査区を東西に走る溝状遺構である。検出された長さは約32ｍ、幅は約1.8ｍである。断面形は緩いＵ字形を呈し、検出面からの深さは0.18ｍ～0.48ｍである。覆土は焼土粒や炭化粒を少量含む、ややしまりのない暗褐色土を主体とする。

図示した遺物は１点である。第46図１は、凝灰岩製の砥石である。図上面が折れ面となっている以外は、全ての面が使用されている。現存の長さは5.8㎝、幅は3.2㎝、厚さは2.6㎝、重量45.2ｇである。遺物はこのほかには縄文土器の小破片が少量、土師器の小破片が少量出土したのみであるが、いずれも当遺構に伴わない混入物と判断される。遺構の時期は、遺構の状況等から中・近世以降とみられる。



第46図　SD-001出土遺物

SD-002（第６図、図版10）

Ａ区、3F-75・76グリッドで検出した溝状遺構である。検出された長さは約2.5ｍ、幅は約0.8ｍである。断面形は緩いＵ字形を呈し、検出面からの深さは0.16ｍである。覆土は焼土粒や炭化粒を少量含む暗褐色土を主体とする。底面に硬化面が検出されたことから、道として機能していたものと考えられる。

遺物は土師器の小破片が少量出土したのみである。このうち１点を図示したが（第34図５）、いずれも遺構に伴わない混入物と判断される。遺構の時期は、遺構の状況等から中・近世以降とみられる。

SD-003（第６図、図版10）

Ａ区、3E-28・29・38・39・49・59・69、3F-50・60・70・80グリッドで検出した溝状遺構である。検出された長さは約12.5ｍ、幅は約0.5ｍである。断面形は緩いＵ字形を呈し、検出面からの深さは0.08ｍである。覆土は特に混入物の認められない暗褐色土を主体とする。

遺物は出土していないが、時期は遺構の状況等から中・近世以降とみられる。

SD-004（第６図）

Ａ区、3F-61・62グリッドで検出した溝状遺構である。検出された長さは約3.5ｍ、幅は約0.7ｍである。底面は平坦で、断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは0.08ｍである。覆土は焼土粒を少量含む暗褐色土を主体とする。

遺物は出土していないが、時期は遺構の状況等から中・近世以降とみられる。

SD-005（第６図、図版10）

Ａ区、3F-60・61グリッドで検出した溝状遺構である。検出された長さは約1.1ｍ、幅は約0.7ｍである。断面形は緩いＵ字形を呈し、検出面からの深さは0.06ｍである。

遺物は土師器の小破片が少量出土したが、遺構に伴わない混入物と判断される。遺構の時期は、遺構の状況等から中・近世以降とみられる。

SD-006（第６図）

Ａ区、3F-14・15グリッドで検出した溝状遺構である。検出された長さは約1.9ｍ、幅は約0.6ｍである。断面形は緩いＵ字形を呈し、検出面からの深さは0.10ｍである。

遺物は縄文土器と土師器の小破片が少量出土したが、いずれも遺構に伴わない混入物と判断される。遺構の時期は、遺構の状況等から中・近世以降とみられる。

SD-009（第７図、図版11）

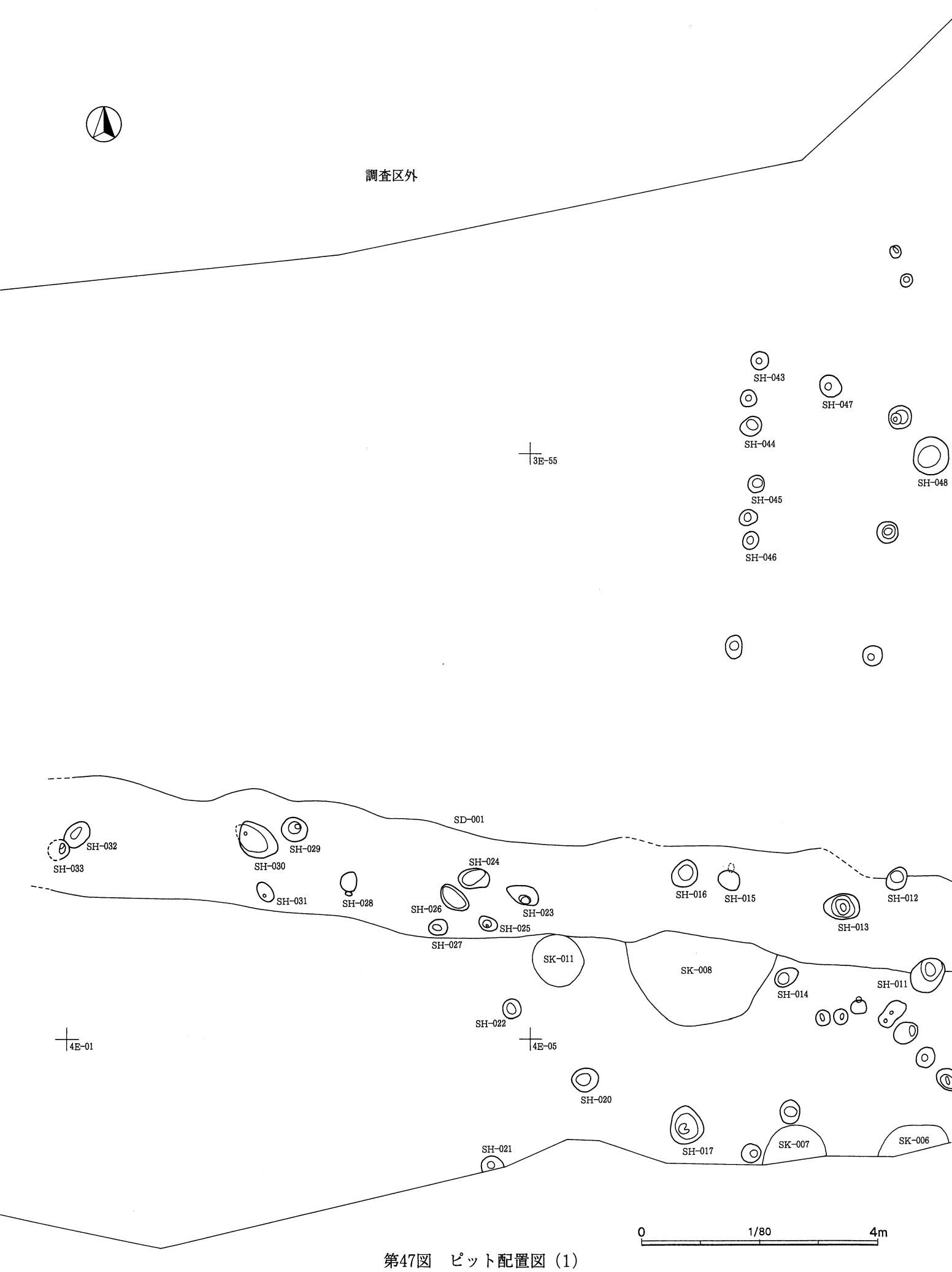
Ｂ区、3B-34・35・44・45・64・74・84・85・94・95、3C-40～42・50・51グリッドで検出した溝状遺構である。検出された長さは約15.0ｍ、幅は約2.0ｍである。断面形は段状を呈し、検出面からの深さは最も深いところで0.90ｍである。覆土中に硬化面が数層みられることから、道として機能していたものと考えられる。

遺物は土師器の小破片が少量出土したが、いずれも遺構に伴わない混入物と判断される。遺構の時期は、遺構の状況等から中・近世以降とみられる。

SD-010（第７図）

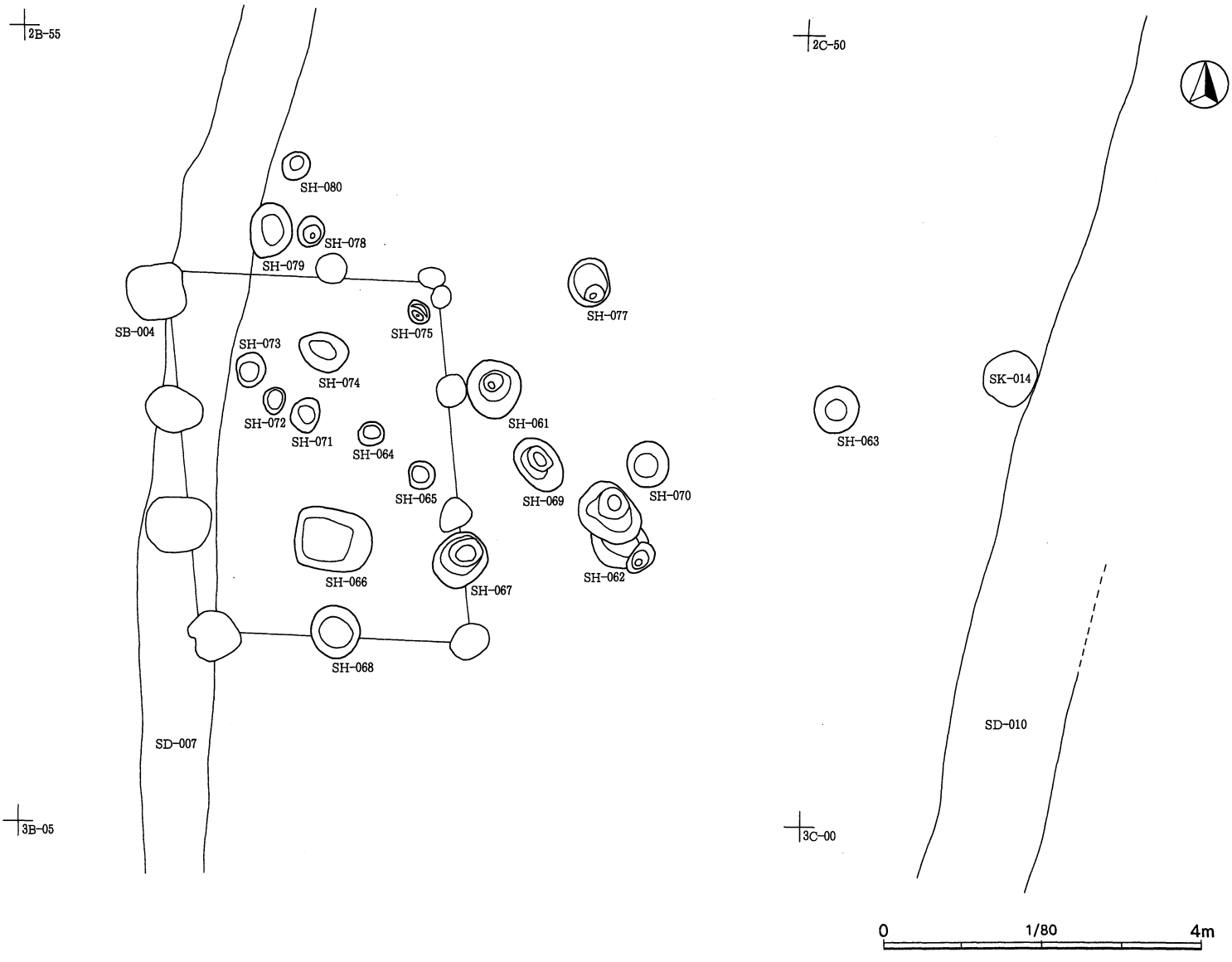
Ｂ区、2C-32・42・51・52・61・71・81・90・91、3B-39・49、3C-00・01・10・11・20・30・40グリッドで検出した溝状遺構である。検出された長さは約23.0ｍ、幅は約1.4ｍである。断面形は緩いＵ字状を呈し、検出面からの深さは最も深いところで0.40ｍである。覆土はローム粒を含む暗褐色土を主体とする。

遺物は縄文土器、土師器、須恵器の小破片がそれぞれ少量ずつ出土したが、いずれも遺構に伴わない混入物と判断される。遺構の時期は、遺構の状況等から中・近世以降とみられる。



第47図　ピット配置図（1）

第48図　ピット配置図（2）



第49図　ピット配置図（3）

第3章　まとめ

下谷遺跡では、縄文時代～奈良・平安時代、中世以降の遺構・遺物が検出された。ここではこれらについて、時代毎に若干考察を加えてまとめてみたい。

第1節　縄文時代

縄文時代は、調査区内から遺物が出土したのみで、遺構は検出されなかった。概して遺物の総量は多くはなく、分布も散漫な状況ではあるが、早期・中期・後期の土器が認められ、それらが時期毎にやや異なる分布傾向を見せるようである。このうち特に早期の土器はＢ区、つまり調査区西側地区の、北側の斜面部で多く出土した。調査区内からは礫も出土しているが、ほぼ同じ部分に多い傾向である。このことから、出土した礫の多くは、早期に位置づけられるものと考えられよう。

中期・後期の土器、特に後期の土器は主体を占めるものであるが、明確な集中域をもたない傾向である。強いて言えばＡ区よりもＢ区に多く、また北側斜面部に多いという、早期と同様の傾向が指摘できるが、早期ほど明確なものではない。

なお、発掘調査時に「縄文時代の竪穴住居跡」と考えられたピット群があったが、遺物が皆無である上、上記の分布傾向とは全く異なる場所に位置していたことから、本報告書では住居跡とは見なさず、時期不明のピットとして扱うこととした。

第2節　奈良・平安時代

1　下谷遺跡の変遷

下谷遺跡で主体となるのは奈良・平安時代の遺構・遺物である。奈良・平安時代の遺構としては、竪穴住居跡3軒、四面廂建物を含む掘立柱建物跡2棟、火葬骨を納めた主体部をもつ方形墳墓1基などが検出された。これらの遺構のうち、時期がほぼ確定できるのは竪穴住居跡であるが、ほかの遺構も、竪穴住居跡との切合い関係によっておよその時期を押さえることができる。また、それによって奈良・平安時代における下谷遺跡の流れを推定することも可能である。そこでまず、それぞれの遺構の時期について考えてみたい。

竪穴住居跡は、いずれも遺構の遺存状態は悪いが、遺物の遺存状態は比較的良いものが多い。そうした遺物をもとに竪穴住居跡の時期を考えてみると、SI-001とSI-014が8世紀中葉頃でほぼ同時期とみられ、SI-012がそれらより新しく、9世紀中葉頃に比定されよう。

方形墳墓については、周溝（SS-001）からも主体部とみられる土坑（SK-003・004）からも時期を特定できる遺物が出土していない。しかし、検出された竪穴住居跡のうち、8世紀中葉に比定できるSI-001が方形墳墓の周溝SS-001を切って構築されていたとみられることから、少なくとも8世紀中葉の下限が与えられ、火葬の始まりが700年とされていることから、8世紀前半代に築造されたものと考えられる。

掘立柱建物跡については、検出された2棟のうち、1棟については時期を考える上で手がかりとなる遺物が出土している。2間×3間の側柱建物であるSB-004の柱穴から出土した土師器杯で、8世紀中葉に

比定されるものと考えられる。これが遺構の時期を表しているかどうかはっきりしない面もあるが、SI-001やSI-014などの竪穴住居とほぼ同じ時期にあったとみることはできよう。

一方、区画溝を伴う四面廂建物とみられるSB-003については出土遺物がないが、SB-004がSB-003に伴う区画溝SD-007によって切られていることから、少なくともSB-004よりもSB-003のほうが新しい建物と考えることができる。さらに、SD-007は竪穴住居跡SI-012を切っていることから、SI-012の時期である9世紀中葉よりも新しいということができよう。

ところでSB-003とSB-004はどちらも2間×3間の側柱建物であるが、SB-003には四面廂と床束、そして区画溝が伴う。同じ建物を、より立派なものに建て替えたという可能性も考えられるのではないだろうか。SB-003は四面廂建物であり、竪穴住居跡SI-012から香炉蓋が出土していることなどから、仏堂（寺）であった可能性が考えられ、その前身建物と考えられるSB-004にも同様の性格が起想される。

以上のことから、奈良・平安時代の下谷遺跡を描いてみると、まずは丘陵上の最も鎗水川沿いの見晴らしの良い部分に、8世紀前半代に方形墳墓が築かれるようである。そしてその後の8世紀中頃、SI-001・SI-014の2軒の竪穴住居と掘立柱建物SB-004が営まれる。2軒の竪穴住居はほぼ同時に存在したとみられるが、遺物の内容から若干SI-014の方が古い可能性もある。また、その頃には方形墳墓の周溝はほぼ埋まっていたようであるが、方形墳墓に隣接するSI-001は、方形墳墓を意識して営まれ、SB-004とSI-014は近接することから、それぞれを意識して営まれていたのかもしれない。時代は下って9世紀中頃、竪穴住居SI-012が営まれる。その後、この住居が廃絶されてから、溝状遺構SD-007によって区画された四面廂の掘立柱建物SB-003が建立される。SB-003は、SB-004にかわって建てられたものと考えられる。

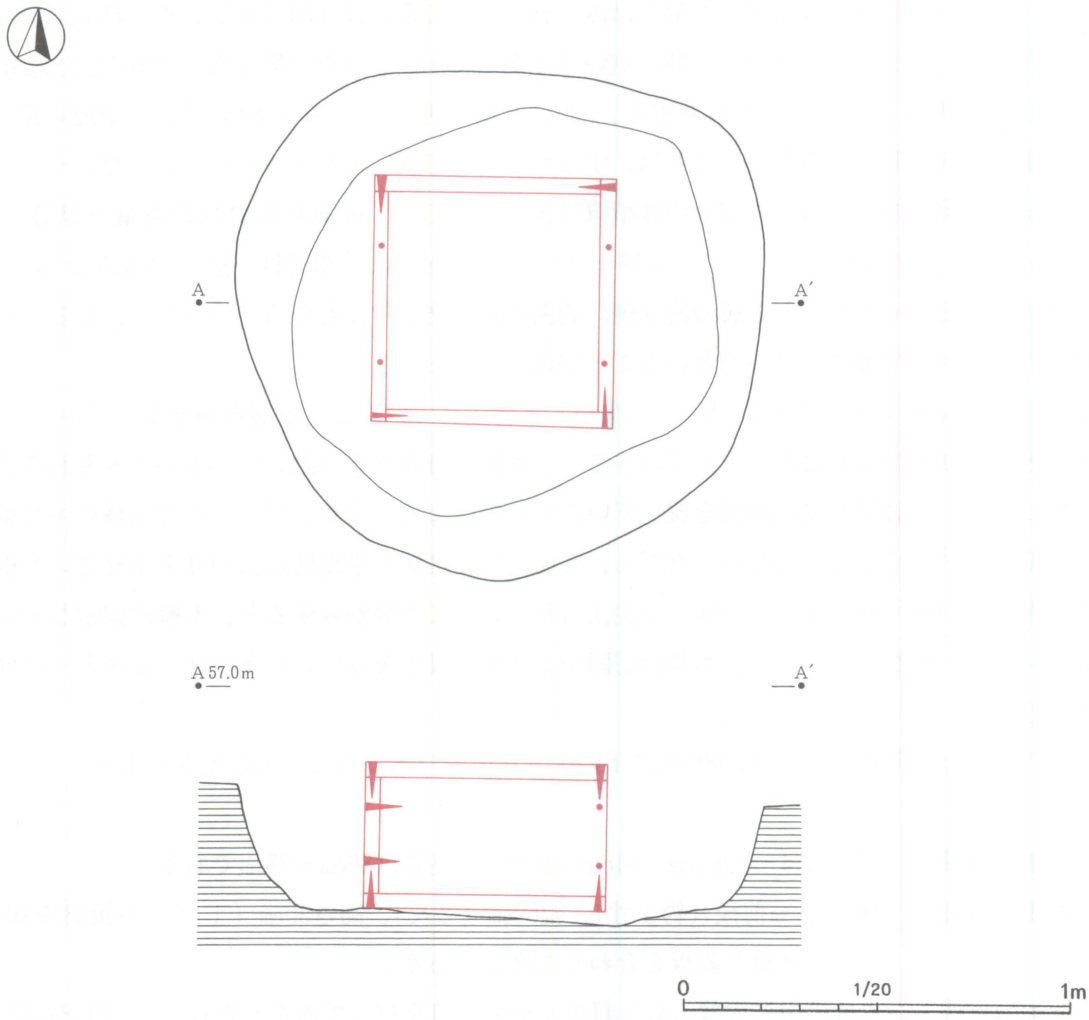
下谷遺跡は、火葬墓を主体部とする方形墳墓と2棟の掘立柱建物跡、3軒の竪穴住居跡からなる、奈良時代から平安時代初頭の遺跡である。竪穴住居は、墳墓や、仏堂と考えられる掘立柱建物を意識して建てられており、全体が宗教的な施設として機能していたものと考えられる。そしてこれが、更に時を経て、現在遺跡内に存在する宮田神社へとつながっていったものかもしれない。

2　方形墳墓主体部（SK-003）について

SK-003は、方形墳墓SS-001の墳丘南西四半部の中央に位置する土坑である。覆土から貝層とともに火葬人骨や鉄釘が出土したことから、方形墳墓の主体部と考えられる。この主体部について、若干の考察を加えてみたい。

まず、鉄釘が出土していることについてであるが、鉄釘は合計27点を図示した（第30・31図）。これらのうち21点については出土位置の記録があり、それによると、平面的には、北辺と南辺にまとまる傾向と四隅に定量の分布が認められる。垂直方向の分布状況では、検出面からの深さが5㎝までに出土したものが8点、10㎝～20㎝の間が9点、20㎝から底面までで検出したもの4点というまとまりがみられる（第29図）。このような鉄釘の分布状況は、即ち木櫃の規模を示すと判断されよう。ただし、北辺はほぼ一直線上に分布していることから、ほとんど攪乱や移動が無かったものと判断されるが、南辺では南西側に分布が流れており、後世の攪乱や側板の移動などが考えられる。

これらを踏まえ、木櫃の復元を試みると、断面に認められる貝層の立ち上がりが幅64㎝、鉄釘に遺存した木質から板厚が3㎝～4㎝と概ね1寸強であることを鉄釘の平面分布と考えあわせ、木櫃は1辺60㎝（2尺）に板厚をプラスした一辺63㎝～64㎝の方形の平面構造と推定されよう。そして、木櫃の高さもほ



第50図　SK-003木櫃推定復元図

ぼ同様であると判断され、本土坑の深さが0.37ｍであることから、高さ30㎝（１尺）に底板と蓋板の板厚をプラスした36㎝～37㎝の高さが推定される（第50図）。

注目すべき点は、鉄釘が四隅に分布する以外に、北辺中央上層から３点出土している点である。四隅については側板を留めるための釘と考えられるが、辺の中央の上部からの出土は蓋に打たれたものと考えるのが妥当である。北辺においては木櫃の上端が後世の攪乱を受けていないものと判断されることから、これには蓋を留める以上の意味合いが想起されよう。

即ち、現今、葬送に際し、近親者が棺桶の蓋の頭頂部付近に釘を打つ光景を良く眼にするが、これに通じることが行われていたという可能性が考えられる。勿論、これをそのようなものと結論付けるには多くの類例を待つ必要があろうが、的確な調査を促す意味でもその可能性を指摘しておきたい。

なお、木櫃に蓋がされ、儀礼的な釘が打たれる段階では、そこに平面的な位置関係が成立していたという点も指摘できよう。仮に埋置以前に釘が打たれたとすれば、その時点で埋置方向が決定されていたことになるだろう。

次に、検出された貝層についてであるが、選別した貝の重量を遺物番号毎に計量し集計したところ、そ

れぞれに含まれる貝種には目立った偏りはみられず、貝の重量は「34（トレンチ一括）」「37（下層一括）」「33（貝一括）」「36（上層一括）」の順に重いことが明らかとなった（第5表）。回収した部分の体積概算値からすれば「33（貝一括）」が最も重く、「36（上層一括）」と「37（下層一括）」が最も軽いと考えられるが、齟齬をきたしているということは、すなわち貝の密度に差があるということだろう。

そこで貝の重量を、回収した部分の体積概算値で割って、1㎥あたりの貝の重量を試算してみると、「36（上層一括）」が0.48g/㎥、「37（下層一括）」が1.41g/㎥、「33（貝一括）」が0.06g/㎥となり、貝層の下層における貝の密度が、上層の約3倍、周囲の約24倍ほどにもなるということになる。つまり貝は、下層に特に集中して堆積していたということが言えるだろう。

また、火葬人骨は「37（下層一括）」に集中して含まれていたことが明らかとなっている。貝層が土坑中央付近で盛り上がる断面形を呈していること、木櫃の釘があまり動いていないとみられることなどと考え合わせれば、貝層は木櫃の周囲を覆っていたものではなく、火葬人骨とともに木櫃の中に納められていたと考えるのが妥当かもしれない。ただし、底面付近で貝層が平面的に広がりを見せている様子や、検出面で貝層が4か所に分かれていた様子が捉えられていること等からすると、木櫃の固定などのために、土坑底面に貝殻が敷かれていたり、木櫃の周囲や上面を貝殻で覆っていたということがあった可能性も、否定はできない。

以上の諸点をまとめると、SK-003は以下のような構造であったものと推定されよう。

1．木櫃の規模　平面形は一辺63㎝～64㎝の方形で、高さは36㎝～37㎝である。
2．木櫃の構造　厚さ3.5㎝前後（約1寸）、幅60㎝（2尺）、高さ30㎝（1尺）の板材を組み合わせ、上下に底板と蓋板を合わせた構造である。
3．埋納の方法　木櫃の中に火葬人骨と貝殻を納め、釘を打って蓋をした後、一辺1.3m前後の隅丸方形の土坑に据えて埋めた。その際、木櫃の周囲を、貝殻で覆った可能性もある。
4．その他　葬送儀礼として、木櫃の蓋に釘を打っていた可能性が考えられる。

下谷遺跡周辺の遺跡では方形・円形墳墓が多く検出されているが、今回の調査成果がその重要な類例の一つに加えられたことは言うまでもないだろう。

第7表　下谷遺跡掲載土器観察表

挿図	番号	出土位置	種別	器種	遺存度	口径	底・裾径	頸径	胴部最大径	器高	重量	技法			胎土					色調		焼成	備考
						(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(g)	外面	内面	底外面	緻密	砂粒	赤色粒子	白色針状物質	その他	外面	内面		
第8図	1	2B-35	縄文	深鉢	口縁部破片	—	—	—	—	[3.9]	18	竹管文	擦痕			○			繊維少量	5YR4/2	10YR4/2	○	条痕文系
第8図	2	2B-56	縄文	深鉢	胴部破片	—	—	—	—	[4.5]	32	貝殻条痕文	擦痕			○			繊維中量	5YR4/2	5YR4/2	○	条痕文系
第8図	3	2B-51	縄文	深鉢	胴部破片	—	—	—	—	[5.3]	29	貝殻条痕文	擦痕			○			繊維中量	5YR4/3	7.5YR5/3	○	条痕文系
第8図	4	3F-52	縄文	深鉢	口縁部破片	—	—	—	—	[3.2]	21	縄文・沈線	ミガキ			○		▲		10YR5/3	7.5YR5/4	○	加曽利E式
第8図	5	4E-04	縄文	深鉢	胴部破片	—	—	—	—	[3.1]	18	縄文・沈線	ミガキ			○		△		7.5YR5/4	7.5YR4/2	○	加曽利E式
第8図	6	3E-38	縄文	深鉢	胴部破片	—	—	—	—	[3.6]	22	縄文	ミガキ			○		▲		5YR5/4	7.5YR6/4	○	加曽利E式
第8図	7	2A-59	縄文	深鉢	胴部破片	—	—	—	—	[3.3]	28	条線	ミガキ？			○		▲		5YR4/3	2.5YR4/4	○	加曽利E式
第8図	8	SI-014	縄文	深鉢	胴部破片	—	—	—	—	[4.7]	47	条線	ナデ			◎				5YR5/4	5YR5/4	○	称名寺式
第8図	9	2B-72	縄文	浅鉢？	体部破片	—	—	—	—	[2.4]	11	沈線・列点	ミガキ			○		○		7.5YR4/2	7.5YR5/3	○	称名寺式
第8図	10	SB-003	縄文	深鉢	口縁部破片	—	—	—	—	[5.0]	29	沈線	ミガキ			△		○		2.5Y4/1	7.5YR5/4	○	称名寺式
第8図	11	SB-003	縄文	深鉢	胴部破片	—	—	—	—	[7.4]	34	沈線	ナデ			△		○		5YR4/3	5YR4/2	○	称名寺式
第8図	12	2A-59	縄文	深鉢	胴部破片	—	—	—	—	[5.3]	47	沈線	ミガキ			△	△	○		5YR5/3	5YR5/4	○	称名寺式
第8図	13	SB-003	縄文	深鉢	胴部破片	—	—	—	—	[5.3]	65	沈線・列点	ミガキ			○	△	△		10YR4/1	5YR5/4	○	称名寺式
第8図	14	3C-71	縄文	深鉢	胴部破片	—	—	—	—	[3.2]	27	沈線・列点	ミガキ			○		△		7.5YR4/3	5YR4/4	○	称名寺式
第8図	15	SD-001	縄文	深鉢	口縁部破片	—	—	—	—	[3.1]	15	沈線	ミガキ？			△		▲		7.5YR6/4	7.5YR5/4	○	堀之内式
第8図	16	2A-53	縄文	深鉢	口縁部破片	—	—	—	—	[2.6]	13	刺突	ヘラナデ			○		△		5YR4/3	7.5YR4/1	○	堀之内式
第8図	17	表採	縄文	深鉢	口縁部破片	—	—	—	—	[4.2]	21	条線	ヘラナデ			○		▲		7.5YR5/3	7.5YR5/3	○	堀之内式
第8図	18	SI-012	縄文	深鉢	口縁部破片	—	—	—	—	[3.3]	15	条線	ナデ			○		△		7.5YR5/4	7.5YR5/4	○	堀之内式
第8図	19	3F-20	縄文	深鉢	胴部破片	—	—	—	—	[4.5]	23	沈線・条線	ナデ			○		▲		7.5YR4/1	5YR5/4	○	堀之内式
第8図	20	2A-59	縄文	深鉢	胴部破片	—	—	—	—	[3.8]	20	条線	ミガキ？			△		○		5YR5/4	7.5YR5/3	○	堀之内式
第8図	21	SD-007	縄文	深鉢	胴部破片	—	—	—	—	[8.5]	91	条線	ナデ？			◎		▲		5YR5/4	5YR5/4	○	堀之内式
第8図	22	2C-94	縄文	深鉢	胴部破片	—	—	—	—	[4.4]	36	条線	ナデ？			○		○		5YR5/4	7.5YR5/3	○	堀之内式
第8図	23	2A-87	縄文	深鉢	胴部破片	—	—	—	—	[4.7]	25	条線	ミガキ			○		△		5YR4/3	5YR5/3	○	堀之内式
第8図	24	表採	縄文	深鉢	胴部破片	—	—	—	—	[3.6]	18	条線	ミガキ			○		▲		5YR5/4	2.5YR4/3	○	堀之内式
第8図	25	SI-012	縄文	深鉢	胴部破片	—	—	—	—	[3.6]	20	条線	ナデ？			○		△		5YR5/4	7.5YR5/3	○	堀之内式

挿図	番号	出土位置	種別	器種	遺存度	口径	底・裾径	頸径	胴部最大径	器高	重量	技法			胎土					色調		焼成	備考
						(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(g)	外面	内面	底外面	緻密	砂粒	赤色粒子	白色針状物質	その他	外面	内面		
第8図	26	SB-003	縄文	深鉢	胴部破片	—	—	—	—	[3.7]	30	条線	ナデ			○		▲		10YR4/1	7.5YR5/3	○	堀之内式
第8図	27	A2-68	縄文	蓋	口縁部破片	(10.8)				[2.0]	15	ナデ	ナデ			○		▲	白色粒子中量	7.5YR4/3	5YR5/4	○	焼成前穿孔1か所
第13図	1	SI-001	土師器	杯	全体の70%遺存	15.6	10.3			4.6	150	不明(磨耗)	不明(磨耗)			△	△	▲		5YR5/6～5YR4/3	7.5YR5/4～5YR4/3	△	
第13図	2	SI-001	土師器	杯	口縁部の30%遺存	(12.4)	—			[3.2]	27	不明(磨耗)	ナデ？(磨耗)			○	△	▲		7.5YR6/4	7.5YR6/4	△	
第13図	3	SI-001	土師器	杯	口縁部の30%遺存	(16.0)	—			[3.5]	36	不明(磨耗)	不明(磨耗)		○	△		▲		7.5YR6/4	7.5YR6/4	△	
第13図	4	SI-001	須恵器	甕	胴部破片	—	—	—	—	[11.0]	241	タタキ	ハケ状工具によるナデ			○				10YR6/2	10YR6/2	○	
第17図	1	SI-012	土師器	杯	全体の80%遺存	11.8	7.6			4.1	108	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ	ナデ？(磨耗)			○	○	△	雲母少量	7.5YR5/4～7.5YR4/3	5YR5/4	○	
第17図	2	SI-012	土師器	杯	全体の90%遺存	12.3	6.2			3.7	104	体部ロクロ調整、底部回転ヘラケズリ	ロクロ調整	回転ヘラ切り		○		○	雲母中量	2.5YR6/6～10YR6/6	2.5YR6/6	◎	
第17図	3	SI-012	土師器	杯	全体の70%遺存	12.4	7.0			3.9	113	体部ロクロ調整、底部回転ヘラケズリ	ロクロ調整	回転ヘラ切り？(磨耗)		○		△	雲母中量	5YR5/4～10YR5/3	7.5YR6/4～10YR4/2	○	
第17図	4	SI-012	土師器	杯	全体の95%遺存	12.4	7.0			5.0	112	体部ロクロ調整、底部回転ヘラケズリ	ロクロ調整	回転ヘラ切り		○	○	▲	雲母中量	7.5YR6/4～7.5YR5/3	7.5YR6/4	○	
第17図	5	SI-012	土師器	杯	底部の60%遺存	—	7.8			[2.1]	70	体部ロクロ調整、底部回転ヘラケズリ	ロクロ調整	回転ヘラ切り		○	▲	▲	雲母中量	5YR6/6～2.5YR5/6	2.5YR5/6	◎	
第17図	6	SI-012	土師器	皿	全体の90%遺存	14.4	6.3			2.6	103	体部ロクロ調整、底部回転ヘラケズリ	ロクロ調整	回転ヘラ切り		○		◎	白色粒子中量	5YR6/6～10YR5/2	5YR6/6	○	
第17図	7	SI-012	土師器	皿	口縁部の30%遺存	(13.3)	—			[2.4]	24	体部ロクロ調整、底部回転ヘラケズリ	ロクロ調整			○	○	○		7.5YR6/6	7.5YR5/4	◎	
第17図	8	SI-012	土師器	香炉蓋	天井部の15%遺存	—				[2.2]	36	体部ロクロ調整、天井部回転ヘラケズリ	ロクロ調整			○		▲		7.5YR5/4(赤彩？)	7.5YR5/3	○	
第17図	9	SI-012	土師器	甕	口縁部破片	—	—	—	—	[1.9]	11	ヨコナデ	ヨコナデ			○				7.5YR5/4	5YR5/3	○	
第17図	10	SI-012	土師器	台付甕	接合部の30%遺存	—	—	—	—	[1.9]	19	ヘラケズリ	甕部ヘラナデ、脚部ヘラケズリ			○	○	▲		5YR4/2	5YR4/3	○	
第17図	11	SI-012	須恵器	壺	肩部破片	—	—	(7.8)	—	[6.2]	160	自然釉	ロクロ調整			○			黒色粒子中量	2.5Y5/2(自然釉)	2.5Y5/1	○	
第17図	12	SI-012	須恵器	甕	胴部破片	—	—	—	—	[7.0]	101	タタキ	ナデ			△			雲母多量	10YR4/1	2.5Y5/1	○	
第17図	13	SI-012	須恵器	甕	胴部破片	—	—	—	—	[3.0]	17	タタキ	不明(磨滅)			◎				7.5YR3/4	5YR5/1	△	
第22図	1	SI-014	土師器	杯	全体の95%遺存	13.1	7.3			4.1	178	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ	ミガキ(暗文)			○		○	雲母中量	7.5YR6/4～2.5YR5/6	7.5YR5/3～10R5/6	○	
第22図	2	SI-014	土師器	杯	100%遺存	12.9	9.2			3.7	177	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ	ミガキ？(磨耗)			○		○	雲母中量	7.5YR5/4～7.5YR5/3	7.5YR5/4	○	外面底部に墨書
第22図	3	SI-014	土師器	杯	全体の50%遺存	(13.0)	8.4			4.5	87	不明(磨耗)	不明(磨耗)			○		◎		2.5YR5/6	5YR6/6	○	
第22図	4	SI-014	土師器	杯	100%遺存	12.8	9.6			3.0	153	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	ミガキ？(磨耗)			○		○		5YR6/6	10YR5/3～7.5YR5/4	◎	
第22図	5	SI-014	土師器	杯	全体の90%遺存	8.0	4.5			3.1	62	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	ナデ			○		○	雲母中量	2.5YR5/6～2.5YR4/2	7.5YR5/4	○	
第22図	6	SI-014	土師器	鉢	全体の90%遺存	15.9	9.8			7.6	335	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ？(磨耗)			○		▲	雲母・白色粒子中量	5YR5/4～5YR5/6	5YR5/4	○	
第22図	7	SI-014	土師器	甕	口縁部破片	—	—	—	—	[2.5]	10	ヨコナデ	ヨコナデ			○		▲		7.5YR5/3	7.5YR5/3	○	

挿図	番号	出土位置	種別	器種	遺存度	口径	底・裾径	頸径	胴部最大径	器高	重量	技法			胎土					色調		焼成	備考
						(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(g)	外面	内面	底外面	緻密	砂粒	赤色粒子	白色針状物質	その他	外面	内面		
第22図	8	SI-014	土師器	甕	頸部破片	−	−	−	−	[4.8]	47	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ			○			雲母中量	5YR4/3	5YR5/4	○	
第22図	9	SI-014	土師器	甕	底部の20%遺存	−	(7.2)	−	−	[3.1]	35	ヘラケズリ	ヘラナデ			○		▲		7.5YR4/2	7.5YR5/3	○	
第26図	1	SB-004	土師器	杯	全体の20%遺存	(14.8)	(9.4)			[3.5]	27	不明(磨耗)	不明(磨耗)		○	○	○	△		2.5YR5/6〜5YR5/3	7.5YR5/4	◎	
第33図	1	SD-007	土師器	高台付杯	高台部破片	−	−			[1.5]	3	ロクロ調整	ロクロ調整			○				5YR5/4	5YR5/4	○	
第34図	1	3F-21	土師器	杯	全体の50%遺存	(14.8)	(8.8)			3.8	83	不明(磨耗)	不明(磨耗)			○		▲		5YR6/6〜7.5YR4/3	2.5YR5/6	○	
第34図	2	SI-012	土師器	杯	全体の40%遺存	(8.4)	(2.8)			4.0	44	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ	ナデ？ミガキ？(磨耗)			○		△	雲母中量	5YR6/6	5YR5/4	○	
第34図	3	3F-71	土師器	杯	口縁部破片	−	−			4.0	7	不明(磨耗)	不明(磨耗)			○		○		7.5YR6/4	7.5YR5/4	○	
第34図	4	3F-81	土師器	杯	口縁部破片	−	−			[4.3]	23	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ？(磨耗)			○		▲		7.5YR5/4	7.5YR5/4	○	
第34図	5	SD-002	土師器	杯	口縁部破片	−	−			[2.0]	5	ロクロ調整	ロクロ調整			○		○		10YR4/1	10YR4/1(黒色処理)	○	
第34図	6	3F-71	土師器	鉢	底部の20%遺存	−	(10.6)			[4.4]	51	不明(磨耗)	ミガキ(暗文)			△	△	△		7.5YR5/4	5YR5/4	○	
第34図	7	SD-001	土師器	杯	底部破片	−	−			[1.8]	7	ヘラケズリ？(磨耗)	ナデ			○				7.5YR5/4	10YR4/1(黒色処理)	○	
第34図	8	C2-60	土師器	甕	口縁部破片	−	−	−	−	[3.0]	19	口唇部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ	口唇部ヨコナデ、頸部ヘラナデ			△		▲		7.5YR4/3	5YR5/4	○	
第34図	9	B2-35	土師器	甕	口縁部破片	−	−	−	−	[2.7]	14	口唇部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ	口唇部ヨコナデ、頸部ヘラナデ			○		▲		7.5YR4/2	5YR5/3	○	
第34図	10	B3-29	土師器	甕	口縁部破片	−	−	−	−	[3.0]	10	ヨコナデ	ヨコナデ			△		▲		7.5YR4/2	5YR5/4	○	
第34図	11	B2-71	土師器	甕	底部の20%遺存	−	(5.4)	−	−	[2.1]	13	ナデ	ナデ			○				5YR5/4	7.5YR5/3	○	
第34図	12	B2-79	土師器	甕	底部の40%遺存	−	(5.6)	−	−	[1.6]	24	ヘラケズリ後ナデ	ナデ			○				5YR5/4	7.5YR4/3	○	
第34図	13	3C-62	須恵器	蓋	全体の60%遺存	(17.0)				1.9	133	ロクロ調整、天井部回転ヘラケズリ	ロクロ調整					○	白色粒子多量	5Y5/1	10Y4/1	○	つまみ部剥落
第34図	14	B2-95	須恵器	蓋	口縁部破片	−				[1.5]	10	ロクロ調整	ロクロ調整					▲		2.5Y5/2	2.5Y4/1	○	
第34図	15	2B-88	須恵器	甕	口縁部破片	−	−	−	−	[2.8]	20	ロクロ調整	ロクロ調整						白色粒子・黒色粒子少量	10YR4/1〜10YR5/1	2.5Y6/2	○	
第34図	16	3C-61	須恵器	甕	胴部破片	−	−	−	−	[4.4]	37	タタキ	当て具痕						白色粒子中量	10YR5/1	10YR5/1	○	
第34図	17	3B-38	須恵器	甕	胴部破片	−	−	−	−	[6.2]	50	タタキ	ナデ						白色粒子少量	5Y6/1(自然釉)	2.5Y5/1	○	
第34図	18	B2-79	須恵器	甕	胴部破片	−	−	−	−	[2.4]	5	タタキ	ナデ						白色粒子中量	2.5Y5/2(自然釉)	10YR5/2	○	
第34図	19	3E-47	須恵器	甕	胴部破片	−	−	−	−	[2.0]	2	タタキ	ナデ			△				10YR5/2	10YR5/2	○	
第34図	20	3F-34	須恵器	甕	胴部破片	−	−	−	−	[2.4]	6	タタキ	当て具痕			△				2.5Y6/1	10YR5/2	○	

※計測値の（　）は復元値、［　］は現存値を表す。
※胎土の緻密なものは「緻密」欄に○をした。含有混和材の◎は多量、○は中量、△は少量、▲は微量を表す。
※焼成の◎は良好、○は普通、△は不良を表す。

第8表　下谷遺跡出土遺物組成表（遺構）　（単位　点数：個　重量：g）

遺構番号		縄文土器		土師器		須恵器		陶磁器		粘土塊		遺構別土器	
種別	番号	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
SB	003	29	330	1	2	0	0	0	0	0	0	30	332
SB	004	2	18	4	40	0	0	0	0	0	0	6	58
SD	001	5	50	14	32	0	0	0	0	1	2	19	82
SD	002	0	0	4	13	0	0	0	0	0	0	4	13
SD	005	0	0	1	4	0	0	0	0	0	0	1	4
SD	006	1	10	1	3	0	0	0	0	0	0	2	13
SD	007	13	291	2	9	0	0	0	0	0	0	15	300
SD	009	0	0	7	18	0	0	0	0	2	4	7	18
SD	010	3	12	3	9	1	2	0	0	0	0	7	23
SH	061	1	16	0	0	0	0	0	0	0	0	1	16
SH	062	0	0	0	0	1	20	0	0	4	24	1	20
SH	063	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1
SI	001	3	24	57	312	1	241	0	0	8	15	61	577
SI	012	26	337	123	1,010	3	198	0	0	2	3	152	1,545
SI	014	3	58	137	1,275	0	0	0	0	1	2	140	1,333
SK	003	2	21	3	11	0	0	0	0	0	0	5	32
SK	004	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SK	007	0	0	1	5	0	0	0	0	0	0	1	5
SK	010	0	0	5	43	0	0	0	0	1	2	5	43
SK	011	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SK	012	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SK	015	0	0	1	5	0	0	0	0	0	0	1	5
SS	001	0	0	1	4	0	0	0	0	0	0	1	4
合計		88	1,167	366	2,796	6	461	0	0	19	52	460	4,424

第9表　下谷遺跡出土遺物組成表（トレンチ・グリッド）　（単位　点数：個　重量：g）

トレンチ・グリッド	縄文土器		土師器		須恵器		陶磁器		粘土塊		備考
	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	
5トレンチ	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	
11トレンチ	0	0	3	11	0	0	0	0	0	0	
2A-58	1	12	0	0	0	0	0	0	0	0	
2A-59	4	101	0	0	0	0	0	0	0	0	
2A-68	1	15	1	15	0	0	0	0	0	0	
2A-76	1	22	0	0	0	0	0	0	0	0	
2A-79	0	0	1	13	0	0	0	0	0	0	
2A-87	1	25	0	0	0	0	0	0	0	0	
2B-35	2	30	1	14	0	0	0	0	0	0	
2B-36	2	39	7	20	1	6	0	0	0	0	
2B-37	0	0	2	10	0	0	0	0	0	0	
2B-38	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	
2B-39	0	0	3	9	0	0	0	0	0	0	
2B-42	1	23	0	0	0	0	0	0	0	0	
2B-44	3	13	1	2	0	0	0	0	0	0	
2B-45	0	0	7	18	0	0	0	0	0	0	
2B-46	7	34	14	46	0	0	0	0	0	0	
2B-48	0	0	1	4	0	0	0	0	0	0	
2B-49	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	
2B-50	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
2B-51	1	29	0	0	0	0	0	0	0	0	
2B-52	2	10	1	3	0	0	0	0	0	0	
2B-53	1	12	1	12	0	0	0	0	0	0	
2B-55	0	0	4	8	0	0	0	0	0	0	
2B-56	3	34	3	8	0	0	0	0	0	0	
2B-59	0	0	6	31	0	0	0	0	0	0	
2B-63	1	29	0	0	0	0	0	0	0	0	
2B-64	0	0	3	2	0	0	0	0	0	0	
2B-69	0	0	3	12	0	0	0	0	0	0	
2B-70	1	13	0	0	0	0	0	0	0	0	
2B-71	0	0	1	13	0	0	0	0	0	0	
2B-72	8	114	4	15	0	0	0	0	0	0	
2B-75	0	0	1	7	0	0	0	0	0	0	
2B-76	0	0	1	1	1	80	0	0	0	0	

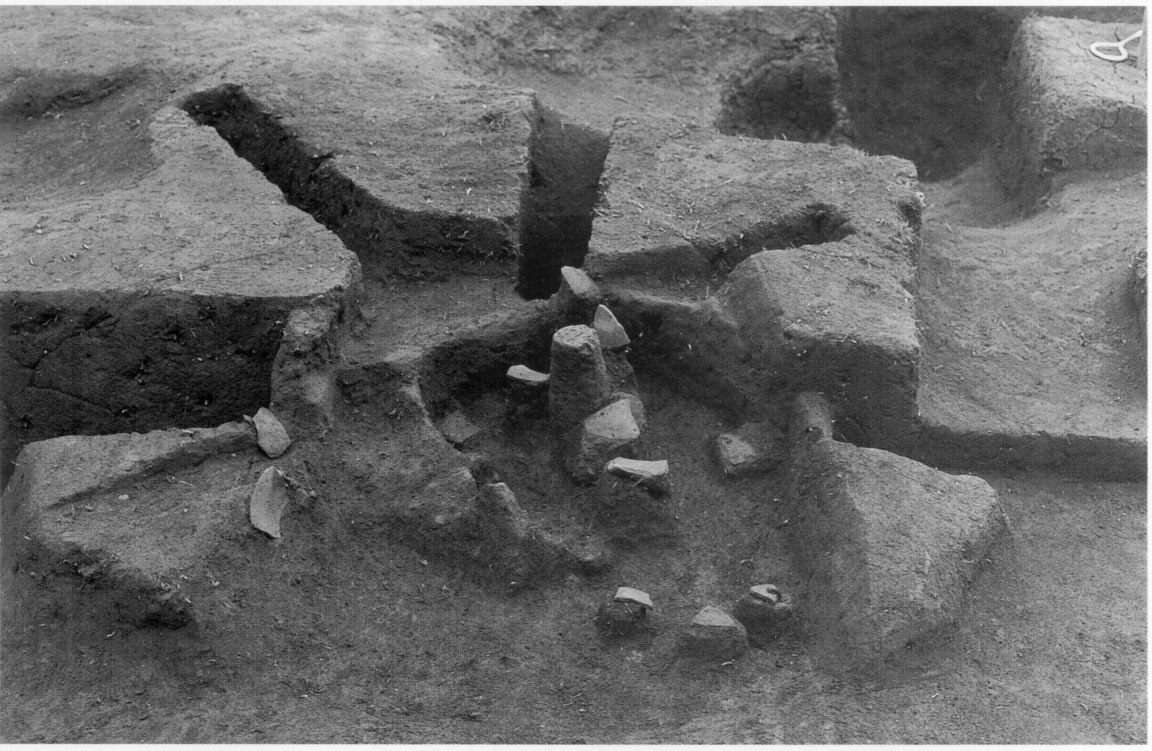
トレンチ・グリッド	縄文土器		土師器		須恵器		陶磁器		粘土塊		備考
	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	
2B-77	1	24	0	0	0	0	0	0	0	0	
2B-79	0	0	6	31	1	4	0	0	0	0	
2B-87	0	0	3	15	0	0	0	0	0	0	
2B-87	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	
2B-95	0	0	0	0	1	10	0	0	0	0	
2B-99	0	0	0	0	1	34	0	0	0	0	
2C-21	1	5	0	0	0	0	0	0	0	0	
2C-22	1	7	0	0	0	0	0	0	0	0	
2C-30	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	
2C-32	0	0	1	5	0	0	0	0	0	0	
2C-41	1	4	1	1	0	0	0	0	0	0	
2C-50	0	0	1	15	0	0	0	0	0	0	
2C-51	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	
2C-56	0	0	1	4	0	0	0	0	0	0	
2C-60	0	0	3	24	1	2	0	0	0	0	
2C-64	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	
2C-65	0	0	1	4	0	0	0	0	0	0	
2C-66	0	0	4	20	0	0	0	0	0	0	
2C-71	1	27	1	2	0	0	0	0	0	0	
2C-73	0	0	1	4	0	0	0	0	0	0	
2C-75	1	10	2	6	0	0	0	0	0	0	
2C-76	1	9	7	32	0	0	0	0	0	0	
2C-77	0	0	0	0	1	5	1	8	0	0	
2C-80	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	
2C-84	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
2C-85	0	0	5	15	0	0	0	0	1	2	
2C-94	1	35	0	0	0	0	0	0	0	0	
2C-95	0	0	1	5	0	0	0	0	0	0	
2F-82	0	0	0	0	0	0	1	24	0	0	
2F-93	0	0	1	10	0	0	0	0	0	0	
3B-29	0	0	3	17	0	0	0	0	0	0	
3B-38	0	0	0	0	1	50	0	0	0	0	
3B-39	0	0	4	6	0	0	0	0	0	0	
3B-49	1	6	2	10	0	0	1	2	0	0	
3C-02	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	

トレンチ・グリッド	縄文土器		土師器		須恵器		陶磁器		粘土塊		備　考
	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	
3C-22	1	20	0	0	0	0	0	0	0	0	
3C-33	1	10	0	0	0	0	0	0	0	0	
3C-34	0	0	1	7	0	0	0	0	0	0	
3C-52	2	5	6	19	0	0	0	0	0	0	
3C-61	0	0	1	1	1	37	0	0	0	0	
3C-62	0	0	1	21	1	133	0	0	0	0	
3F-10	0	0	2	5	0	0	0	0	0	0	
3E-36	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	
3E-38	2	38	1	2	0	0	0	0	0	0	
3E-45	1	22	0	0	0	0	0	0	0	0	
3E-47	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	遺物無し
3F-11	1	17	0	0	0	0	0	0	0	0	
3F-12	0	0	1	8	0	0	0	0	0	0	
3F-13	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	
3F-20	4	34	13	71	0	0	0	0	0	0	
3F-21	0	0	2	19	0	0	0	0	2	4	
3F-25	1	37	0	0	0	0	1	6	0	0	
3F-30	2	13	0	0	0	0	0	0	1	4	
3F-31	3	30	8	61	0	0	0	0	0	0	
3F-34	0	0	0	0	1	6	0	0	0	0	
3F-41	4	23	0	0	0	0	0	0	0	0	
3F-44	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	
3F-51	1	7	0	0	0	0	0	0	0	0	
3F-52	2	31	3	6	0	0	0	0	0	0	
3F-64	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	
3F-65	0	0	1	11	0	0	0	0	0	0	
3F-71	6	82	20	112	0	0	0	0	0	0	
3F-74	0	0	1	27	0	0	0	0	0	0	
3F-94	0	0	4	12	0	0	0	0	0	0	
4E-07	0	0	5	9	0	0	0	0	0	0	
4E-04	2	18	0	0	0	0	0	0	0	0	
表　採	6	113	11	41	0	0	0	0	0	0	
合　計	91	1,189	211	949	12	369	4	40	4	10	

写 真 図 版

遺跡周辺航空写真（1：10,000）

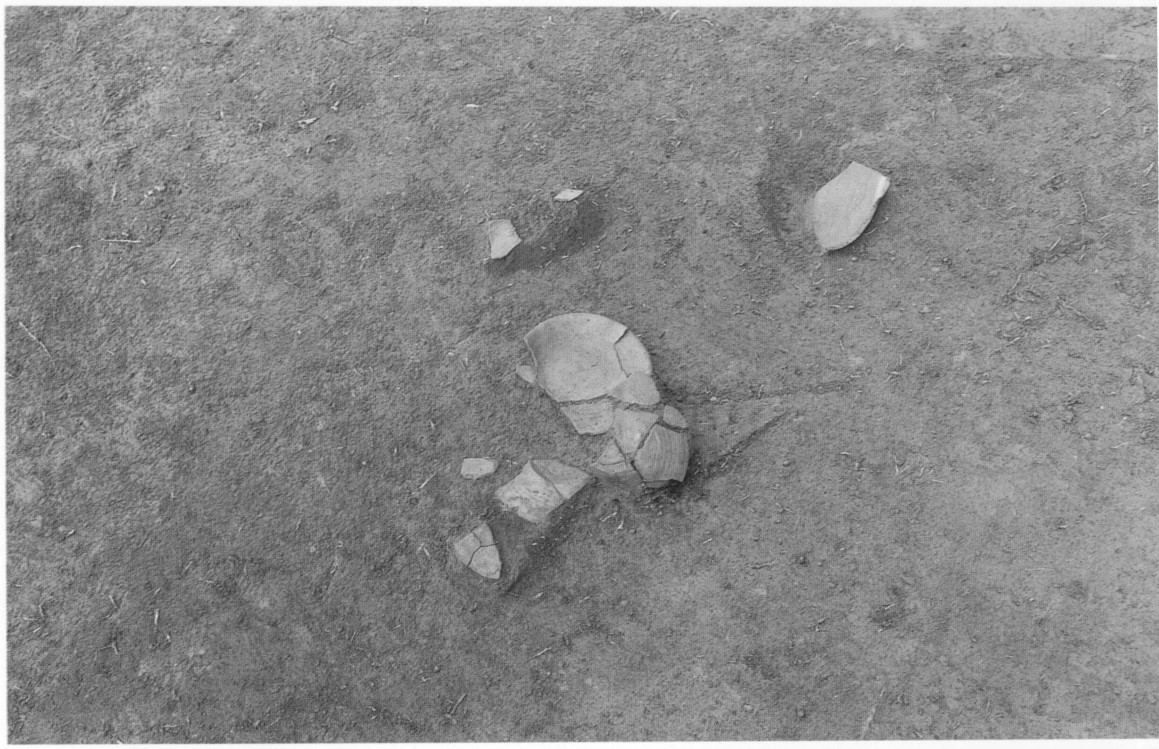
SI - 001 完掘状況



SI - 001 カマド遺物出土状況

SI - 001 カマド完掘状況

SI - 012 完掘状況



SI - 012 遺物出土状況

SI - 012 カマド完掘状況

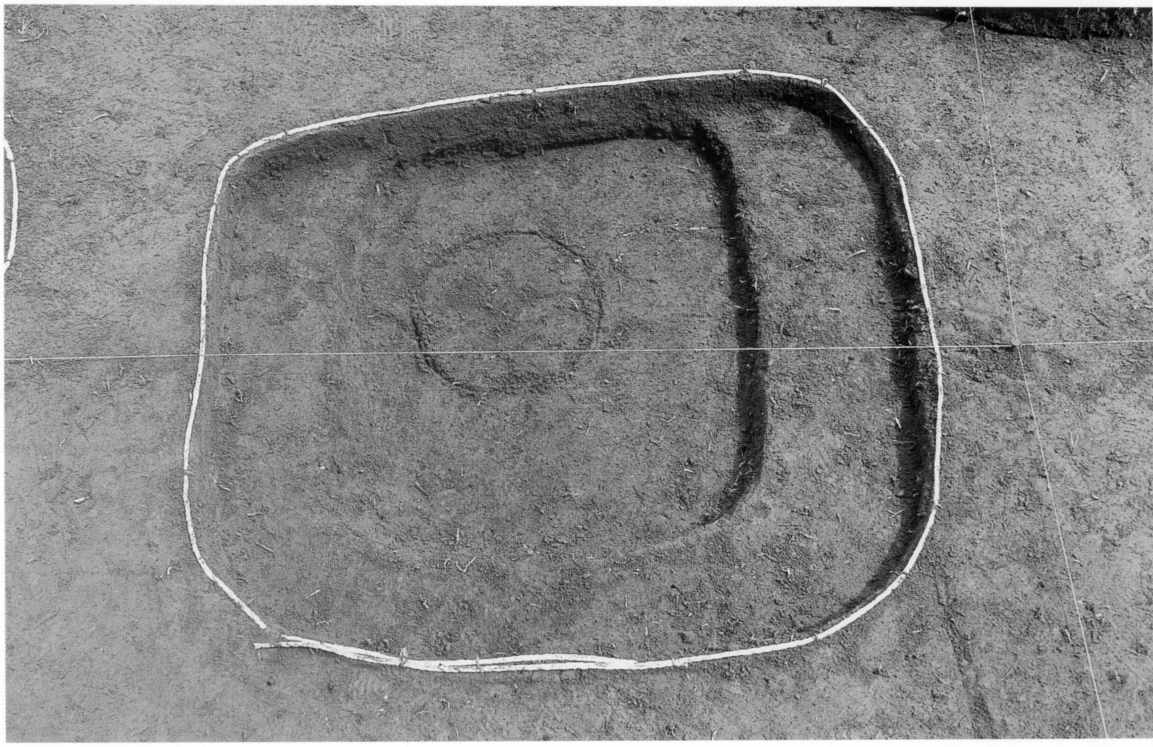
図版 4

SI - 014 完掘状況

SI - 014 カマド完掘状況

SB - 004 完掘状況

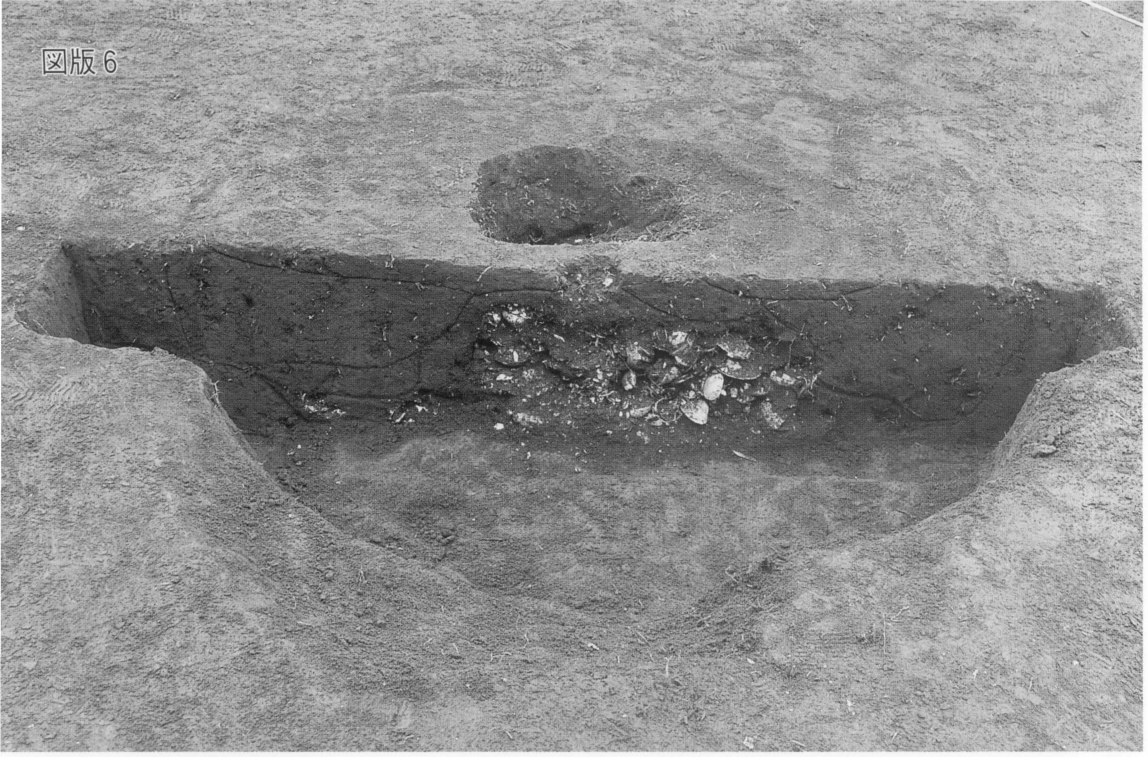
SB - 003 検出状況



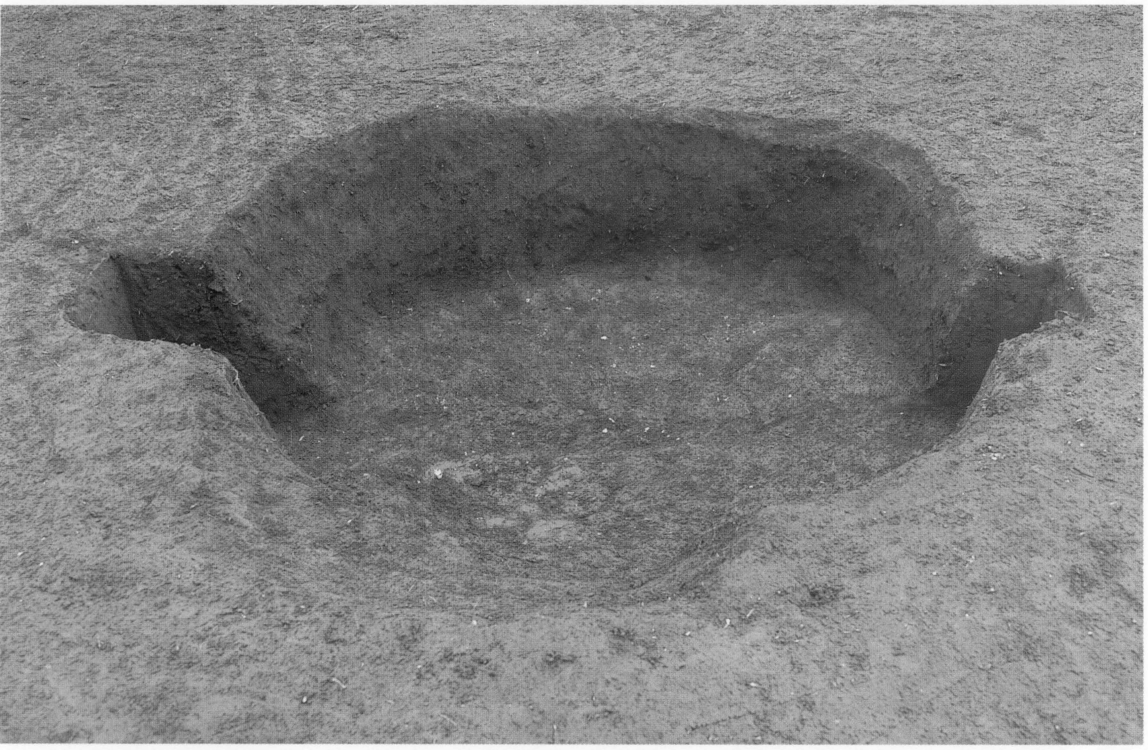
SB - 003 柱穴検出状況

SS - 001 完掘状況

図版 6

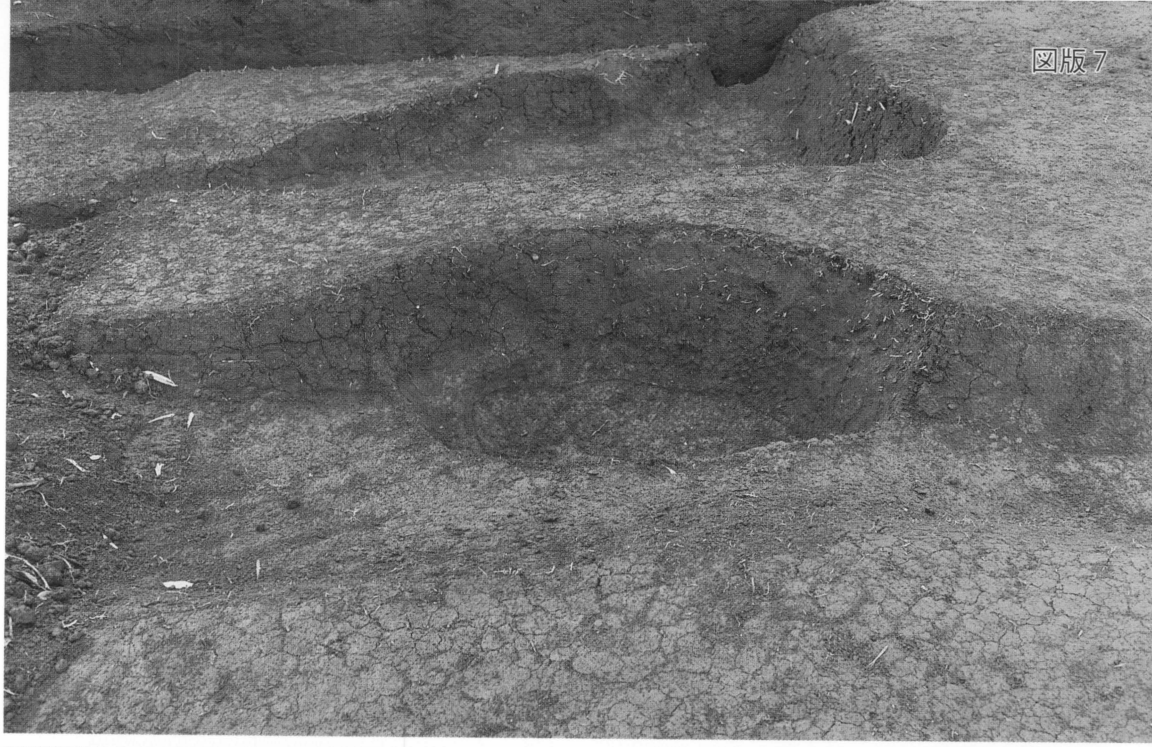


SK - 003 土層断面

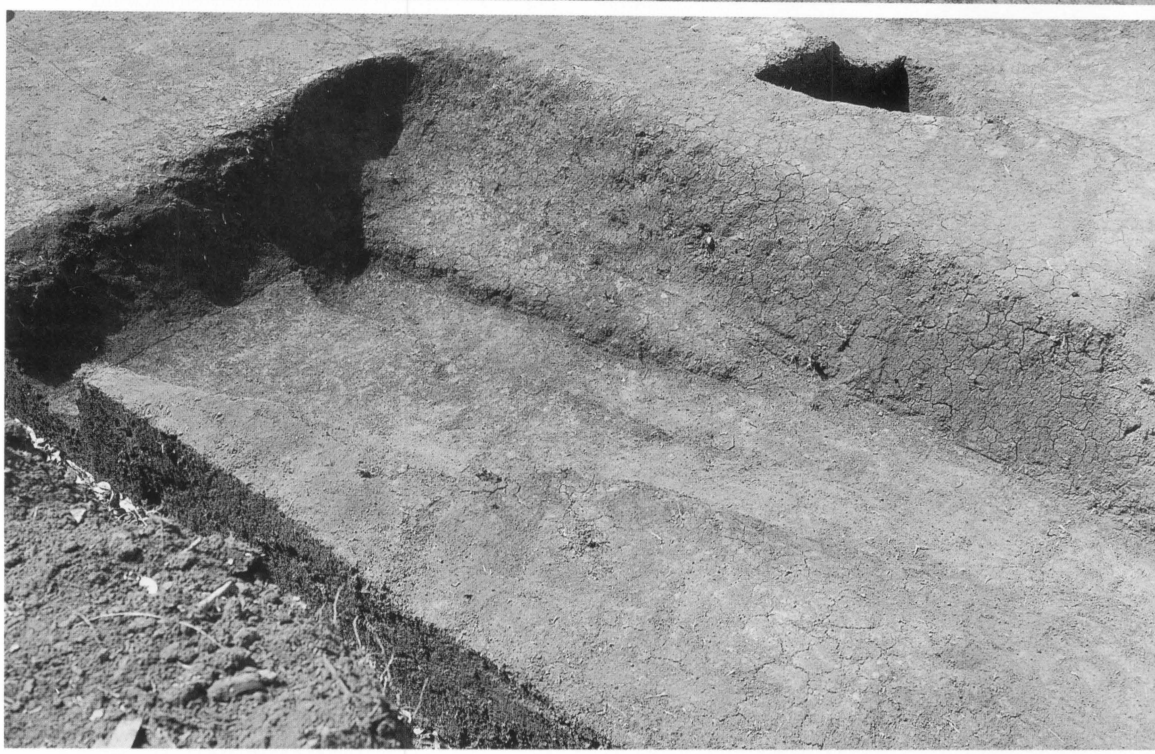


SK - 003 完掘状況

SK - 004 完掘状況



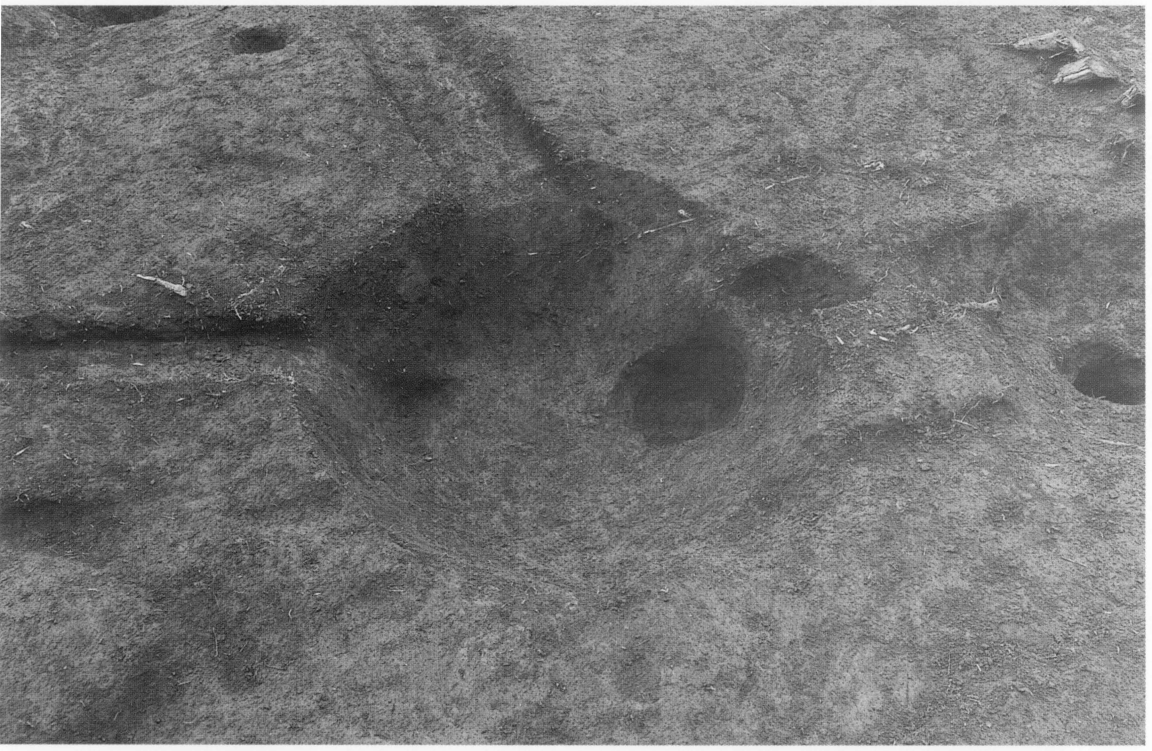
SK-001 完掘状況



SK-002 完掘状況

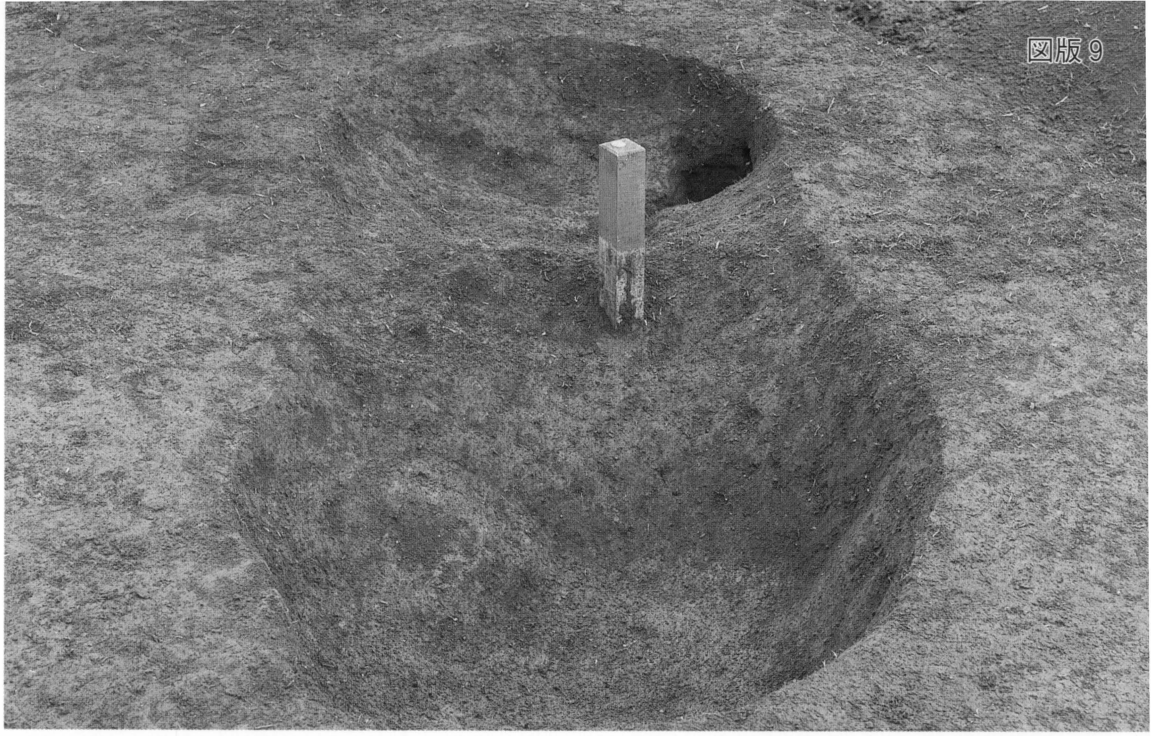
SK-008 完掘状況

SK - 009 完掘状況

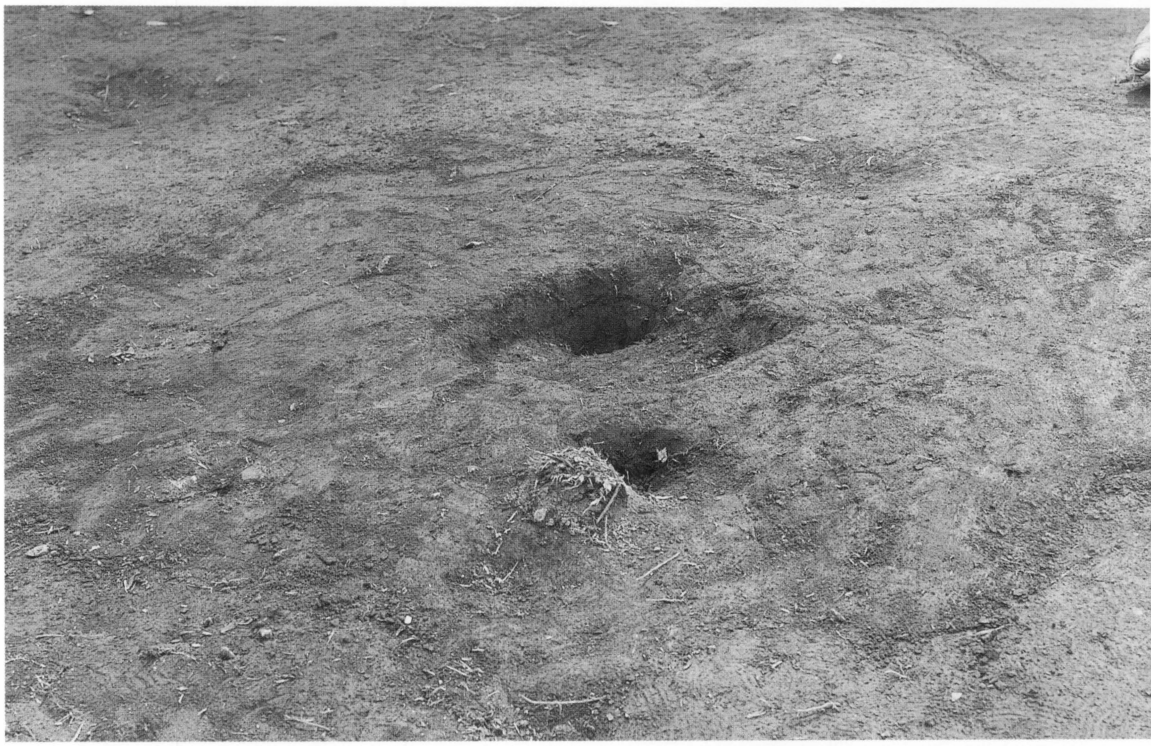


SK - 010 完掘状況

SK - 011 完掘状況



SK - 012・013 完掘状況



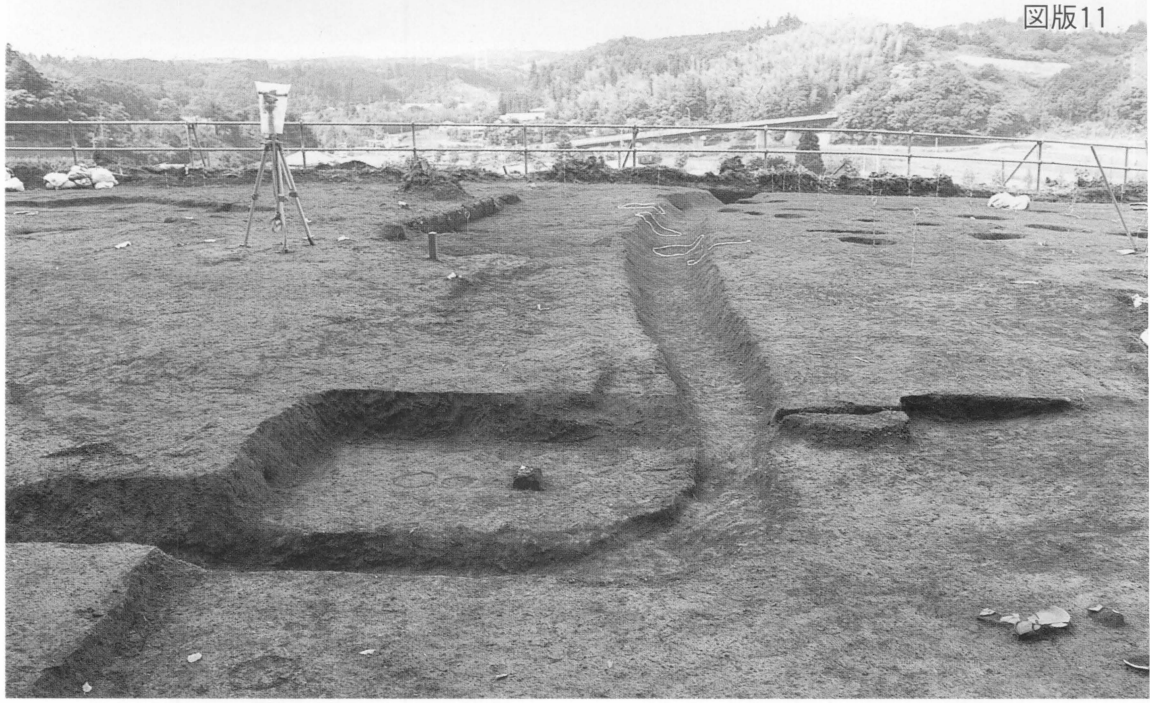
SK - 015 完掘状況

SD - 001 完掘状況

SD - 002 完掘状況

SD - 003 完掘状況

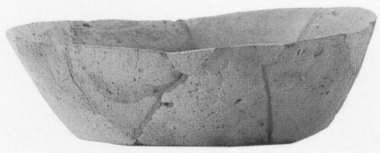
SD - 005 完掘状況

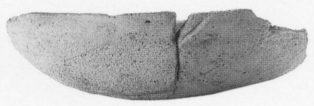


SD - 007 完掘状況

SD - 007 完掘状況

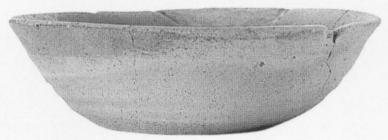
SD - 009 完掘状況

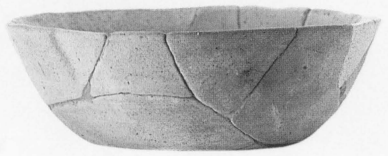

第13図1


第13図2

第13図3

第17図1

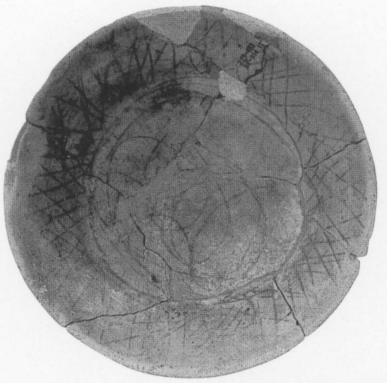

第17図2

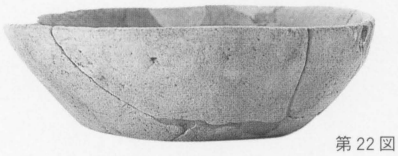

第17図3

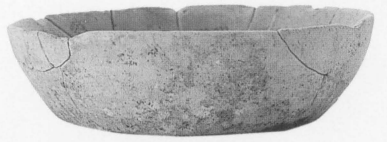
第17図4

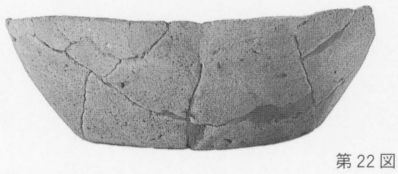
第17図5

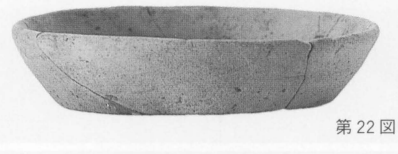
第17図6


第22図1


第22図2


第22図3


第22図4

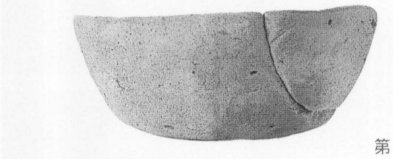

第22図5

第22図6

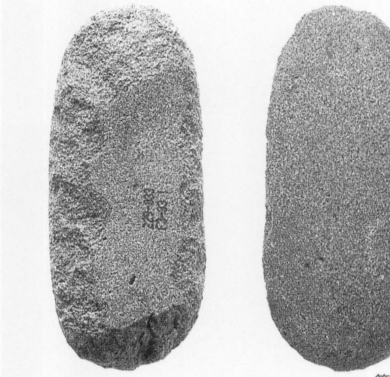
第22図9

第26図1

第34図1

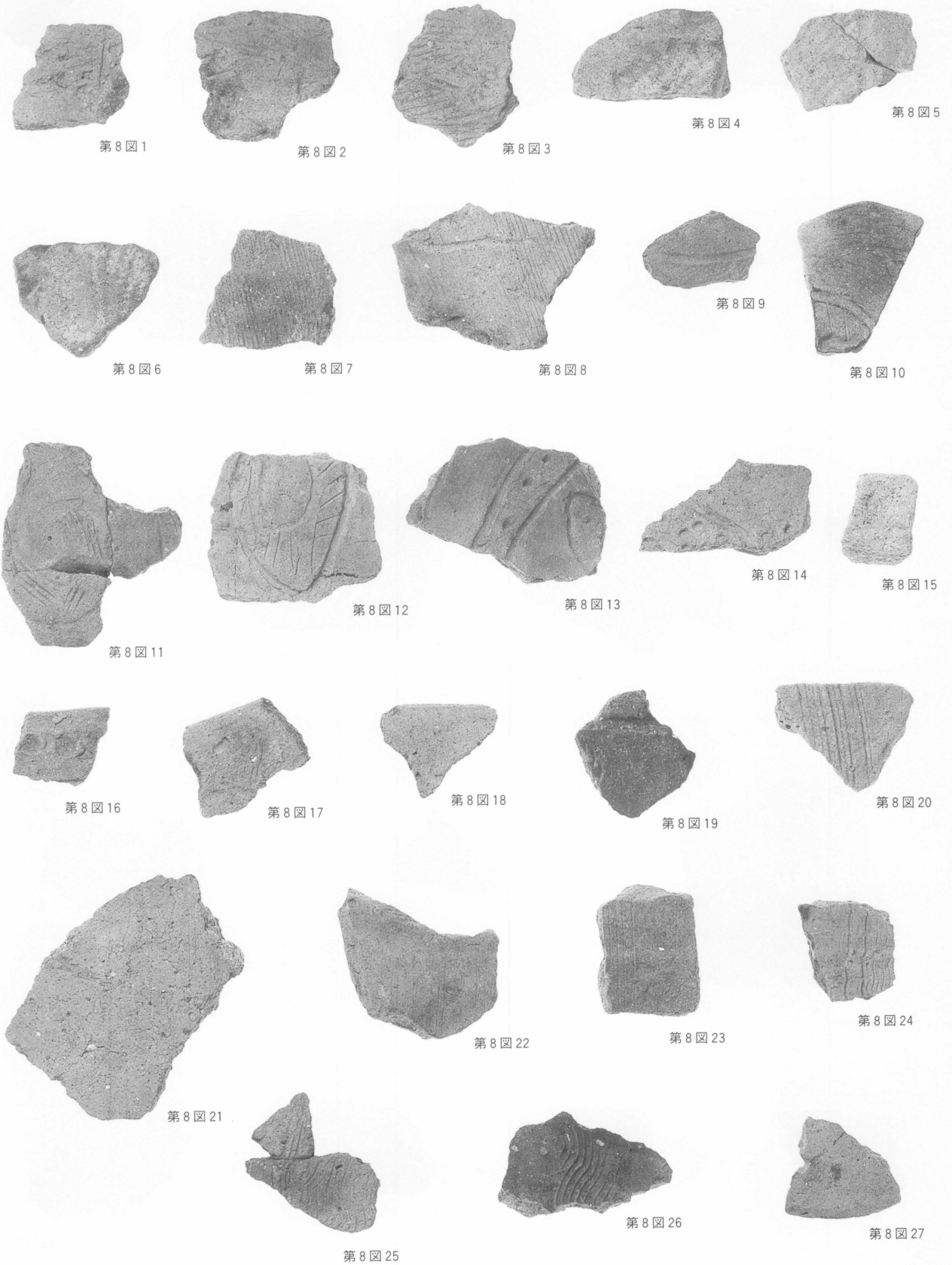

第34図2

第13図5


第8図28

第46図1

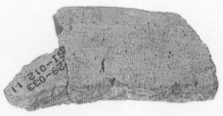
出土遺物


第8図1
第8図2
第8図3
第8図4
第8図5
第8図6
第8図7
第8図8
第8図9
第8図10
第8図11
第8図12
第8図13
第8図14
第8図15
第8図16
第8図17
第8図18
第8図19
第8図20
第8図21
第8図22
第8図23
第8図24
第8図25
第8図26
第8図27

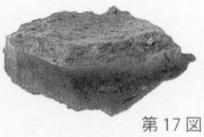
縄文土器

第17図7

第17図8

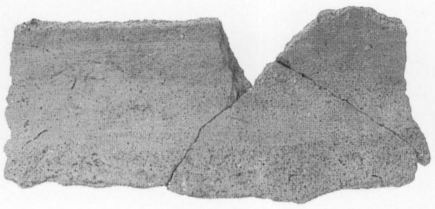


第17図9



第17図10

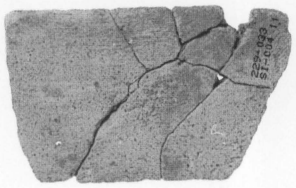
第22図7



第22図8

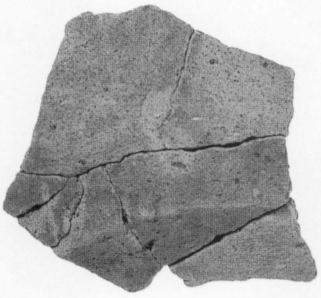
第33図1

第34図3



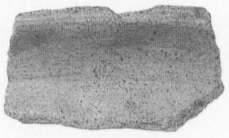
第34図4

第34図5



第34図6

第34図7



第34図8

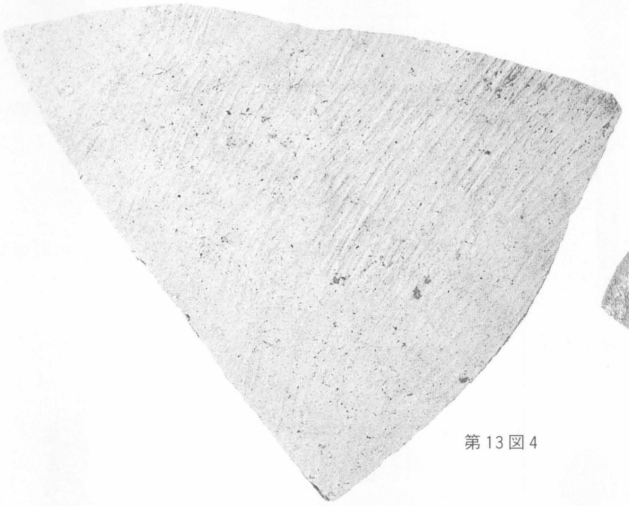
第34図9

第34図10

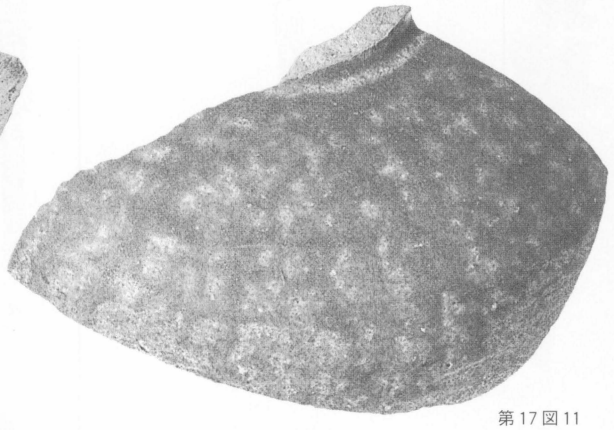
第34図11

第34図12

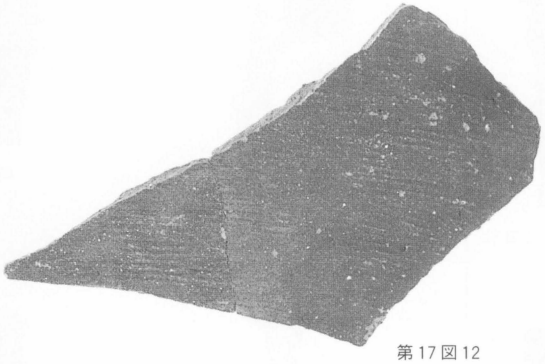
土師器



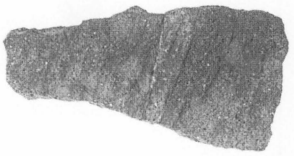
第13図4



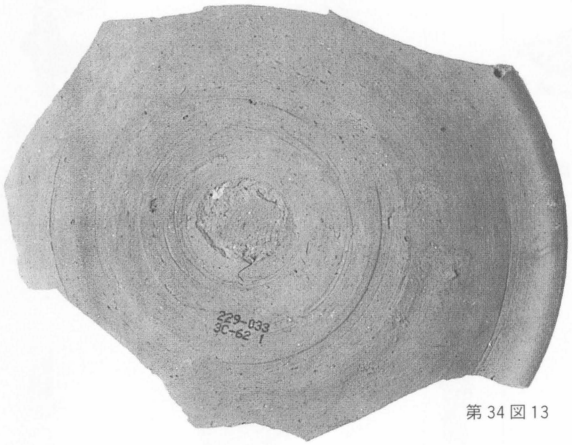
第17図11



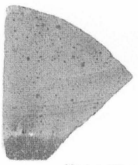
第17図12



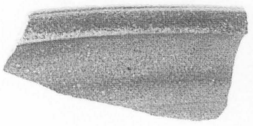
第17図13



第34図13

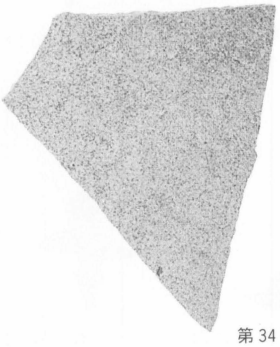


第34図14



第34図15

第34図16



第34図17

第34図18

第34図19

第34図20

須恵器

第30図1

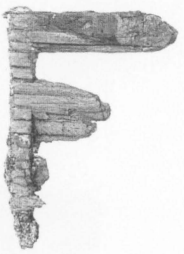
第30図2

第30図3

第30図4

第30図5

第30図6


第30図7

第30図8

第30図9

第30図10

第30図11

第30図12

第30図13

第30図14

第30図15

第30図16

第31図17

第31図18

第31図19

第31図20

第31図21

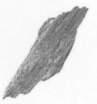
第31図22

第31図23

第31図24

第31図25

第31図26


第31図27

鉄釘（表）

第30図1

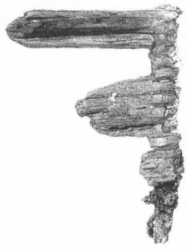
第30図2

第30図3

第30図4

第30図5

第30図6


第30図7

第30図8

第30図9

第30図10

第30図11

第30図12

第30図13

第30図14

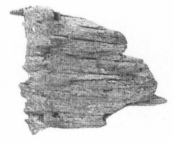
第30図15

第30図16

第31図17

第31図18

第31図19


第31図20

第31図21

第31図22

第31図23

第31図24

第31図25

第31図26

第31図27

鉄釘（裏）

報告書抄録

ふりがな	しゅとけんちゅうおうれんらくじどうしゃどうまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書
副書名	袖ケ浦市下谷遺跡
巻次	6
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第574集
編著者名	半澤幹雄・高梨友子
編集機関	財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809番地の2　　Tel 043-424-4848
発行年月日	西暦2007年3月23日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		経緯度		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
下谷遺跡（しもやついせき）	袖ケ浦市下宮田（そでがうらししもみやた）字下谷（あざしもやつ）91ほか	12225	033	35度21分17秒	140度00分48秒	20030407～20030530	2,200㎡	道路建設に伴う埋蔵文化財調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
下谷遺跡	包蔵地	縄文		縄文土器（早期・中期・後期）、石器（打製石斧）	
	集落 墓域	奈良・平安	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、方形墳墓、溝状遺構	土師器、須恵器、鉄釘	溝で区画された四面廂の掘立柱建物跡を検出 方形墳墓の主体部から貝層とともに火葬人骨、鉄釘が出土
		中世以降	土坑、溝状遺構	砥石	

千葉県教育振興財団調査報告第574集

首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書６

－ 袖ケ浦市下谷遺跡 －

平成19年３月23日発行

編　　集　　財団法人　千葉県教育振興財団
文化財センター

発　　行　　国土交通省関東地方整備局
千葉国道事務所
千葉市稲毛区天台５丁目27番１号
財団法人　千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の２

印　　刷　　大和美術印刷株式会社
木更津市潮浜２－１－10